
桃源郷の暑い夏

ブラボー6

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桃源郷の暑い夏

【Nコード】

N57240

【作者名】

ブラボー6

【あらすじ】

2011年、日本南方に突如として出現した「国端新島」。
9年後。その領有を巡り日中が武力衝突。
双方多数の犠牲を出した紛争が終わろうとした時、別の世界より「第三勢力」が現れた。

これは、狂気の18時間を戦い抜いた自衛官達の戦闘記録である。

この作品は投稿小説サイト「Arcadia」にも載せさせて頂いて

おります。

架空のノンフィクション小説形式で淡々と進みます。

人体破壊描写が多いのでご注意ください。

ファンタジーが好きな方にこそ読んで貰い、突っ込んで頂ければ幸いです。

プロローグ

この度チラシの裏より移動して参りました、ブラボー6と申します。移動にともない、タイトルを「奪還部隊」より変更いたしました。お手間でなく読んで楽しんで頂ければ光栄であります。

何卒初心者でありますので、何か不文律や投稿規約に知らずに触れているようなことがありましたら、直ぐ是正しますので、お手数ではありますがお指摘の程をお願い申し上げます。

本作は架空の近未来での「ノンフィクション小説」という設定になっております。

ファンタジーパートは中編より出現する予定であります。

尚、組織や兵器等の名称、編成、諸元が実際とは異なる場合がございます、あらかじめご了承ください。

既存のファンタジーとはかけ離れ、喧嘩を吹っ掛けた内容となっておりますが、むしろファンタジーが好きな方にこそ読んで頂き、突っ込んで貰えれば幸いです。

なお、本作は「小説家になろう」にも掲載させていただいております。

桃源郷：中国版理想郷の意味。国端新島の別名。

戦時中に北中国軍将兵が、島の奇怪な生態系を皮肉ったのが由来。

沖縄県国端新島。

全周189キロ。東地区、中央地区、西地区の三つに区切られ、広大な森林地帯と水源地があり、中央地区の岩山「国端富士」の地下には、無数の洞窟と遺跡と思われる人工物が確認されている。

国端新島と周辺国年表概略。

〈沖縄沖地震〉

2011年9月3日未明。

沖縄南東沖204キロを震源とするマグニチュード7強の地震が発生。

これにともなう津波により沖縄九州全域、中国東海地区、朝鮮半島黄海沿岸部、フィリピン諸島が甚大な被害を被る。

同年9月4日。

海上保安庁が震源地海上に「島」の存在を確認。
日本政府「国端新島」と命名し領有を宣言。

当初その出現は海底火山による海底隆起と発表される。

しかし発見時すでに島内に樹木が群生しているなど、海底隆起では説明できない事象が多々あり、調査活動も津波による被害の復旧の為、調査が始まるのは2012年末からとなる。

2013年5月20日。

日本、沖縄沖地震の復興も終わり同島開発と調査に本格的に着手。地下資源などの発見はなかったが未知の鉱物や植物、遺跡と思われる人工物を発見。

南北縦断道路と灯台、港湾設備を整備。気象観測所を建設する。

同年9月31日。

中国政府が「国端新島」の領有権を主張。

日本の同島整備事業の中止を要求。

日本政府、これに対し抗議するも対外摩擦を避けるため開発事業を一時凍結。

〈北朝鮮動乱〉

2015年2月23日。

北朝鮮で内乱。

沖縄沖地震の津波による被害が止めとなり、体制崩壊とともに無政府状態に。

北朝鮮国内より難民が韓国、中国国境に殺到。

日本にも対馬と博多に武装難民が大挙して漂着。

極度に治安が悪化し一時騒乱状態。九州全域に戦後初の戒厳令布告。後に国防体制の見直しの切っ掛けとなる。

〈第2次朝鮮半島危機〉

同年3月1日。

人民解放軍が北朝鮮国境を南侵。

「中国に亡命した北朝鮮政府高官からの要請により」北朝鮮の信託統治を宣言。

これに米韓猛反発。人民解放軍の撤退を巡り38度線で韓国軍、在韓米軍と一触即発状態に。

〈インドネシアイスラム革命〉

同年8月4日。

インドネシアでイスラム過激派が武装蜂起。

各地で外国人虐殺と国外企業の排斥が繰り広げられる。

インドネシア政府の要請により秩序回復の為多国籍軍が介入。

半島危機に兵力が拘束された米軍に代わり、米国の圧力で日本がPKF初参加。自衛隊過去最大規模の海外展開となる。

しかし装備、法整備の不備から犠牲が続出。

今後の活動に大きな課題を残す。

2016年1月16日。

ロシアの仲介で半島危機が終結。

中国軍が少数の治安部隊を残し、北朝鮮国内より撤退する。

〈中華内戦〉

2018年8月15日。

中国でクーデター。

香港特別行政区を本拠地とする自由主義勢力と中国共産党が南北に別れ内戦に突入。

この混乱で北中国（共産党）で在留邦人の殺傷事件が続発。日本政府、北中国政府に嚴重抗議する。

同年10月9日。

南中国（自由主義）への海上航路封鎖の為、北中国の潜水艦が尖閣諸島近海に出没。

同年10月18日。

尖閣諸島付近を哨戒中だった海上自衛隊の護衛艦が、国籍不明の潜水艦を捕捉。追尾したところ当該潜水艦に雷撃される。

北中国政府は関与を否定するも音紋データの解析により、北中国軍青海艦隊所属の「漢」級潜水艦と判明。
以降日中関係が急激に悪化。

〈第3次台湾海峡危機〉

2019年9月28日。

台湾が南中国政府支援を表明。台湾国内の海軍基地の使用を認める。
北中国政府、青海艦隊に台湾侵攻準備と思われる空母を含む機動部隊の編成を指示。

米機動部隊が台湾海峡に急行。
アジア全域が緊張状態に。

同年10月2日。

北中国軍空挺部隊が国端新島を占拠。
日本政府、国連安全保障理事会に提訴。北中国政府に国端新島からの即時撤退を要求。

北中国政府、南中国が台湾と結託し東シナ海の海上ガス田奪取を目

論んでいるとの「国防上の問題」と、かねてから主張している「沖縄トラフト」を理由に、国端新島中国領土編入を通告。しかし国端新島を台湾攻略の前線基地兼最終防衛拠点にする意図は明白であった。

国端新島に中国名「青宝島」と命名し、さらに一個軍団の増援を送り込み防備を固める。

日本政府、非常事態を宣言。自衛隊に防衛出動待機命令を発令しアメリカ政府に日米安全保障条約に基づき軍事支援を求める。

アメリカ政府、非公式会談で「尖閣諸島近辺は日米安保の対象外」との立場を示す。

自衛隊への情報支援は確約するも、台湾海峡危機の対応で戦力に余力がないことを日本側に理解を求める。

同年12月8日。

日本政府、国家安全保障会議で自力での国端新島奪還を決断。

自衛隊に奪還部隊の編成を指示。

2020年3月26日。

第15師団を中心とした陸海空奪還部隊編成完結。

西表島で上陸演習開始。

北中国政府圏内の邦人に帰国命令。

同年5月17日。

北中国政府、国連に世界地図の「国端新島」から「青宝島」への表記変更を申請。

日本政府猛反発。

同年7月20日。

奪還部隊訓練終了。

日本政府、北中国政府に対し最後通告。

北中国政府これを拒否。駐日大使を召還。

日本政府、同日午後より北中国大使館（旧中国大使館）を閉鎖し、中国関連防諜網の一斉摘発を開始。徹底した情報統制に入る。

同時に沖縄九州全域に戒厳令を布告、予備自衛官の招集を始める。

北中国政府は日本の大使館閉鎖と予備役動員を受けて、日本側が国端新島奪還に本気であると気付き、青宝島守備隊に警報を出すも既に遅し。青宝島防衛体制は大幅に遅れた。

〈国端新島事変〉

同年7月25日。

国端新島奪還作戦「ほむら」発動。

自衛隊奪還部隊、北中国軍「青宝島守備隊」との戦闘に突入。

同年8月3日。

青宝島守備隊司令部が全滅。組織的抵抗が終結し戦闘は掃討戦に移行。

同日北中国政府が国連安保理を通じて南中国と日米政府に停戦交渉を打診。

以後アジア一帯の緊張は緩まり、国端新島事変は終結に向かう……
筈だった。

午前8時35分？（前書き）

ほほ、身内ネタです。

午前8時35分？

「絶対日本じゃねえ」

高度300メートルを飛行するヘリコプター、CH-48JBのキヤビンに完全武装の男達が狭い機内で寿司詰めとなっていた。

その中の1人。山岡大樹は開け放たれた後部ハッチから眼下を見下ろし呟いた。

切り立った山影。

乱立する直径2メートル以上の幹の巨木。

恐ろしく透明度の高い湖。

おおよそ自分の知っている日本の風景とかけ離れた光景に、まるで別の惑星の上を飛んでいるような錯覚に陥っていた。

山岡は今年で19歳の一等陸士。第17普通科連隊、第3中隊、第2小銃班の擲弾手だ。

彼は地元の山口県の高校を卒業後、自衛隊に入隊した。

理由は、人生の一部となっている柔道を社会人になっても続けたかったからだ。

神奈川県武山駐屯地で前期教育を受けた後、東京の練馬駐屯地で普通科（歩兵）としての後期教育を受けた。

その後自衛隊のオリンピック選手養成機関である埼玉県朝霞駐屯地にある自衛隊体育学校に送られた。

しかし世界への壁は厚く、中高と県大会優勝の実績を持つ彼の技量を持ってしても超えられなかった。

結局、半年ほどで体育学校を去る事になり、その時は退職を考えた

が、折角自衛隊に入ったのだから大型免許くらいは欲しいと思い、自衛隊に留まることを決意した。

地元がある第17普通科連隊に配属を希望し、着隊したのが3ヶ月前。

まさかの有事出来である。

重苦しい空気が支配する機内で、視線を前に向けると小隊陸曹、谷本学一等陸曹がいた。

自衛隊歴21年の43歳。

物静かなマラソンが趣味の男で性格は至って温厚。

滅多に声を荒げる事はないが、人を見る観察眼は鋭い。

先週、小児癌で6歳になる1人娘を亡くしている。

隊員には何事も無かったかのように、気丈に振る舞ってはいるが、彼の表情には影がついてまわっていた。

小隊陸曹の右隣には一班長の小山亨二等陸曹がいた。

小隊のポジションで言うなら、谷本が仏で小山は鬼だ。

レンジャーの有資格者で、指導矯正に直ぐに手が出ることから、班員からは「軍曹殿」と呼ばれていた。

特に190センチを超える体躯を利用して繰り出す、頭頂部への垂直の拳骨打撃は神話の武器に因んで「トオル・ハンマー」と呼ばれ恐れられていた。

これを受けた者は、例え鉄帽ヘルメットの上からであっても脳震盪を起こす。

自分のすぐ左には二年先輩で山岡の教育係、大野汰一陸士長が広い肩幅を無理矢理縮めて座っていた。

中隊の選拔射手で狙撃手を務めている。

熱烈な戦争映画ファンでもある大野は、よく映画から台詞を引用したりする。

離陸の時など映画の名セリフに因んで「アイリーン!!」と叫び周囲の失笑を買っていた。

本人は気合いを入れようとしたらしい。

直後に小山二曹から「縁起が悪いだろ」と拳骨を喰らった。

彼は中隊の「トオル・ハンマー」被弾記録保持者でもある。

今は小山二曹に聞こえないよう小声でワグナーの、ワルキューレ騎侯を口ずさんでいる。

右側、山岡を挟んで大野と小声でハミングしている分隊支援機関銃手の金突良博陸士長がいた。

大野とは同期入隊で、趣味が黒魔術と言う変わり者である。

「呪術師」と渾名される彼は、どういう訳か大野とは気が合い、相棒のポジションに収まっている。

このコンビが中隊の忘年会や結婚式等で披露するコント「大明神カオス金突」は毎回大好評で、他中隊からも出演依頼がくる程だ。

最近このコントに山岡を引き込もうと画策しているらしく、山岡は逃げ回っていた。

小隊長の後田義明三等陸尉がインターホンを通じて到着時間を告げた。

後田三尉は部隊内幹部候補生、通称部内幹候上がり叩き上げ。幹部として部隊を預かったのはこの第2小隊が初めてだった。

「後5分!!」

山岡は89式小銃を引寄せ着陸に備えた。

彼の武器・・・89式小銃3型には銃身の下に40ミリグレネードランチャーを取り付けられている。

164センチしかない山岡が持つと、かなりアンバランスに見えた。大野が大口を開け、ビニールテープを、マウスピースよろしく突っ

込んだ。

何の積もりかと聞いてみたら、「前の降下訓練で舌を噛んだ」と答えた。

そしてニカッと笑い、山岡にビニールテープを差し出した。

ちょっと、僕もやれと!?

すかさず小山が「降下はしねえって言ったろうが!」と大野にトオル・ハンマーを見舞った。

ビニールテープに噛み千切らんばかりに歯が食い込んだ。

「良かったな、それ無駄にならなくて!」

こっそりビニールテープをポケットに仕舞いながら金突が大笑いした。

それに周りもつられて笑った。

24人の大爆笑に機内に張り詰めていた重い空気が和らいだ。

後田三尉もこの日初めての笑顔を見せた。

部下達がいつもと変わらないことを知り安心したようだ。

機付長まで笑っている

山岡も胸を撫で下ろしつつ笑った。

この、束の間の笑顔見せる、小柄の擲弾手にとって、国端新島は人生で忘れられない戦場となった。

自衛隊奪還部隊との激戦の末、北中国軍青宝島守備隊は、東西に分断され、主力部隊は中央地区の標高300メートルもない岩山、通称「国端富士」に追い詰められ、総攻撃を待つ身となった。

山岡が所属する第17普通科連隊は、有事勃発より山口市内で重要防護施設の警護任務についていたが、今朝未明、第3中隊に国端新

島への移動命令がきた。任務は、第15師団隷下で東地区の敵残存部隊掃討だった。

2020年8月3日。

全世界を「キューバ危機」以来の恐怖に陥れた、運命の1日が始まった。

午前8時35分？

「ここ、やっぱり中国じゃないヨ」

国端新島東地区森林地帯。

防空砲兵、李太平上等兵は、乱立する巨木の内の一本、幹の直径が5メートルを超え、高さが三階建てのビルほどある木の天辺に独り、双眼鏡と携帯無線機を背負って日本軍の無線交信に聞き耳を立てていた。

李は先月23歳になったばかりの上海出身の若者でインターネット関係のシステムエンジニアを志していた。

大学在学中、日本に留学したいと思い、奨学金を申請したが、選考から漏れてしまい、卒業後日本への留学を諦めきれず、除隊後の奨学特典を目当てに陸軍に入隊した。

それが運の尽きだった。

内戦で北京の防空任務に就いていた彼の部隊は、「青宝島防衛作戦」発動と同時に引き抜かれてしまったのだ。

李は中距離地对空ミサイル、紅旗4のレーダー手だったが、彼の履歴書を見て、大学で日本語を専攻していたこと知った上官が、彼を司令部付通信大隊に転属させ、傍受した日本軍の交信内容を翻訳させた。

日本語を覚えた理由が理由なだけに、監視も兼ねての人事だったよう、任務中は背後に「傍受分隊長」という名の監視役が常に張り付き、サボタージュを警戒しているのか翻訳内容に不審な点がないか常に目を光らせていた。

お陰で原隊の対空陣地が空爆され壊滅したとき、死なずに済んだが。東の空を見上げると、日本軍のヘリコプター編隊が悠然と海岸線を飛んでいた。

昨日まで1日2、3回は来ていた友軍機の姿はなく、傍受無線も暗号化通信ではなく、ただの平文の交信が増えていた。

戦争、負けたかな？。

そんな事は司令部が壊滅した時点で解っていたことだが。どの道、戦争に勝とうが負けようがもう留学の機会は永遠に無さそうだ。

新たな爆音が李を現実に取り戻した。

今度は別の方角から日本軍の偵察ヘリが近づいてきた。

この先南に2キロの地点に、氣象観測施設がある。

日本が数年前に建てた物で、昨日まで砲兵隊が本部兼兵舎として利用していた。

潮時だ、それに交代時間はとくに過ぎてる。

李は足場の幹にくくりつけたロープを手繰り地上へと降下した。

「だから、俺は彼女に言ったのサ。『それでも俺と一緒にいたいのか？』って」

直下、巨木の根元。

楊宝栄下士（軍曹）は、既に30分近くこの海軍陸戦隊員の熱弁を聞き続けていた。

顔半分を汚れた包帯で覆い、爆撃で左目を失ったという彼は、内戦が始まる前は第2海兵旅団で香港に勤務していて、その時知り合っ

たモデルの女と結婚する約束をしていたらしい。

3年前自分が北朝鮮に出兵するとき彼女からプロポーズされ、無事帰ってきたら一緒になることを約束していた。

しかし、彼は北朝鮮で反政府組織・・・というよりは野盗軍団との戦闘で重傷を負い、旅順の海軍病院に収容された。

仕事で香港を離れられなかった彼女とは手紙とメールの遠距離恋愛を続け、退院したら名誉除隊して香港に向かう予定だった。

だが内戦が始まり、彼女とは音信不通になってしまったと。

「部隊に復帰したのは命令されたからじゃない、自分から志願したのサ。何も香港に強襲上陸しようなんて考えてない」

熱弁はまだ続いた。

「ただ俺は1日でも早く戦争を終わらせて彼女に会いに行きたいのサ。彼女は売れっ子のトップモデルだ、それが俺みたいな男と結婚してくれるってんだ、軽い気持ちじゃない。俺だってそうだ、だから俺も・・・」

楊は辛抱強く陸戦隊員の話を聞き入っていたが、微かな苛立ちは隠せなかった。

それでも陸戦隊員は意に介さず、ますます残った右目に熱を帯びて喋り続ける。

李が地上へ降りたときは丁度そんなところだった。

李は楊の背中から滲み出る焦燥感を感じ取り助け船を出した。

陸戦隊員から死角になるように楊の背後に回り込み、ワザと形式張った動きと声で楊に声を掛けた。

「李上等兵報告します！」

ビックリして振り向いた楊は、顔に微かな安堵が浮かべたが直ぐに済まなさそうな顔を作り陸戦隊員に向き直った。

「すまん、話の途中だけど仕事が入った」

陸戦隊員も流石に話を切り上げた。

「いや、こっちこそ話を聞いてくれて有り難う」

「達者でな、必ず生き延びて彼女に会うんだゾ、こんな気色悪い島で死ぬんじゃないゾ」

その陸戦隊員は楊に軽く敬礼すると、自分の部隊がいる巨木の下へ戻って行った。

彼の姿が見えなくなったところで、楊がやれやれと肩の線を下げた。

「遅いから心配してたヨ、随分長いこと話し込んでたけど、オヤジさん、海軍に知り合いがいたの？」

楊は首を振って答えた。

「いや、今日初めて会った」

心なしか顔のシワの深さが増した気がする。

「たまたま目があったらずっとあの調子だ。最初は水餃子の話だった」

楊は40絡みの予備役工兵で、招集前は食堂の店主だった。

子供が6人いて、いつか子供たち全員で店を切り盛りしたいと語っていた。

若いときには日本の横浜の中華料街で料理人として働いていた事があり、ある程度日本語を話せた。

その為、李と同じ理由で「傍受分隊」に回されてきたのだ。

年齢差と階級の事もあって、緊張気味の李だったが、楊の気さくな性格と、日本での生活の話題で意気投合し、今では階級を超越した間柄となっていた。

「下で変わりは？」

回りを見渡すと、随分と味方の数が減っている。

交代前には300人程いたが、今では森に50〜60人位しかない。

「さっき砲兵旅団の連中が全部洞窟に入って行ったところだ。俺等も撤収の用意しとけてさ」

前日、青宝島守備隊司令部が全滅した後、指揮を引き継いだ第115歩兵連隊本部が、東地区で生き残った兵士達に示した集合場所がこの森だった。

理由は二つ。

一つは、空から完全に隠蔽されていること。

東地区全体を覆う、樹齢千年はありそうな巨木の傘は、空を完全に覆い尽くし、根本で息を殺す北中国兵達を空からの監視の目から隠していた。

それに、生い茂る葉は、どう言う訳か赤外線と電波を遮断し、身を隠すには絶好の場所ではあったが、お陰で李達は危険を冒してメリット確保の為、大木の天辺まで登らねばならなかった。

二つ目は、この森には中央地区へ続く地下洞窟が存在した。

元々この島には、中央山（国端富士の中国名）を中心に、無数の大小様々な洞窟が、蜘蛛の巣状に拡がっており、工兵隊の測量班が確認しただけでも、その数ざっと約13000本。

そのうち、約1500本がここ東地区に集中していた。

北中国軍は、この中から人が通れる7本に手を加え、中央山との地下連絡道兼退避道として使っていた。

しかし、人が通れると言っても、人一人が通れる程度の大きさしかなく、集まってきた生き残りは再編された後、少人数に分けて洞窟に入っていた。

青宝島守備隊臨時司令部は、中央山に残存兵力を結集させ最後の抵抗を試みる腹積もりなのだ。

「招集兵は集合しろ」

この「集結地点」を統括する少校（少佐）がやって来て叫んだ。

元は兵站本部付の将校で、階級の序列で今のポストに据えられた男だ。

神経質そうなヒョロリとした男で、おおよそ軍隊にしながら、戦闘とは無縁な経歴を辿って来たようだ。

戦場で大声を上げるなんて・・・。

流石に、傍らにいた下士官の一人に注意されてる。

「招集兵は私の元に集まれ」

少校が若干トーンを下げて繰り返した。

楊が少佐の元へ向かおうか迷っていると、この集結地点の実質的統

括指揮官、白中尉が楊を手で制した。

白中尉はいつの間にか二人の後ろに立っていた。

「貴様はいい、今の役目を続ける。」

白中尉は北朝鮮の「統治」後、人民解放軍に鞍替えした将校で、噂によると元人民武力偵察部の特殊部隊出身で、中国に亡命してきた北朝鮮高官一族の護衛をしていたらしい。

恐ろしい程冷静さと高い指揮能力を持ち、李達のような「残兵」を拾い集めここまで引っ張ってきた。

司令部から焼き出された李達に、再び同じ任務を与えたのも彼だ。今予備役兵に集合をかけてる少校は、軍隊の指揮系統の原則を守る為のお飾りに過ぎず、白のスピーカーでしかない。

「敵が我々の意図に気づいたらしい、遅滞防御部隊を編成する。だが、お前はそのままだ。日本語を理解できるのは貴様らだけだからな」

酷薄な笑みを浮かべる白中尉に、楊は複雑な心境であった。

そこへ工兵隊の指揮官がきて、白中尉に全ての洞穴の爆破準備に後一時間掛かる事を告げた。

30分で完了させろと言う白に工兵指揮官は手が足りないと訴えた。あと30分。

あと30分が、東地区に生き延びている味方に与えられる制限時間。息を飲む二人に白中尉が向き直った。

「楊下士、貴様元は工兵だったな？」

李の交代はお預けとなり彼は再び木に上り出した。

楊は洞穴に向かう途中、配置に向かう「遅滞防御部隊」の隊列とす

れ違った。

楊は言葉を失った。

「遅滞防御部隊」の殆どは楊のような予備役兵の年寄と「まだ歩ける」負傷兵で編成されていた。

列にはさっきの海軍陸戦隊員の姿もあった。陸戦隊員は楊に気が付くと笑顔で手を振り、足を引き摺る仲間に手を貸しながら観測所へ向かっていった。

午前8時35分？

国端新島西海岸。

15 D P C (第15師団司令部)

第15師団長田中竜也陸将と師団幕僚一同にとって、凶報と朗報が同時にもたらされた。

朗報は北中国が停戦交渉に応じたこと。

既に予備交渉が始まり、近日中には話がまとまるらしい。

この島に1万2千名で乗り込んでから7日間。これまで220名以上の死傷者を出した戦争がやっと終わる。

凶報は東地区の敗残兵が、中央地区の主力部隊に合流しつつあるとの知らせだった。

潜入した情報小隊がもたらした報告で、東地区全域に配備されていた北中国軍部隊が、司令部壊滅後一斉に陣地を放棄。森林地帯に後退中とのことだった。

元々の計画では、東地区を海岸線と中央地区の両面から2個大隊で包囲圧縮、敵残兵を森林地帯に押し込める作戦だった。

しかし、この北中国軍の動きを、好都合と思うほど田中達は楽観的ではなかった。

ゲリラとなって第2戦線を展開するにも、何故身を隠す以外なんの戦略的価値の無い森へ？

東地区森林地帯は広大ではあるものの、溪谷と平原に挟まれた孤立地帯だ。

森に入ったら最後、中にいる間は赤外線も通さぬ樹木に紛れることはできても、一步外へ出れば直ちに空地より捕捉され一巻の終わりだ。木の密度が濃いため重火器も運用できない。

しかも重要高地や補給線、港湾施設からも離れているので放置しても全く問題はない。

それゆえ森林地帯に敵を追い込もうとしていたのだ。

敵がこれ幸いと逃げ込んだ後は、勝手に干上がるのを待てばいい。自ら牢獄に入るかの如く、北中国軍の部隊行動に、意図を感じずにはいられなかった。

国端富士の監視哨から「敵主力の戦力増強を確認」の報せに、田中の疑念は確信に変わった。

まさかとは思いつつ、東地区で捕虜になった北中国兵を問い詰めるとアッサリ「抜け穴」があることを白状した。

中央地理隊製作の自衛隊地図には地下洞穴の記載はない。

裏を取るべく、島の測量と遺跡調査を担当した国土地理院と文化庁に問い合わせたところ、驚愕すべき返答が帰ってきた。

遺跡の戦争利用を良くないとする文化庁の幹部が、洞窟の調査データを隠蔽したのである。

師団司令部は色めき立った。

このまま合流を許したら、敵を東西に分断した意味がなくなる。二つの弱い部隊ではなく一つの強力な部隊になってしまうのだ。

大至急、即応部隊を編成して「遁道」確保しなければ。

場所は気象観測所より2キロ西。

東地区掃討部隊に圧縮を早めさせる訳にはいかない。無理に強行す

れば統制線に穴が出る。敵の後方地域への浸透は、絶対に防がねばならない。

直ちに奄美大島に待機していた機動予備部隊を投入し、不足分は、第17普通科連隊と第2普通科連隊から各1個中隊を増援に出させ充足に当てた。

北中国軍主力の包囲部隊からの兵力抽出は問題外。

敵はまだ有力な重火器を保有している。

幸い、本土へのテロ活動の可能性が低くなったので、すんなり部隊編入の許可が降りた。

現況表示盤に張られていく増援部隊を示すピンを見ながら、田中は頭を抱えた。

田中は第15師団初代師団長となって2年。その前は前身である第15旅団の副旅団長を務めていた。

幹部に任官して以来、イラク復興支援群、沖縄沖地震、朝鮮動乱、インドネシアとずっと現場を駆け巡っていたせいか、齢49歳にして頭は完全に白髪となり実年齢の倍は老けて見える。

「その後、市ヶ谷からは？」

疲労で目が落ち窪んだ情報担当の第2部長が答えた。

「未だ文化庁が情報開示に難色を示しているため、強制執行の手続きを…」

「解った、もういい」

どうせ、そんな処だろうと思った。

懲戒免職では済まさんぞ！

「捕虜からは他に何か聞き出せたか？」

「他に3名、無作為に尋問しましたが、全て答えが一致しております。ただし、何処に繋がっているかは知らされてなかったようです」
十中八九当たりか、次。

「航空偵察」

剃り残した無精髭の長さが3センチを超えた作戦担当の第3部長が魂を吐き出すかのように答えた。

「FLIR（赤外線暗視装置）が役に立ちませんので、大した情報は・・・。ただ、遁道所在地点と思われる地域より、携帯式対空ミサイルによる攻撃を受けました」

以前北中国軍が森にヘリと人力で分解した榴弾砲を持ち込み、秘匿野砲陣地をこしらえていただけに、あの森の秘匿性は敵味方熟知済みだ。

しかし木が鉛でできていると言うのか？

一体この島の生態系はどうなっている！？

やはり対空兵器の待ち伏せが分かった以上、ヘリボーンは不可能だ。したがって、地上より徒歩で敵が待ち構えている中を進まねばならない。

策に溺れた上、戦力の逐次投入の愚策に貴重な予備兵力を摺り減らすことへの忸怩たる思いが田中の脳内を支配していた。

「空自の対地支援体制は？」

「現在那覇基地で爆装した支援戦闘機2機が、警急待機中です。30分以内に最大2回の近接航空支援が可能です」

連日多勢に無勢の要撃任務に明け暮れていたのを考えると、これは感謝せねば。

「他には？」

目の下に盛大な隈を作った人事担当の第1部長が、読経のように口を開いた。

「各国のプレスが橋頭堡に到着、師団広報が補給段列地域に案内しております」

停戦交渉開始と国端新島攻略の目処が立ったのを受けて、陸幕より航空自衛隊那覇基地に設けられていた「プレスセンター」より国内外の記者団を島内入させる事になっていた。

ただし、記者団滞在は最大48時間の期限付。

戦時中という事もあり、指定地域外での生放送と衛星電話の使用は禁止となっている。

記者会見は午前と午前に2回。

記者会見には副師団長がやってくれることになった。

「なに、災害派遣じゃ毎回のことですし、北朝鮮の時にも経験はあります。師団長は戦闘指揮に専念してください」

損な役回りである広報担当を、阿佐嶋誠陸将補は笑って引き受けて

くれた。

彼は高射中隊にいた長男、阿佐嶋武志三尉を8月1日の空襲で亡くしている。

そうだ、俺は俺の役目を果たすんだ。
クダを巻いてる場合じゃない。

「では諸君、務めを果たすか」

口調を改めた田中の言葉に、幕僚一堂が背筋を伸ばした。
一瞬にして天幕内の空気が「会議室」から「作戦司令部」に変わる。

「即応部隊に下命。東地区森林地帯へ前進、敵秘匿遁道を確保せよ
！」

午前9時45分？

東地区森林地帯。

「七番遁道」付近。

トンネルへ続々と続く北中国軍兵士の列の脇。

二メートル程の深さに掘られた塹壕から刺激臭が漂っていた。

時折列から何事かと塹壕を覗き込む兵士もいたが、即座に踵を返して列に戻った。

「鍋で砲弾を煮てる馬鹿がいる！」

防護マスクの下、楊軍曹は深い溜め息をついた。

彼は、その辺の石でこしらえた即席の釜戸と、その上で湯を張った中華鍋に砲弾を乗せ湯煎していた。

別に彼は気が狂った訳ではない。

彼は今ちよっとしたトラブルに巻き込まれていた。

工兵隊の応援に向かったのは良いが、人手だけでなく爆薬も足りない事が分かり、ついでに一番作業が遅れている七番トンネルの爆破担当にされたのだ。

他の6本が正規の脱出用なのに対して、この七番トンネルは途中で二番トンネルへ繋がる、いわゆる「非常口」的なものだった。

ほぼ天然の空洞で、発見されたときは通風口にする予定だった。

だが日本軍の反撃が本格化してきた為、非常口に変更された。

ただ、戦時下の混乱で非常口に変更された事が周知されず、今日までその存在が一部の司令部勤務員しか知られずにいたのである。

本来こういった戦略通路には、遅滞防備用に埋没閉塞の為の爆薬か、

又はその準備用に設置孔があるのだが、件の理由からそれらは全くの手付かずで放置されていた。

おまけに、トンネル警備兼保守管理を担当する遁道警備小隊は真っ先に撤退してしまった。

爆薬の割り当てもなく、人員も寄せ集め。人数も足りない。

仕方なく楊は遺棄された装備を漁り「現地調達」を試みた。

元々この森には砲兵部隊が陣地を構えており、砲弾のストックがまだ残されていた。楊はこの中から130ミリ砲弾を選び炸薬の抽出作業に当たった。榴弾の製造過程では、炸薬は液状で砲弾に充填される。

TNTなら約80度で液化化する。

中華鍋で湯煎することで、その逆順をやっているわけだ。火にくべたり、電流を流せば話は別だが、信管を外してしまえば砲弾はそうそう爆発しないものだ。

液化した炸薬は、空の水筒に詰め、水を張った鉄帽（中国製はフリッツ型でも本当に鉄）に入れて冷やして固める。

通算5本目の水筒爆薬を作り終えた頃、白中尉が進捗状況を見にやってきた。

中尉は気配もなく後ろに立っていた。

「後、どの位掛かる？」

楊は肝を冷やしつつ、必要量を確保するのに後45分。設置に30分掛かると答えた。

「後30分とは言ったが、爆破はギリギリまで待つぞ？」

楊は不穏分子の疑いを掛けられまいと、慎重に言葉を選んだ。

「そういう訳ではありません、中尉殿。設置行程は省けても、爆薬

造りは事故防止の為どうしても時間が必要です」

「砲弾に電気信管を繋いで、そのまま使えば……？」

「破壊工作や通路啓開には良いでしょうが、これは閉塞作業です。勢い余ってトンネルを地上に露出させる恐れがあります。ご命令であれば取り掛かりますが、今からだと威力計算や設置場所の選定が一からやり直しになります」

「……」

白中尉の沈黙に不気味さを覚えつつ楊は畳み掛けた。

「それに不発弾処理以外に砲弾を爆破した経験は自分には無く、結果に責任が持てません。砲弾に関して助言を得ようにも、砲兵は全て撤退しました。下手に使えば爆破の影響が何処まで波及するか分かりません。トンネルは全て最終的に一本に繋がっているのはご存じでしょう？」

遂に白中尉が折れた。

「……分かった、仕事を続けろ」

ホッと胸を撫で下ろす楊に白中尉が中華鍋を指して尋ねた。

「そいつは何処にあった？」

楊は胸を張って答えた。

「自分の私物であります」

「・・・持って歩いてるのか？」

「本業は料理人ですので」

「・・・」

黙るなよ、あんた怖いんだから。

「他の連中は？」

「2人発火装置を探しにいかせて、残りはトンネル内で設置孔を開けさせてます」

普通爆破作業は、準備から設置、爆破まで一人で行う。責任分担するとミスが発生しやすいからだ。

今回は敵の襲来が近い事もあり例外であった。

それに、砲弾から炸薬を安全に抜き取る技術を持っていたのは楊だけだった。

「爆薬造り、誰かに手伝わせるか？」

楊はトンネル待ちの列を見た。白中尉が視線を向けると、皆一斉に目を背けた。

「連中にですか？」

白中尉はそれ以上何も言わず、肩をすくめただけだった。

直後、気象観測所の方から銃声が聞こえた。

順番待ちの北中国兵が騒ぎ始めた。

白中尉は朝鮮語で「チョッパリ!」と吐き捨て、楊に急ぐように言い残すと踵を返して森の中に消えていった。

午前9時45分？

東地区気象観測所付近。

正式名称は沖縄気象台国端新島出張所。

短いL字型の鉄筋コンクリートの三階建て。

2013年に沖縄沖地震を教訓に地震予知と台風観測を目的として建てられるが、中国政府（当時）の横槍で建設が途中で中止。

今日に至るまで放置されていた。

既に小山二曹が率いる斥候班が施設内に突入してから5分。

1階を制圧したら本隊を呼び寄せ、後は接敵するまで索敵を続ける。緊急時には機動部隊が装甲車で救援に向かう手筈になっていた。

大野を組長とする山岡、金突の三人は火力支援チームとして斥候班と本隊を援護する為観測所より200メートル南の位置に配置され、倒木を遮蔽物に息を潜めていた。

第17普通科連隊第3中隊の任務は気象観測所の占拠。それによる国道3号線を通る後続部隊の安全確保である。

海岸地区へリポートに到着した山岡達増援部隊は、短いブリーティングと編成完結の後、第15師団が用意した車輛に乗り込み、90式戦車改と105ミリ低反動機動砲装備の96式装輪装甲車2型を護衛に従えて一路戦場へ向け暴進したのだった。

皆いきなりの実戦投入に慌ててはいたが、今はとても落ち着いてい

た。

その要因は中隊名物の大野、金突コンビVS小山とのどつき漫才である。

道中、組分けと合言葉の徹底がされたが、その際合言葉を隊員から募集したところ、大野が「境界線」と言い出し「不吉だろうが」と小山二曹に拳固と共に一蹴され、それを金突に大笑いされるという一幕があった。

山岡は狙撃手とはもう少しクールな人種だと思っていたが、それが思い込みであるコトをこの数ヵ月で思い知った。

大野はどこでも眠るし食い意地が張ってるし要領が凄いい。

しかし射撃に関しては全自衛隊射撃競技会第3位の成績保持者で、本来なら先月より本格的な狙撃手の専門教育を受ける為に富士学校に入校する筈だった。

しかし、考えようによっては初の実戦を前にして笑いが絶えないのは良い事なのかもしれない。

他の小隊では緊張の余り胃痙攣を起こし、戦う前から脱落している隊員もいる。

最初から落ち着き払っている者は、谷本一曹や小山二曹といった九州騒乱やPKFを経験した一部の古株隊員だけだ。

進出経路は特殊作戦群の哨戒挺身部隊（戦闘パトロール）が確保し、敵砲兵部隊が本部として利用していた事もあって警戒されていた待ち伏せもブービートラップも無く、物事は全て万事滞りなく進んでいるかのようには思えた。

1階エントランス・ホールを確保との連絡を受け、中隊長の原田昌史一尉が本隊への前進命令を下した直後だった。突然施設内から銃声が響き、特小無線ががなり立てた。

『敵とコンタクト！真上から撃たれている！』

斥候班からはそれっきり連絡が途絶え、即座に原田一尉は機動部隊に出撃を命じた。

機動部隊は重装甲機動車2輦に40ミリ自動擲弾銃装備の96式装輪装甲車2型が1輦で編成され、指揮するのは第二小隊長の後田三尉だ。機動部隊は重装甲機動車を先頭に国道3号線を猛スピード暴進した。

その時山岡達火力支援チームには銃声が聞こえても成り行きを見守るしかなかった。

撃とうにも観測所の窓は全て内側より土嚢や角材で築かれたバリケードで塞がれ、外から中を窺うことはできない。屋上には北中国軍が遺した衛星通信システムのパラボラアンテナの残骸が残されているのが見えるだけだ。

後方から重装甲機動車と装輪装甲車の車列が猛スピードで近づいてきた。

やはり斥候班が危機に陥っているらしい。

何処を狙えばいいか分からず狼狽える山岡に大野は「屋上を見張れ」と命じた。

山岡が屋上からRPGで装甲車を狙う敵が現れないかと見張っているその時、施設三階の壁の一角が爆破され、中から25ミリ双連高射機関砲の太い銃身が現れた。

それが重装甲機動車を認めるや否や、連射を見舞った。

重装甲機動車の基となったヘライトアーマー＜こと軽装甲機動車は「インドネシアPKF」でRPGはおろか重機関銃に対しても無力

との指摘を受け、乗員の生存率向上と対戦車、対拠点防御用に重装甲、重武装化を目指し改良されたものだ。

バリエーションや武装の種類も増えて中MAT装備の対戦車型、50口径重機関銃や40ミリ自動擲弾銃装備型、通信支援型、救急車型等があり、名称も重装甲機動車へヘビーアーマーに改められた。

重量増化による速度低下や燃費が悪くなったなどの欠点もあるが、現場の評判は上々である。

しかし上から高射機関砲で撃たれるのは想定されていなかった。

25ミリのカウンターパンチを喰らった先導車が紙細工のように宙を舞った。

乗っていた3人の自衛隊員は即死し、後続く小隊長車も直ぐに射線に捉えられ擱座した。ドライバーの三輪士長が上半身を粉碎されて即死。

無事だった後田三尉は破片を浴びて伸びている通信手の平田三曹の襟を掴んで、施設とは反対側のハッチから重装甲機動車の外へ引き張り出した。

装輪装甲車が乗員を救助すべく自動擲弾銃を撃ちながら高射機関砲の射線に割り込んだ。

96式装輪装甲車2型は従来型の装甲、火力向上に加え情報共有化システムを搭載したヘストライカー装甲車の日本版を目指したモノだ。

初期型が形的な問題で、対戦車ロケットや地雷に対し脆弱だったため、デザインと装甲材質が一新された。スペースドアーマーの採用や、リアクティブアーマーのオプション等防御力が大幅に改善された。

だが上面からのRPG釣瓶撃ちには無力だった。

観測所の屋上に北中国兵が現れ、RPG（正確にはコピーの69式火筒）と機関銃の猛射を浴びてきた。

装輪装甲車が煙を上げて停止し、後部ランプから消火剤の泡にまみれた乗員達が大慌てで脱出した。

小隊陸曹の谷本一曹と共に転がり出てきた矢岳友重二等陸曹は、部下と一緒に装甲車の陰にへばりついて銃撃を凌ごうとしていた。

擱座した重装甲機動車の方を見ると、後田三尉が平田実三等陸曹の担当をしつつ無線で何処かと連絡を取っていた。

通信手の平田三曹は、両手を世話しなく動かしながらしゃべる男で格舌が悪く、よくドモる。

しかし、一旦受話器を握ると流暢にしゃべりだす珍しい男だ。

とにかくラーメンが好きで、休日に隊舎で昼寝をしている陸士を見つけると「ラーメン食い行きましょう！」と近所のラーメン屋に引きずっていくので皆非常に迷惑がっていた。

手当を受けている最中も平田三曹は頸から血を流しながらピクリとも動かず、既に死んでるようだった。

後田三尉が谷本へ向け大声で叫んだ。

「小隊陸曹！そっちに行きます。援護してください！」

直後、後田三尉は頭上で炸裂した擲弾の破片を全身に受け倒れ込んだ。

平田三曹は半身を碎かれ完全に息絶えた。後田三尉は無線機にもたれ掛かり、血塗れの顔を矢岳の方へ向けていた。

それを見た矢岳の中で何かが爆発した。矢岳は回りに向けて叫んだ。

「小隊長を助ける、みんな撃て、撃ちまくれ!!」

自衛隊員達が一斉に銃を撃ち始め、屋上からの銃撃が弱まるのを見定めると、全速力で後田三尉の元へ走った。

回りで銃弾が飛び回っていたが、そんなの気にしていられなかった。重装甲機動車の残骸の陰に飛び込むと、後田三尉を地面に引き倒し平田の遺体から無線機を外そうとした。

しかし無線機のハーネスを掴んだら、そのまま本体がバラバラになった。銃弾が貫通していたのだ。

無線機の残骸を投げ捨て、後田三尉の体を折り畳むかの様に抱えるのと、もと来た道を駆けを戻った。

後田三尉を抱える矢岳を狙って再び高射機関砲が唸りだし、擱座した重装甲機動車を完全に破壊した。

屋上の敵も撃ち始めたたちまち2人は銃弾の土埃に包まれた。

矢岳二曹と小隊長の危機に、火力支援チームは屋上の北中国兵目掛け射撃を開始した。

金突のSAWが轟然と曳光弾を吐き出した。

山岡はとにかく屋上の空際線上を狙い単連射を撃ち続けた。

機動部隊との撃ち合いに集中していて、目前にいた脅威を失念していた北中国兵達は伏せる間も無く銃撃に晒された。

「山岡! 銃座を撃て!」

大野が89式小銃で屋上の北中国兵を狙撃しながら叫んだ。

大野の持つ89式小銃は山岡達が持つ3型とは違い〈高級品〉と言

われる初期型だ。左右非対称の握把。緻密に計算され、日本人の体格に合わせて湾曲した銃床。掴みやすい被筒部。

生産性とコスト削減のため質実剛健と言えば聞こえは良いが、味も素っ気もないデザインとなった3型と元は同じ銃には見えない。

大野はそれに12倍率のスコープを載せ、消炎制退器の代わりにナイツ社製減音器を着け撃ちまくる。

恐ろしい精度で屋上の敵が倒れていく。

「早く銃座を撃て！小隊長達が殺られちゃう！」

慌ててAOCGサイトを覗き、機関砲に向けて引き金を引いた。機関砲の防盾に火花が散った。

「馬鹿！違う！40ミリだ！」

大野に怒鳴られ震える手で40ミリ擲弾発射器に榴弾を装填する。

こちらの位置を掴んだ敵が撃ち返し初め、山岡の頭上を銃弾が飛び交った。

擲弾発射器の尾栓を閉じて再びサイトのレクティルを機関砲に合わせる。

しかし、今の銃撃で砲手の注意を引いてしまったようだ。

サイト越しに機関砲の銃口と目が合った。

敵は自分に狙いを付けていた。

山岡の思考が止まった。

金突が「狙われているぞ！」と叫んでいた。

大野から「早く撃て！」と叫ばれていた。

しかし体が動くんで動かない。

次の瞬間山岡の視界は閃光に染まった。

午前9時45分？

唐突に高射機関砲からの射撃が止み、これ幸いに後田三尉を担いだ矢岳二曹は、装輪装甲車の陰に駆け込んだ。

再び背後で砲声が響いたので、最後は後ろも見ずに遮蔽物の陰に滑り込んだ。

矢岳は防弾ベストをさすり回して、あれだけ撃たれたのに一発も当たらなかったことが信じられなかった。

衛生隊員の猪野光夫二等陸曹が後田三尉の手当てを初めた。

後田三尉は重傷ではあったが意識はしっかりとあり、しきりに「左足の感覚が無い」と訴えていた。猪野が、対人榴弾で千切れ飛んだ左足に止血するためバンテージを巻き、ストラップを締め上げると後田は悲鳴をあげた。

「早く後送しないと死んでしまう！」

谷本が消火剤の泡風呂と化した装輪装甲車のキャビンから車載無線機を探しだし、中隊本部を呼び出した。

この森で日中両軍共に悩ませたのは通信手段の確保であった。

樹木の下からでは電波は飛ばない。しかし傘の下、近距離の部隊間通信であれば精度と通話距離が極端に下がるが可能だ。

結局この森で一番信頼できた通信手段は、電話線を用いた有線通信で、通信隊は通信線を巻いたドラムを持って森を駆け巡り、第3中隊の戦闘指揮所開設地域に有線回線を張り巡らした。

目標との中間地点では、師団司令部と前方航空統制所との連絡確保の為、電波搬送中隊が中継用ホイップアンテナを建てており、上空には航空自衛隊の電子支援機が旋回し不測事態の場合電波をリレー

してくれることになっている。

送信ボタンを押して中隊長の原田一尉を呼び出した。

『飛車〇一アルファ（後田三尉の呼び出し符号）が重傷です。増援と負傷者後送をお願いします。送レ！』

原田一尉より既に向かっていると返されると同時に、国道3号線から90式戦車改を先頭にした装甲車の車列が現れた。

先頭の戦車が猛スピードで突進しながら主砲を発射した。砲弾は観測所手前に着弾すると白煙を吹き出し、北中国兵から視界を奪った。戦車はそのまま発煙弾を行進射で3発撃ち込むと国道から外れ、谷本達の装輪装甲車の盾となるべく、観測所の高射機関砲に対し右斜め40度の角度で停止した。

装輪装甲車はそのまま国道を直進し、搭載火器を撃ちまくりながら白煙の中へ突入していく。

戦車に向け、屋上の北中国兵が69式火筒を見当を付けて撃ち込んできた。しかし、増加装甲に全て弾かれ同軸機銃の返礼を受けている。

装甲車の車列は機関銃と擲弾銃を撃ちながら前進し、観測所正面入り口50メートル手前で停車。ハの字型に展開し制圧射撃を加えつつ増援部隊を降車させた。降車班が施設に突入してから直ぐ、彼等により斥候班の一部が救出された。

1台の高機動車が急ブレーキを掛けつつ谷本達の所にやって来て、止まるな否や後部ドアから担架を持った隊員が飛び出してきた。

「負傷者を早く載せろ！」

谷本達の位置を掴んでいる北中国兵は高機動車が来たのを察知し、煙幕越しに機関銃を撃ってきた。戦車が熱線視察装置（CITV）を頼りに同軸機関銃を撃ち返す。

自衛隊の赤い曳光弾と北中国軍の青い曳光弾が白煙の中を飛び交った。

戦車が機関銃を黙らせている間に、矢岳は先導車と小隊長車の残骸を調べ、他の乗員達の安否を確かめた。

25ミリ砲弾に貫かれた車体には、バラバラに碎かれた遺体しか乗っていないかった。

矢岳は生存者がいなかったコトにひどく落胆したが、それでもやるべき事を思いだした。

残骸を回り、戦死者達の認識票をかき集めた。だが上半身が無い三輪士長の認識票だけは見つけることができず、探すのを諦め装輪装甲車に駆け戻った。

「あの銃座を潰せ」

モルヒネの影響で朦朧としながらも指揮を取ろうとする後田三尉は猪野は必死になだめていた。

「火力支援班に機関砲を破壊するように伝えろ…」

最後にそう言うと、後田三尉の血圧は急に下がり始めた。これ以上は生命が危ないとされ、彼はすぐさま高機動車に乗せられて全速力で後方の包帯所に運び込まれた。

応急処置を受けている間も意識はあったので、みんな彼は助かると思っていた。

しかし、負傷者後送ヘリで野戦救護所に向かう途中、空中で息を引

き取った。

第2小隊の指揮を引き継いだ谷本は小隊長の最後の言葉の意味を思い出した。

・・・火力支援班？しまった、忘れてた。

観測所手前200メートル。火力支援チーム。

存在を忘れられていてもトリオ達の闘いは続いていた。

山岡は視野一杯に閃光が拡がると同時に、大野に背後から蹴り倒された。

頭上スレスレを通過する砲弾の凄まじい衝撃波に、目を白黒させながら首を後ろにねじ曲げた。

同じ視線の高さに、引きつった大野の顔があった。血走った目が「立つな」と叫んでいた。

左側では金突がSAWを放り出して地面に突っ伏している。

三人とも反撃を諦め、只ひたすら嵐が過ぎるのを待っていた。今姿勢を上げるとは速やかな自殺を意味する。このまま撃ち続けられればいずれ弾切れ若しくは砲身加熱で、再給弾なり砲身交換なりで隙ができる。

そうなったら、立ち上がり観測所までダッシュし、機関砲の死角に逃れる。このトリオに残されたプランはそれしかなかった。

敵がその前に弾着修正をしなければだが。

射手が、少し手前に砲身を下げれば一瞬で3人共挽き肉だ。

しかし、何時になっても機関砲は弾着修正をしてくる気配がない。

どういう積もりか、ひたすら背後の地面を抉り続けている。

「・・・？」

流石にトリオ達にも、若干余裕が戻ってきた。

金突がSAWに取り付けたエルカンスコープで様子を伺うなり大爆笑を始めた。いぶかしむ大野と山岡に、金突が拳で地面を叩きながら機関砲を指差す。

二人は各々の銃を構え、スコープを覗いた。

高射機関砲を操作する3人の砲手の内、砲身角度を操作する兵士が必死になって仰角ハンドルを廻そうとしている・・・が砲身はそれ以上下がらない。

隣の方角操作手と真ん中の射手が慌てだした。事態を察知した山岡と大野が馬鹿笑いを始めた。

機関砲：正式には87式25ミリ双連高射機関砲。
旧ソ連のASU-23-2のコピーである85式の口径を、ソ連式の23ミリから欧米式の25ミリに変更したものだ。

北中国兵はそれを施設内に分解して運び込み、存在を秘匿するため屋内で組み立てて、日本側の予想進路方向に向け据え付けたのである。

敵ながら中々の根性と創意工夫ではあった。

しかし、彼等は肝心な「俯角」を考えていなかった。

高射機関砲は低空の航空機を撃つための、拠点防空兵器である。従って砲身は「仰角」は高く取れるが水平より下「俯角」は取れない。今山岡達は高射機関砲の「最大俯角」の下にいたのである。

勿論彼等も土台に土嚢などを用いてスロープを授け、ある程度下を狙えるようにしてはいた。しかし、目的の都合上標定射撃はできないとしても北中国兵は完全に目測を誤った。

機関砲の背後に控えていた給弾手の1人が03式歩槍を持って火力支援チームを狙おうとした。

即座に笑いを治めた金突がSAWを一連射すると給弾手は大慌てで奥に引っ込んだ。砲手達も防楯の陰で縮こまっている。

「さて山岡一士、返礼といくか」

大野に階級で呼ばれ弛緩した神経が一気に引き締まった。

「擲弾手！目標前方の機関砲、200！」

今度は慌てなかった。擲弾発射器の安全装置を外し、引き金を引いた。

擲弾は弧を描いて飛び、銃座の外壁に当たり炸裂した。

中より中国語の悲鳴と怒号が上がる。バレル・アッセンブリを前進させ、排莖と同時に次弾を装填する。

発射！今度は銃座内に飛び込んだ。

機関砲の背後から閃光と共に敵兵が吹き飛ばされ、落下していった。

やったかな？

山岡が89式を肩からはずした直後。銃座の奥から複数の中国語の掛け声と共に機関砲の後ろが持ち上げられた。

なんと、北中国兵は力業で機関砲を持ち上げ、強引に俯角を付けようとしていた。

大野が背中からM72 LAW E6を外しながら叫んだ。

「しぶといぞ、ロケットランチャーだ！！」

M72 LAW E6はインドネシアPKF後、個人火力向上計画の一環と84ミリ無反動砲の間隙を埋めるものとして2017年に自衛隊が採用した使い捨て軽量ロケット砲である。従来型が射撃時の後方噴射のため40メートルの安全距離が必要だったの対し、E6モデルは砲身チューブ内にカウンターマスを装備し、安全距離が10メートルとなった最新型だ。

完全な輸入製で、本体の英語表記の説明文の上から、日本語の説明文シールが貼り付けられていて、説明文の最後の「敵に向けて撃て」の表記には笑ってしまう。

山岡はLAWのチューブを伸ばし、照準器を跳ね上げた。

照準器を覗き込むと、俯角を増した機関砲の砲口と再び目が合った。今度は平気だった。防楯の隙間から血塗れの、しかし戦意の衰えぬ北中国兵の顔が見えた。

「擲弾手、準備いいか!？」

組長こと大野士長の号令。山岡は「射撃準備よし!」と大声で答える。

「テェッ!」

2発の66ミリロケット弾が高射機関砲を粉々に粉碎した。

第2小隊の指揮を引き継いだ谷本一曹は、その轟音を煙幕のカーテン越しに聞いた。

続いて鳴り響いていた機関砲の砲声が止み、白煙の空間から、観測所の銃座のある辺りから真っ赤な炎が上がるのが見えた。

谷本は血相を変え、特小無線機を掴むと、呼び出し符号も使わず火力支援チームを怒鳴り付けた。

「バカ野郎、重火器を使うな！中にはまだ斥候班が閉じ込められてんだぞ！」

午前9時45分？

管理棟1階。

話しは少し遡る。

小山二等陸曹が率いる斥候班の6人は施設外の搜索を終え、内部搜索を開始した。

予想されていたトラップや地雷による障害もなく、敵は退去した後と思われた。

正面玄関より一階エントランスに突入したが人の気配は無い。

窓という窓や通用口は全てバリケードで塞がれ、陽光が届かず内部は薄暗かった。

観測所は空から見ると北と東に向けL字型に伸びている。そこで斥候班は二手に別れることにした。

小山が率いる弘田愁陸士長、斉藤信夫陸士長の3人は東棟へ。副班長の糸山孝則三等陸曹が率いる五十嵐昇三等陸曹、遠山兼光陸士長の3人は北棟へ向かった。

北棟へ進んだ小山達は一部屋づつ検索しながら進んだ。罠どころか人っ子一人いない。逆にそれが不気味だった。立地的に森林地区への進行を食い止めるには此所しかない筈なのだが。

後方警戒を務める弘田士長は、去年行った東富士演習場の市街地戦闘訓練場を思い出した。内装も家具もない。冷たいコンクリート剥き出しな所がソックリだった。

そうこうしているうちに一行は防火扉に出くわした。

先頭の斉藤が小山の援護を受けて、扉をそっと押した。扉は動かなかった。今度は小山が代わり、斉藤が援護に回った。筋肉質な小山が力一杯防火扉を肩で押すと、少しずつ開いてきた。隙間が50センチ程空いた頃だった。小山の鉄帽に、なにか固いモノが落ちてきて足元で跳ねた。それはシュー、と音を立てて転がった。

「手榴弾!!」

小山が叫び、手榴弾を通路の隅へ蹴り飛ばすと、空中に身を投げた。続いて弘田、斉藤が空中に身を踊らせる。

着地と同時に手榴弾が炸裂した。弘田が爆風をまともに受け「やられた!」と叫びその場に崩れ落ちる。斉藤が弘田を助けに向かうとした瞬間、防火扉の隙間から銃身が突き出された。

先ず斉藤が撃たれ、床に叩きつけられた。続いて小山が左肩を撃たれ、仰向けに倒れた。起き上がろうと、半身を起こした所を更に撃たれ、再び仰向けに倒れ込んだが、銃弾は全て防弾ベストが防でいた。小山は、仰向けのまま89式を構え、防火扉へ向けて撃ち返した。防火扉の向こうで中国語の悲鳴と悪態が聞こえ、銃身がスルリと引っ込んだ。

斉藤が手榴弾を投げ込もうと、血塗れの手で防弾ベストのポーチをまさぐっていると、目の前に再び手榴弾が降ってきた。

斉藤は「ぎゃあ」と叫び、手榴弾を掴むと防火扉に投げ込んだ。

小山は床に伏せて爆風を避けると、天井を見上げた。

一体何処から飛んできた?

目線の先には、穴だらけのコンクリートむき出しの天井しかない。次の瞬間、穴の一つから閃光が閃いた。

右足に捻れたような激痛が走り、たまらず床に倒れ込んだ。

斉藤が起き上がるうとしたところを、背中を真上から撃たれた。

北中国兵は、壁や床に穴を開け、階段や廊下を使わず、建物を縦横無尽に動き回れるようにすると同時に、階下や壁越しに敵を狙えるよう、銃眼と手榴弾孔を設けていた。

事態を掌握した小山が小銃を天井に向けて撃ったが、跳弾があちこちに跳ね回るだけだった。

「敵とコンタクト！真上から撃たれている！」

小山は無線機のリップマイクに叫ぶと防火扉に向けて1連射し、渾身の力を込めて扉に飛び蹴りを見舞った。

扉が内側に積まれていたバリケードを吹っ飛ばしながら開き、斉藤の襟を掴んでを入り口まで引き摺ると、小山は89式を肩付けして構え、部屋を点検した。

部屋は無人で机一つ無く、部屋の角に脚立が立てられているだけだった。

さっき撃ってきた奴は何処に消えた！？

小山が脚立に近づくと、天井に穴が開けられているのが見えた。

もしやと思い89式を構え慎重に近づくと、脚立はスルリと天井の穴へ引き上げられた。小山が脚立の端に飛び付き、思い切り下へ引っ張ると、上から脚立と一緒に北中国兵が墜ちてきた。

小山は北中国兵を床に踏みつけると、銃口を向けた。事態を飲み込んだ北中国兵は手足をバタつかせて、小山の解らない言葉で喚き散

らした。

「悪く思ふなよ！」

引き金を引く寸前、小山の頭上で影が舞った。

反射的に飛び退くと、5秒前まで頭のあった位置を、ブーツの踵落としが掠った。

ブーツの主は、着地すると半回転しながら体を丸めた。自分への攻撃の予備動作と悟った小山が、89式を体の前に掲げ防御する。直後、鳩尾を狙った廻し蹴りが襲った。

強烈な衝撃で壁までぶっ飛び、打撃を受けた小銃が機関部から折れ曲がった。

新たに降ってきた敵は、顔半分を包帯で覆われた男で、デジタル迷彩に防弾チョッキを着ていた。背中にブルパップ型の小銃、95式歩槍を提げているがどういうつもりか、使う気はないらしい。

カンフー映画のように両手を左右に開き、小山に向けた右手の掌は垂直に立てている。

床に転がっている奴とは、明らかに格が違う。小山は空挺か海兵隊に相当する兵士と判断した。

面白い。

89式を投げ棄てると同時に突進した。

北中国兵が前蹴りを繰り出した。

頭を下げて寸前で避けると、胴体に向け拳を突き降ろした。

北中国兵の防弾チョッキは、自衛隊の物と同じ防弾板を挟み込んだ

プレート・キャリアだったが、防弾板の出来は日本の物と比べ、良くなかったらしい。空手五段の小山の正突きを受け、カバー越しに割れたのを感じた。

「ぐぼう」

肺から空気を吐き出しながら北中国兵が後退りする。小山は一気に勝負に出た。

北中国兵の顎目掛け掌底を放つ。

しかし、体勢を建て直した北中国兵は、両手をクロスさせ小山の掌底を上へ弾き飛ばすと、そのまま重心を下げて渾身の肘鉄を見舞った。

全体重を掛けた強烈な肘鉄を胸に受け、一瞬小山の息が詰まる。だが、まだ闘える！！

北中国兵が畳み掛けてきた、小山の頭上に踵落としを仕掛けた。小山は降り下ろされる豪脚を受け止めるが、何故か右足に力が入らず、床に膝を付く。

北中国兵はそのまま左足を小山の喉元に絡ませると、押し倒そうとした。

首を折る気だ！

小山は全力で、立ち上がり逆にバックドロップをに持ち込んだ。

北中国兵は床に叩きつけられる寸前、小山のブロックを外し、飛び

退いた。

受け身を取って一回転し跳ね起きる。小山も立ち上がろうとするが、やはり右足に力が入らない。

一体なんだと言うのだ!?

右足を見ると、太股と脹ら脛に二つ穴が空き、血が吹き出していた。そこで初めて自分が撃たれている事に気がついた。

北中国兵は背中から95式歩槍を一挙動で外して構えた。

お遊びは終わりと言うことか。

小山は観念したが、撃ってくる気配はない。

北中国兵はそのまま後ろに下がると、未だ腰を抜かしている相棒を片手で引き起こした。

まだ若い、腰を抜かしていた兵士は泣きべそをかきながら立ち上がると、小銃を拾い上げ小山に向けた。

一瞬身構えたが、北中国兵は相棒の銃を取り上げると、脚立を立てて、上に上がるよう諭した。

なんのつもりだ!?

北中国兵は銃口で斉藤と弘田を示した。部屋の中に入れろと言いたいらしい。

直後に北中国兵の意図に気付き、激しい怒りが貫いた。

これは慈悲でもなんでもない。何故地雷も仕掛け爆弾も仕掛けられていなかったのか理解した。

思惑通りになってたまるかと、右足の拳銃を意識した。

しかし、最後の勝負を挑んで、自らの矜持に部下を道連れにする程小山は愚かではなかった。

北中国兵は軽く敬礼すると、銃口を向けたまま脚立を登っていった。脚立が引き上げられると、穴が鉄板で塞がれ、その上に更に何か重量物を載せる音が響いた。

自衛隊員3人は、味方を誘き寄せる餌にされた。

午前9時45分？（後書き）

10式凍結と74式退役は、早まったかも？

―閑話―

気象観測所より北へ2キロ一番遁道付近。

〈監視ポスト01〉

「よっこらせ」

F M無線機を背負って05式冲蜂（短機関銃）を片手の木登りは骨が折れた。それが高さが30メートル以上あれば尚更である。

防空砲兵、李大平上等兵は楊下士と別れ再び配置に就いた。

監視ポストは、天辺付近に枝が（直径が60センチ以上ある）三股に分かれてた幹に、板切れで足場を作って人一人座れるスペースを拵えられたモノだ。

足場には緊急連絡用に野外電話機が据え付けてられ、ケーブルは白中尉がいる一番遁道付近の転進統制指揮所に繋がっている。適度に偽装は施されてるが土囊などの掩蔽物はない。敵に発見されたら直ちに死を意味する、地上30メートルの孤独な職場である。

「やあ、お嬢サン。また隣を宜しいですか？」

李は監視ポストによじ登るなり「彼女」に声を掛けた。「彼女」とは足場とした幹に浮き出た女性の形に似た瘤だ。ガレア船のレリーフの様に若い乙女を型どった半身像が監視ポストを見守っている。

これが東地区森林地帯名物「如体瘡樹」である。

サイズや高度差に大小差はあるが大体同じ顔と身体的特徴。しなやかな四肢に腰迄ある長い髪。ふくよかな胸。これが一本二本なら自然の神秘で済む話だが、これが無数にあるのだから恐ろしい。同様の瘤を生やした樹は他にも沢山あり、このポストから見ただけでも四本見える。先に入植しようとした日本人の嫌がらせにしては手が込んでいる。

青宝島に上陸してから、「如体瘡樹」に関する怪談じみた噂が絶えなかった。

「見る度に表情が変わってる」「蹴っ飛ばしたら睨まれた」「銃で撃ったら悲鳴を上げた」等ネタは尽きない。

中でも極めつけの話しが悲惨だった。

日本軍の反撃が始まる前。ある通信隊の若い兵士が、有線ケーブルを架設するのに樹に登ったら、てっぺん辺りで例の人面瘤に出くわした。その兵士は女日照りの禁欲生活が長かったせいで、「彼女」が余りにも艶かったので、その樹を「下半身の射撃訓練」の的にしたという。

その夜は、「樹とやった英雄」として仲間と大いに盛り上がった。しかし翌朝。昨日架設したケーブルが何故か外れ、彼はもう一度登る羽目になった。

仲間達が見守る中、また例の「彼女」がいる辺りに迄上がった時だった。

突然兵士が「悪かった！許してくれ！」と叫んだかと思うと、風もないのに枝がしなり、そいつを枝から振り落とた。落ちた兵士は首の骨を折り即死したという。

この噂は瞬く間に守備隊全部に知れ渡り、自ら進んで樹に関わりたがる奴は居なくなり今日に至る。

そんな都市伝説のような怪談を李は本気にしなかったが楊は酷く気

味悪がり、この監視ポストでも「気が付くと俺を見ている」だの「居眠りしてたら鍋を叩き鳴らされた」だのと樹に登るのを嫌がった。寝たらダメだろ、オヤジさん。

ここだって「彼女」がいるので監視ポストの開設には皆露骨に消極的だったが、他に適切な場所がなく嫌々設けたのだ。

もうこの島に纏わる超状現象じみた話しにはウンザリしていた。一々気にしていたら切りがない。

しかし何でこうも軍人は幽霊を恐れるんだ？

日本軍の90式坦克（戦車）に追いかけるより遥かにマシだろうに？

あれに見つかったら間違いなく自分達のが幽霊にされるのに…。

李は、司令部壊滅の日、陣地に雪崩れ込む、日本軍の機甲部隊に追いつけられなかった時の恐怖を思い出した。

李は05式冲鋒を傍らに置き。無線機のスケルチを廻し始めた。ボリュームを抑えたチューニング音が響く。一瞬背後の同居人を振り返った。絶対気のせいに違いないのだが、樹が顔をしかめた気がした。

心なしか周りから睨まれているような視線を感じる。

「うるさくしてゴメンなさい」

そう彼女達に手を合わせて詫びると、刺々しい気配が消えた。李は再び作業に取り掛かった。

彼は「如体瘡樹」に限らず女性に対して万事この調子である。彼は世間一般に言う「フェミニスト」ではない。李のそれは女性に敬意を表しての物であって、大くは両親の影響を受けていた。

彼は縫製工場で、従業員用送迎バスの運転手をしていた父と、その工場に勤める母の間に産まれた。

父は人の良い男で、滅多に声を荒げないし李に手を上げた事もない。バスの送迎経路であれば、近所のお年寄りを乗せてあげたりする優しい男だった。

代わりに母が凄まじかった。人が良すぎて危なっかしいと押し掛け女房となり、生活力の無い父にかわり家計から子育てを洗濯機のように切り盛りした。

独りっ子政策で過保護になりがちな昨今に反し、李の躰には信賞必罰を徹底していた。

父が共働きを理由に給料を減らされかけたときは、他の従業員のオバサン達を引き連れて工場長に詰めより、それを撤回させたりもした。

こんな母をもったが故か、李は女性に対し畏怖と尊敬の念を持って接するようになる。

だが、意外なことに、李が軍に入ると言い出した時、母は大反対した。

中国は徴兵制だが、人口が多いため、徴兵適齢期の男子全員を入営させると、軍自費を圧迫してしまうため選抜方式を導入している。軍幹部だった父方の叔父から、李が選考から外れたのを知られ、母が素直に喜んでいた矢先だった。

「アンタはお父さんに似ておっとりしているから軍隊には向かない！」

どうしても日本への留学が諦めきれなかった李は除隊後の優遇特典目当てに必死に食い下がる。そこへ父が助け船を出してくれた。

「好きにさせてやりなさい」

李は初めて両親の夫婦喧嘩を見た。物凄い剣幕で捲し立てる母に、冷静に毅然として諭す父。遂には母が折れた。

入営当日。見送りにきてくれた社宅の住人の前で、人目もはばからず号泣する母がいた。

遠くで銃声が響いた。

気がついたら1時間以上経っていた。銃声は散発的だったものが、急に勢いを増して本格的な銃撃戦になっているようだ。通信からも気象観測所で日本軍が苦境に陥っているのが分かった。

施設を占拠しようとして失敗。中に閉じ込められた偵察兵を助け出そうと右往左往している。

他にも符号変換装置経由の圧縮電波が頻繁に出ている。内容は解らないが後方司令部に指示なり応援なりを求めているのだろう。

森の上までアンテナを伸ばしたか、上空の日本軍機に中継をやらせているのか？だとしたら我が軍は制空権も失ったか。

『・・・』

何故かレシーバーから英語の通信が入ってきた。美国アメリカが参戦してきた？いや違う、発音が日本語っぽい。

えーと、デイスイズ、ライデンフライト、スタンバイナウトウザ・2000アルチュード。アンチグランドフォーメーション…これってまさか！？

交信ソースを理解した李は血相を変え野外電話機に飛び付き呼び鈴転把を廻した。

「・・・!!」

誰かに呼ばれた気がした。言語ではなく、感覚でそれを感じた。

正確には呼ばれたというより叫ばれた。「危ないと!!」と。

本能的に「彼女」の方へ振り返った。直後、一秒前まで頭のあった位置を、銃弾が通り過ぎた。

大口徑弾の直撃を受けた枝が弾け飛び、衝撃が李を足場から投げ落とした。真っ逆さまに落ちて行ったので、地面が迫って来るのがみえた。

李が観念して目を瞑ると、地上寸前で何かに受け止められた。

恐る恐る目を開けると、太い複数の枝に地上3メートルのところでキャッチされていた。

枝なんて生えてたっけ？さっきまで真下には無かった気が…？

そうこうしている内に足元の地面が盛大な土煙を上げ、李は狙撃さ
れていることを思い出した。慌てて近くに落ちてあった05式冲蜂
を拾い樹の陰に隠れる。

日本軍の狙撃兵は、樹から転落したが、李が生きている可能性を捨て
きれず止めを刺してきたのだ。

赤外線探知が使えない筈だから勘で狙ってきている。間違いなく玄
人レベルの腕だ。口径は多分12,7ミリ。着弾方角から南に80
0メートル離れた崖から撃ってきているようだ。
どう見ても短機関銃では勝ち目は絶対がない。

ザザザ…。

今度は風もなく木々が揺れ動いた。李の姿を射線から隠すようになる様は、まるで樹が「早く行け」と言っている様だった。

「ありがとう！」

李は幹を二度叩くと白中尉のいる第一遁道へ向け疾走した。

森林地帯から南東方向約800メートル。外輪山のある崖。

〈狙撃ポイント3〉

陸上自衛隊特殊作戦群、特別編成第1哨戒挺身隊の磯部憲治（仮名）二等陸曹は、初めて相棒が狙いを外すのを見た。

狙撃手を務める穂刈^{ほかり}瑞児二等陸曹は（仮名）がM95対物狙撃銃の安全装置を掛け深々と魂を吐き出すかの如く溜め息を吐いた。全身から「何故だ!？」というオーラが吹き出していた

「頭目、こちら伊賀。標的の排除に失敗。送レ。」

磯部が司令部に淡々と報告する。

国端新島奪還作戦「ほむら」発動より彼ら特殊作戦群は、第15戦闘団と呼称され第15師団司令部直轄部隊として運用されていた。

任務は後方攪乱、破壊工作、強行偵察等である。

磯部と穂刈の2人は、増援部隊の進出経路確保の後、森林地帯監視の任に就いていた。

気象観測所攻防戦が始まるにしたがい、航空支援機の援護のため敵対空監視ポイントの排除を命じられた。

だが結果は散々、狙撃寸前標的は頭を上げて弾丸を避けると、真っ逆さまに樹から落ちていった。

しかし地表スレスレで無風状態にも関わらず、枝がしなり北中国兵をキャッチした。追い撃ちを試みたが今度は狙いを攪乱するかのように木々が勝手に揺れ動き、北中国兵の脱出を援護した。

偶然にしては出来すぎる、もう、腕でどうどころの話じゃない。磯部はスポッティングスコープを覗いて北中国兵がいた監視ポイントを見た。

太い幹の「人面瘤」と目が合った。磯部はなんだか嘲笑われている気がした。

この島の不可解さは今に始まったことではないが、戦争が続くにつれ、命に関わる事案が増え始めた。

一昨日は何故か浮力が全く無い小川を知らずに渡河して2人犠牲になった。

「野郎お・・・」

M95のボルトを操作するコッキングノイズが響いた。見ると穂刈もスコープを覗いて同じ方向を見ていた。相棒が何をしようとしているのかを悟り慌てて制した。狙撃屋が無駄弾を撃つのは自殺行為なのを分らない筈はないのに。穂刈はそれだけ追い詰められていた。

職業軍人は国を問わず、幽霊や怪談話しをととても嫌う。それは精鋭と呼ばれる兵士ほどその傾向は顕著となる。

彼等は、どんなに肉体を鍛え、強力な武器を携えようと、それが亡霊を倒す事には何の役に立たない事を、過酷な訓練や現場で培った

経験で悟っているからだ。

自分の手に負えない敵への恐怖。死が蔓延する特異な状況下を職場とする者の、哀しい性であった。

司令部から移動命令がきた。今度は航空統制官として、攻撃機を誘導することになった。目標指示レーザーが使えないので（レーザーを吸収してしまう）爆撃は強行偵察情報から図上標定し、目標へはマーカー射撃とドライラン（爆撃予行演習）を繰り返しての攻撃となる。攻撃機にとって、昔ながらの急降下爆撃となり非常に危険な任務だ。

日中共々あれだけ予算を掛けたハイテク兵器の恩恵を受けられず、戦争は完全に50年前の有視界戦闘に退化しつつあった。

まだまだ一杯人が死ぬ。俺達の出番はまだ終わらない。

2人のコマンドは次の任務に就くべく、静かに移動を開始した。

午前9時45分？

気象観測所北棟。

斥候班別班を率いる糸山孝則三等陸曹は北棟一階を搜索中、手榴弾の炸裂音を聞いた。

続いて鳴り響く銃声に、引き返して小山達に加勢に行くべきか迷っている、五十嵐昇三等陸曹が鋭くささやいた。

「敵がいる！」

彼は張り付いていたドアの向こうから、銃の遊底を引く音を聞いたのだ。

ハンドシグナルで遠山兼光陸士長を呼び寄せると、小銃のレールシステムに取り付けたショットガンを蝶番目掛け撃ち込んだ。

木製ドアが吹っ飛び、すかさず遠山が音響閃光手榴弾を投げ込む。爆音と同時に糸山は拳銃を抜いて踏み込んだ。

部屋に飛び込むなりドアの後ろに隠れている北中国兵を見つけた。走りながら5発撃ち北中国兵を倒した。続いて突入した遠山士長が北中国兵の死体に躓き盛大に転けた。

「立て！」

五十嵐は叫ぶと遠山を引き起こし、倒れている北中国兵に数発撃つと、糸山の隣の壁に張り付いた。順番を変え遠山が隣に付く。

糸山のすぐ向こうの壁には、大きな穴が開けられていおり、隣のフロアと繋がっていた。

糸山は拳銃の残弾を確かめ、フレームに取り付けた小型ライトのスイッチを入れた。

「行くぞ！」

背後に五十嵐を従えて穴から隣の部屋に飛び込む否や、2人の網膜を03式歩槍の放つマズルフラッシュが貫いた。

糸山は半回転して北中国兵に向けて引き金を引いた。至近距離でお互い必死に撃ち続けた。

ライトで目が眩んだ北中国兵の狙いが、僅かながら逸れた。

糸山の拳銃の腕は確かで、弾丸は確実に北中国兵の胴体を捉えていたが、防弾ベストに阻まれ倒すことができない。

残弾が乏しくなってきたので撃ちながら後退し、五十嵐を穴の中に押し戻した。外れた北中国兵の弾丸は、壁を貫通し遠山の防弾ベストに命中し、勢いで彼は床に倒れていた。

遠山の防弾ベストの脇腹辺りに2発孔が開いていたが出血は見当たらない。糸山が手を取って引き起こすと力強く握り返してきたので無傷と判断した。（実は肋骨が折れていた）

彼の防弾ベストの背面ポーチから2発目の閃光手榴弾を取り出し、穴に投げ込んだ。

3人が数秒後にくる大音響に備えていると、反対に穴から何か投げ込まれた。

最初、閃光手榴弾が敵に投げ返されたのかと思った。しかしソレは2420000カンデラの閃光と174・5デシベルの大音響の代わりに、爆風と破片を撒き散らし、3人は床と壁に叩きつけられた。遅れて穴の向こうで爆音。穴から北中国兵が衝撃で押し出されたように転がり出てきて、耳を押さえて悶絶している。

糸山は手榴弾の破片で顔面に酷い切り傷を負ったが、他に怪我はなかった。

膝立で起き上がり、爆風で投げ出した拳銃を脱落防止のカールコードで引っ張り戻しながらメンバーの様子を見た。

遠山がまたもや仰向けにひっくり返っていたが、死んではないようだ。手榴弾の一番近くにいた五十嵐は、もうもうたる硝煙の中で姿が見えない。

あいつ、吹っ飛んだか!?

そうこうしている内に北中国兵が立ち直った。耳を押さえて膝立ちになったところで糸山と目が合った。

北中国兵は目を見開き「何でお前等がここにいる!？」と言わんばかりに飛び退いた。

糸山と北中国兵が引き金を引くのは同時だった。

だが、双方弾がでない。

糸山の拳銃はスライドが後退したままだ。弾倉を換えるのを忘れていのだ。一方北中国兵の03式歩槍は排莢不良を起していた。

北中国兵は必死に項稈を引いて、詰まった莢莢を弾き出そうとしたが上手くいかない。

糸山は拳銃のリリースボタンを押して空の弾倉を振り捨てた。

それを見た北中国兵は故障排除を諦めた。

彼は鉄帽の顎紐を引きちぎるように外すと、糸山の顔面目掛けて投げつけた。

中国軍の鉄帽は、日本や欧米の軍隊の物と同じ耳まで隠れる形の「フリッツタイプ」と呼ばれるものだ。しかし、先進国の物が重量軽減と強度向上のため合成繊維などの新素材を使っているのに対し、中国軍の鉄帽の素材は未だ文字通り「鉄」。これをまともに喰らった糸山はたまったものではない。

視野一杯に星が舞い、耐えがたい衝撃で鼻骨が潰れるのを感じた。しかし遠退く意識を怒りで掴まえ、憤怒に任せて自分の鉄帽を投げ付けた。

鼻先に高張アラミド繊維製の鉄帽を喰らった北中国兵が、怒り狂って03式歩槍を振り上げた。先端にはいつの間に着けたのか、銃剣が鈍く光っていた。

北中国兵は雄叫びを上げ、慌てる糸山の頸元を狙い銃剣を突き下ろした。

轟音。

北中国兵が横っ飛びに穴の向こうに消えた。

「糸山さん。なに遊んでんスか？」

爆煙の向こうから2年後輩の若曹の声がした。

つまるところ五十嵐も無事だったのだ。

五十嵐は穴の向こう側で倒れている北中国兵が手榴弾をまさぐっていたので、ショットガンのスライドをポンプすると止めを刺した。

「もうちょっと早く来てくれよ」

「すみません、耳鳴りでよく聞こえないっス」

五十嵐も五体満足であったが無傷という訳にはいかなかったようだ。彼の顔面の右半分は破片が刺さり、殴られたように痣となって蒼く腫れ上がっている。

五十嵐は北中国兵が完全に死んだのを確認すると、ショットガンに弾薬を補充した。

自衛隊は慢性的な人手不足に加え、過去二度の戦役と一度の大災害で殉職した隊員の充当が現在に至るも追い付いていない。

また、入隊志願者の激減がそれに追い討ちを懸けていた。

特に普通科部隊の戦力低下は深刻で、自衛隊は定数割れによる火力

低下を補うため、こういったコンビネーション火器を持つことを推奨していた。

拳銃に新しい弾倉を込め、未だ目を回している遠山を足でつついて起こした。

遠山は直ぐに起き上がるが肩で息をして苦しそうだ。

「大丈夫か!？」

遠山はとても無口な若者で、班員とも最低限しか会話をしようとしていない。しかし、集団生活ではそれだと不都合なので、上官達は何度か遠山を呼びつけ人とコミュニケーションを取るようと指導した。しかしそれは人を無視する類いのモノではなく、訓練や日常業務での復命復唱はキチンとやるし、不平不満は勿論、他人の陰口は一切口にしない。

そのお陰で、無口は忍耐力の裏返し個性として、今まで大目に見られていた。

しかし任期満了が近いので、自衛隊を辞めるにしろ続けるにしろそのままでは社会的にまずいので、糸山は近い内彼と腹を割って話し合わなければならぬと思っていた。

遠山は返事の代わりに血の混じった痰を吐き捨て、89式をローレディー構えた。

糸山は一瞬不安になったが今は戦えるなら付いて来させるしかない。ここから出たら、戦列から外して衛生に診させよう。

五十嵐がショットシェルを込め終えた。

糸山も鉄帽の顎紐を締め直し立ち上がった。

傷だらけの3人は、エントランスホールへ向け前進を再開した。

午前9時45分？（後書き）

モデルになったヤツが一部勘づきだした。

午前9時45分？

気象観測所1階、エントランス。

前衛を進む五十嵐三曹がエントランス入り口で急に立ち止まった。後に続く糸山三曹は何事かと声を掛けかけてやめた。

中央階段の上からは、さっきは無かった人の気配と共に殺気を感じる。

待ち伏せの匂いがした。

あれから小山二曹からの連絡は途絶えたままで、無線は通信規則で糸山からの送信は禁じられている（受信した時のみ応答出来る）。やもえず糸山は緊急時呼出手順に従い、無線機のプレストークスイツチを二度押した。

カチッ カチッ。

返事はなかった。

いよいよ困った糸山は本隊に直接掛け合うか迷った。遠山が「どうするんです？」と目で訴えてきているが、進むも戻るも状況が掴めない。曲がり角でいきなり味方と出会って同士討ち、なんて事態は願い下げだった。

その時、正面玄関から国道3号線を疾走してくる重装甲機動車と装輪装甲車が見えた。機動部隊が応援に来た様だ。糸山は増援と合流して小山達を探しに行くことにした。

その前に正面玄関前は待ち伏せの危険があるので、気を付けるよう伝えなければならない。

上の階より重い射撃音が轟き、先頭の重装甲機動車が紙細工の様に宙を舞った。唾然とするトリオを前に、特大の曳光弾が機動部隊を捉え粉碎していく。

どうやら屋上か何処かに重火器が隠されてたらしい、今はそれにRPGや小火器の猛射が加わっている。

もはや迷っている時間はなかった。

糸山は「手榴弾は使うなよ」と二人に念を押して閃光手榴弾を2つ取り出した。遠山が不思議そうにしてたので五十嵐が「味方が何処にいるか分からんだろ?」と説明した。安全ピンを抜いて一発は階段の向こう側、一発は階段の踊り場に向けて投げ込んだ。閃光手榴弾は放物線を描いて狙い通り爆発した。

「行け!行け!行け!」

五十嵐を部屋に押し出し、背後に遠山を従えて駆け出した。階段を横切ると、踊り場に軽機関銃を伏射の姿勢で構えている北中国兵がいた。

北中国兵は土嚢や瓦礫で拵えた即席バリケードの後ろに陣取り格好の射撃位置にいたが、閃光手榴弾で目が眩んだのか直ぐには撃つてこなかった。

五十嵐が小銃で牽制しながら走り抜けた。糸山は必死に後を追うが差は開くばかりだ。

五十嵐昇三等陸曹は県内の私立大学を卒業後、自衛隊に一般卒の二等陸士で入隊した。彼は自衛隊に入隊はしたが戦闘職種は自分に向かないと思い、衛生科を希望していた。

しかし、大学で陸上部のフルマラソン選手だった五十嵐は、教育入隊した第17普通科連隊(自衛隊は一般二士の基礎教育は部隊で行

う)で、体育教官も追い付けない健脚を見せつけ、駐屯地持続走新記録を打ち立てた。

その結果、稀に見る逸材と連隊長が直々に「彼を手放すな」と教育隊長に命令し、彼は半ば強制的に普通科隊員となってしまうた。

射撃の腕は悪かったが、それを補って余る脚力で、箱根駅伝や富士剛力走で数々の記録を作り続け、三曹昇任を契機に結婚も決まり、今年の春から体育学校へ入校する筈だった。

当然、全力で疾走する五十嵐に、糸山が追い付ける筈がなかった。

遠山はもっと遅かった。折れた助骨が痛みスピードが出ない。

3人の間隔は3メートル以上広がってしまった。

糸山がエントランスの中央に差し掛かった時だった。彼の真上から手榴弾が降ってきた。手榴弾は糸山と遠山の間の床に落ちるなり爆発した。

糸山は爆発の瞬間、両足を思い切りバットで殴られたようなショックを感じ、その場で倒れ込んだ。

右足の感覚が無いので千切れたかと思ひ首を曲げて足を見たが、ブーツの通気孔から血が流れ出ているものの、ちゃんと体に付いていた。少し安心すると遠山が後ろにいたことを思ひ出し、彼の姿を捜した。

遠山は爆風で北棟の入口付近まで吹き飛ばされていた。壁にもたれ両足を投げ出して伸びている。

あいつ、今度こそ死んだか!?

もうもうと立ち込める爆煙の向こうで、機関銃が唸りだした。射手が閃光手榴弾の影響から立ち直ったようだ。

だが糸山が見えないらしく狙いは頭上を通り越している。

糸山は立ち上がるにも下半身に力が入らないので這って遠山の方へ向かいだした。

一方五十嵐は、東棟入口に無事たどり着いた方がいいが誰も後ろに付いてきていないので慌てていた。

なんで俺だけなんだ！？みんな何処に行った！？

五十嵐は何がどうなってるのか分からなかった。

煙が立ち込めるロビーに戻ると、床に血の跡を曳きながら這いずる糸山を見つけた。彼の頭上を曳光弾が猛烈な勢いで飛び交っている。

糸山を助けるべくタイミングを見計らっていると、天井からパラパラとコンクリートの欠片が降ってきたので、なんだと思って上を見上げたら、天井に開いた無数の孔から手榴弾が降ってきた。

慌てて伏せて爆風を避ける。手榴弾は時間調整をされていて床に落ちてから爆発した。空中で炸裂させて踊り場の機関銃手に被害が及ばないように落としているようだ。

お陰で2人とも無事だった。

手榴弾の爆発に驚いてか、機関銃の銃声が途絶えた。五十嵐はショットガンに爆裂弾を込めると、踊り場に向け一気に全弾撃ち込んだ。本来は薄い壁やドアを破壊するための弾丸だったが、上手くいった半分消し飛んだバリケードの奥から凄まじい怒号と、鉄帽が階段に転がってきた。

機関銃手を倒したと確信した五十嵐は、糸山に駆け寄ると、彼を樽でも背負うように担ぎ上げ、玄関目指して走り出した。

糸山が「遠山！遠山！」と叫んでいたが今は答えてられなかった。

玄関を抜ける直前、いきなり背後から呼び止められた。中国語だったので予想ではあるが、多分「待ちやがれ！」的な勢いだったと思う。糸山の身体越しに振り返ると、階段の踊り場に北中国兵が仁王立ちになって88式通機（汎用機関銃）を構えている。顔半分を汚れた包帯で覆ったその兵士は、また何事か喚くと引き金を引いた。

5、8ミリ弾に背中を連打された五十嵐は、防弾ベスト背面のセラミックプレートを叩き割られ、前のめりで倒れ込んだ。

床に投げ出された糸山は、止めを刺しに近づく北中国兵を見た。筋骨隆々の厳つい体格の男で、どこか小山二曹に似た精鋭然としたオーラを放っている。明らかに自分達と格が違うのが分かった。

やばい！！

しかし北中国兵は突然機関銃を肩付けすると、玄関の外へ向け掃射し始めた。

外からは応戦する複数の89式の銃声が響いてくる。何時の間にか外には装輪装甲車が来ており、降車した普通科分隊が玄関に押し寄せてきた。

数での不利を悟った北中国兵は、機関銃の弾丸を一弾帯分送り込むと、救出部隊が怯んだ隙に踊り場へ駆け戻っていった。

糸山達に助けが来た。

救出部隊は北中国兵が逃げ込んだ階段の踊り場に向け、89式を撃ちながら、五十嵐、糸山の順に外へ運び出した。

糸山は遠山が取り残されていると必死に訴え、それを聞き取った峠幸昌一等陸士が助けに向かおうとした。遠山の元へ駆け出した峠一士を、猛烈な弾幕が薙ぎ倒した。

踊り場のバリケードの上には、さっきの北中国兵が右手に88式通機、左手に75連弾倉を装着した95式歩槍を乱射していた。

何だあいつは！？サイバーダイン社製なのか！？

高台から撃ち下ろされる圧倒的な火力に、救出部隊がエントランスから押し出され始めた。

大柴浩司三等陸曹は89式を撃ちながら、うつ伏せに倒れた峠一士を引き摺って玄関から飛び出した。

峠一士は二十歳になったばかりの青年だが、下手なパチプロ師顔負けのパチンコ歴5年のベテランだった。年齢制限の事を年上の先輩達から突っ込まれると、まだ少年の面影が残る、愛嬌のある笑顔でゴマかす悪い奴だ。

大柴は装輪装甲車の影に峠を寝かせ、偶然追いついてきた猪野衛生三等陸曹を捕まえると、峠の防弾ベストを脱がしにかかった。

峠の左腕からは血が噴き出していて、猪野が射入孔を探すと、左腕を貫通した弾丸は、防弾ベストの隙間を突き抜け、両方の肺を貫通して背中から抜けている。

猪野にできることはなかった。猪野は直ちに緊急搬送を指示し、部下が折り畳み式担架を準備している間に峠は息を引き取った。

峠に続いて糸山が運ばれてきた。最初は意識が無いので五十嵐の方が重傷かと思われていたが、調べてみると、弾丸は全て防弾ベストが防ぎ、弾着の衝撃で〈脳震盪〉を起こしているだけだった。

撃たれた弾丸が5、8ミリの小口径だったのが幸いしたようで、7、62ミリクラスの弾丸だったら五十嵐は無事では済まなかった。

猪野が大きな鋏で糸山のブーツを斬り、ゆっくり脱がすと、踝から先がズタズタに引き裂かれ、ささくれだった爪先から白い骨が突き出ている。ブーツを逆さまに振ると血塗れの靴下の切れ端にくるまった指が数本、ボタボタと落ちてきた。

「おい、冗談だろ!？」

ブーツは無事なので、大したコトは無いと思っていた糸山は仰天した。みるみる顔が青ざめていく。

猪野は冷静に足の指を拾い集め、医療バックから取り出したナイロン袋に指を入れ口を縛ると、それをマジックで時間を書いた保冷パックに納め、糸山に握らせた。

「なくすなよ」

止血剤を傷口に振り掛け滅菌包帯を巻いてる最中、糸山は呆然と立っていた。

ショック状態だが、その方が手当をする猪野には都合がよかった。パニックを起こされたら堪らない。

そこへ、小隊陸曹の谷本一曹が火力支援チームを引き連れ、息せき切って駆けつけてきた。

「大丈夫か、小山達はどこにいる!？」

谷本一曹の問いに、失神寸前の糸山はブツブツと答えた。

「小山二曹の組は東棟の何処かです。応答がありません。敵は天井に孔を開けて手榴弾を落としてきます。遠山がエントランスの北側に取り残されています」

救出部隊の通信手、羽形邦夫二等陸曹が、中隊本部から施設の占拠を断念するとの指示を谷本に伝えた。

「斥候班を救出しだい撤収すると伝えろ！」

原田一尉の性格から、味方を見捨てるような事はしないとは思いますが、一応伝えておく。案の定『急がれたし』との返事が来る。

「気を付けて下さい。玄関にはランボーみたいな奴がいます」

糸山はそう言い残すと遂に気絶した。

彼は高機動車で拵えた応急救急車に、五十嵐と峠一士の遺体と共に載せられた。

谷本は救出部隊指揮官の曹長を呼び寄せ、2人で短い打ち合わせを始めた。

その間にも屋上からRPGが撃たれ、装甲車の脇で炸裂した。負傷者は出なかった。散発的に手榴弾も降ってくる。

「大野、金突、山岡は俺と一緒に正面玄関に行く。救出部隊から5名出して他に出口がないか探せ。残りは屋上の奴等を黙らせろ！」

戦いは佳境を迎えた。

―閑話?―

東地区森林地帯。
七番遁道内部。

「なんてこった…」

予備役工兵楊宝永下士は、出来上がった水筒爆薬を片手に途方に暮れた。

トンネル内に設けた資材置き場から、全ての資材が消えていたのだ。プライマーなどの工具は勿論、直流発電機発火機や検流計、導火線リールといった発火具、設置孔を掘るシャベルにツルハシ、そして一緒に置いてあった楊の中華鍋に至るまで、全て無くなっている。

騒ぎの始まりは、楊の元にトンネル内で作業していた筈の新兵が「空き巣に入られました!」と、血相変えて転げ込んだ事から始まる。

楊が半信半疑で駆けつけてみれば、この有り様である。

新兵が言うには、転進指揮所に信管を取りに行っている僅かな間に、備品が全て消えており、大慌てで楊に知らせに行ったとの事。

因みに、その時まだ鍋は残っていたらしい。

楊は直ちに資材の搜索を命じた。

他の備品はなんとでもなるが、鍋が消えたのは許せない。

部下がそれぞれ散っていくと、楊はがらんとした資材置き場を見渡した。

資材置き場は、トンネル内の短い横穴を利用して設けていた。

入り口の他には、壁に70センチ程の横穴があるだけで他に出口はない。

この小さい横穴だが、実はトンネル各所に点在していて、中は物凄く長い。

人工的に造られたものらしく、懐中電灯で照らせる範囲では、階段や燭台らしきモノが見える。

調査する技術も時間も無かった工兵部隊は「きっとキンシコウ（孫悟空のモデル）が掘ったに違いない」と冗談めかして放置していた。だが、その冗談は今では笑えなくなっていた。

楊は地面に残された「足跡らしき」モノを見て冷や汗を噴き出した。その足跡は全て靴を履いていたのだ。

3〜4歳児程度のサイズで、単純ではあるが、明らかにソールが刻みである。

それが複数、横穴まで続いている。

楊は人数を割り出す為、横穴の前の地面に1メートル四方の線を引き、その中の足跡の数を足して2で割った。往復している奴もいるので、03式歩槍を使って歩幅を割り出し、その分を計算から引く。

「最低8人」

結構な大所帯だ。

これが猿の類いであつたなら、楊はここまで驚くことは無かつた。

彼の田舎では、野生の猿による作物被害が日常茶飯事だったからだ。

楊は一瞬、この穴を塞ぐべきか迷った。

だが、地雷を仕掛ける替わりに、穴の前に携行食のビスケットと今では貴重品の煙草を3本置いてみた。

背後で若い北京語が聞こえた。

「分ん隊長オ、コレは何でありますかア？」

振り返るまでもなかった。このヒドイ訛りは黄列兵（2ゝ3等兵）だ。

名前は忘れたが湖南省出身の18歳で、面倒見の良い楊を慕って、彼の事を勝手に分隊長と呼ぶようになった新兵だ。

「ゲン担ぎのまじないだ。触るんじゃねえゾ」

神頼みなんて柄ではないが、せめて鍋だけは返してくれ。あれは親父の形見なんだ。他の物なんざどうでもいいから…。

楊の切実な願いだった。

「で、どうした？俺は備品を探せと言った筈だゾ」

「白中ウ尉が分ん隊長オを呼んでいましたア」

また、どうせ録な用事ではないと思った。

今度こそ不穩分子の疑いで「略式軍法会議」か？

だが、行かない訳にはいけないので、楊は物理的にも精神的にも重い腰を上げた。

黄がついてこようとしたので、引き続き備品を探すように叱った。

まったく、何故自分は李や黄のような坊主共になつかれるのか？最近親離れしていない奴が多すぎる。

しかし、頼られるのはそう悪い気はしない楊であった。

転身指揮所に向かう途中、隠蔽壕でヘリコプターを組み立てている一団とすれ違った。

組み立てているのは白中尉の取り巻き達で、例の北朝鮮からの鞍替え組だった。機種は分からないが、やけに縦に平べったい、2〜3人しか乗れない様な小型機だった。

どうせ、御偉いさんの脱出専用だからそれで十分なのだろう。

制空圏を取られているのにご苦勞な事だ。

そんな事を考えながら歩いていると、テイルローターを取り付けている兵士と目が合った。

何だか銃を向けられている気分だった。

因縁を付けられでもしたら面倒なので、不本意だが先を急いだ。

この時、北中国軍は想定外の危機に面していた。

七番遁道と同様の備品消失事件が全てのトンネルで猛威を振るい、爆破作業が滞るなか、二番遁道で撤退中の北中国兵24名が行方不明になる事件が発生した。

中央山側から部隊未到着との連絡で、直ちに搜索隊が投入されると、森林地帯と中央山とのほぼ中間地点で滅茶苦茶に叩き潰された味方の死体が発見された。

死体は全て、巨大な鈍器か斧の様な武器で叩き潰されており、銃器による死者は同士討ちと思われる数名を除き皆無だった。

また、北中国兵の抵抗も凄まじく、現場には大量の空薬莖が撒き散らされていたが、敵の物と思われる死体は無し。

地面には蹄のような足跡が残されていただけだった。

牛魔王が出た。

北中国兵の間にそんな噂が囁かれ始め、異常な生態系が噂に真実味を与え、伝播を加速させた。

青宝島守備隊臨時司令部は士気の低下を防ぐべく、この事案は日本軍の特殊部隊の仕業であると通知し、掃討部隊の編成と二番遁道の使用を中止。閉鎖に踏み切った。

四番、五番、六番遁道はすでに閉鎖した上、主力である二番遁道は予定外の閉鎖。

残る一番、三番はトンネルの規模が二番の半分しかなく、大人数の移動には向かない（酸欠に陥る）。

しかも二つとも国道に面している為、下手をすれば日本軍の機甲部隊に踏み込まれる危険がある。

七番に至っては、所詮非常口レベルで問題外。

更に爆破準備に携わる工兵部隊には、作業中でも完全武装でいる事が義務付けられ、見えない敵への恐怖と備品の消失に加え、作業能率の低下に拍車を掛けた。

結果、撤退作戦のタイムスケジュールに、致命的な遅れを生じさせる事態となり、自衛隊の追撃に追い付かれるのは時間の問題となった。

若干加筆、修正しました。

午前9時45分？

気象観測所北棟1階。

「00アルファ！こちら飛驒偵アルファ！送レ！」

小山二曹は必死にウエディングに着けた無線機に叫ぶが、レシーバーからは空電が帰ってくるばかりだった。

さっきの格闘で、北中国兵の蹴りを受けた時に壊れたらしい。アンテナは折れ曲がり、本体にヒビが入っていた。

「おい、寝るなよ！そのまま逝っちまうぞ！」

手榴弾の破片を受けて、全身針鼠状態の弘田士長を懷抱している斉藤士長が叫んでいる。

出血で意識を失いかけている相棒を必死に揺り動かすが、弘田の反応は徐々に鈍くなる一方だ。

かく言う彼も、背中に銃弾を受けて防弾ベストの下は血塗れだ。

小山は何とか軟禁状態から抜け出るべく、撃たれた足を引き摺り、部屋を調べて回った。

出口は無かった。

窓は全て瓦礫やガラクタで塞がれており、瓦礫を強引に切り崩そうとしたが、所々にワイヤーが張り巡らされ、それが手の届かない場所に仕掛けられた爆薬らしき箱に繋がっているのを見つけて止めた。唯一の出入り口であるドアは、防火扉を開けた瞬間、天井の銃眼から撃ち下ろされた。

「畜生、くそつたれめ！絶対脱出して皆殺しにしてやる！」

銃声の量から、正面玄関が物凄い修羅場になっているのが分かった。中隊は小山達が無処にいるか分からないので、爆薬で壁を破壊しての突入や、重火器の使用を控えてるようだ。

糸山達は無事に脱出できたのだろうか？

小山は自分達の為に中隊が窮地に陥っている事に苛立ったが、彼にはどうしようもなかった。

玄関の方で一際大きな爆音が響いた。

小山は自分達の居場所が味方に分かるよう、鉄帽を扉の前に置いた。

気象観測所、1階エントランス。

正面玄関で銃撃戦を続ける自衛隊員達は、踊り場に陣取った北中国兵と、彼を援護する天井から落とされる手榴弾に釘付けにされていた。

谷本が火力支援チームを率いて駆け付けた時、完全に手詰まり状態だった。

谷本は遠山を救出する算段を立てるべく、その場の先任者を探した。先任者は戦列に戻った大柴三曹で、彼の状況説明は思っていた以上に深刻だった。

施設内に取り残されている味方は4人。

小山二曹以下3人の居所は分からないが、遠山は北棟入口で伸びている。

玄関から5〜6メートルの距離だが、例の北中国兵の鬼神の活躍で近付けない。

火力支援に84ミリ無反動砲が加わったが、遠山がいるので撃てず、同じ理由で手榴弾も使えない。

ただし、敵も遠山が大事な人質であることを理解していて、彼を殺

さないように威力のある重火器を使わずにいるのが救いだっただ。

どの道、ここを通らなければ施設内には入れないので、多少強引だが強行突破を決断した。

谷本は火力支援チームを集め段取りを伝えた。

「発煙弾を投げ込んだら、射ちまくって踊り場の奴の頭を押さえるんだ。その隙に俺達が奴を引っ張り出す！」

発煙弾で視界を塞げば、踊り場の機関銃だけでなく、天井からの「爆撃」から身を隠せる筈だ。

大柴が部下達に援護射撃の態勢をとらせている間に、配下の火力支援チームに準備をさせた。

「突入準備！」

トリオは一斉に弾薬を込め直した。

先頭は山岡、次に大野。

その後を誰か撃たれた場合に備え、谷本が続く。

金突は残って入り口で援護だ。

「いいか、谷本一曹が遠山を助け出したら、ラーメンマンをふっ飛ばせ！」

最近やっとM2からより軽量なM3に更新された84ミリ無反動砲に、対戦車榴弾（HEAT）が込められた。

これは戦車などの装甲目標に対し、ノイマン効果と呼ばれる高温高圧のジェット噴流を、蒸発して金属分子となった銅製ライナーと共に装甲に叩きつけ貫通させる砲弾だ。

広域破壊用の榴弾もあるが、建物を破壊して入り口を塞がないための処置だ。

大柴三曹率いる支援班も準備が整った。

谷本以下火力支援トリオ達が、時間差で別々にホールを覗き込み、遠山の位置を頭に叩き込んだ。

後は踏み込むだけだ。

谷本の合図を受けて、志水仁二等陸士が発煙手榴弾のピンを引き抜き、エントランスホールの中央辺りに投げ込んだ

透化性の無い、濃密な白煙が正面玄関を覆った途端、階段踊り場から機関銃の猛射が始まった。

それに対し、大柴三曹ら支援班が応戦する。

4挺の小銃と、2挺の機関銃が階段踊り場に向け交互に火を吹いた。天井から手榴弾が降ってきたが、2〜3発落とされただけで直ぐに止んだ。

階上より中国語の狼狽した声が聞こえ、窓からバリケードを蹴り崩して北中国兵が顔を出した。

どうやら手榴弾孔から煙が立ち込め、燻製にされて「爆撃」処でなくなっただけらしい。

丁度真下にいた志水が、89式を構え、北中国兵に狙いを付けた。オプチカルサイト一杯に、汚れた中年男の顔を捉え、引き金を引いた。

北中国兵の頭が爆発したように消し飛び、大柴班の頭上に脳髓を撒き散らした。志水の足元に、前頭葉が残った鉄帽が落ちてきた。

志水は一般曹候補生の18歳。進学校出ではあったが在学中に父親が失業。

奨学金を受給できなかったため、大学への進学を諦め、家計を助け

るために自衛官だった方の叔父の奨めで入隊した。

2年1任期の一般二士と違い、最初から陸曹候補卒で、しかも縁故採用で入った彼は、事あるごとに同期の任期制隊員より比較され、上に行く行動を求める上官達の叱責を受ける毎日に、心身共に磨り減らしていたが、下の2人の兄弟を大学に行かせるべく、歯を喰い縛って耐えていた。

最近3歳下の弟が、自分も入隊すると言い出し、それが悩みの種となっていた。

天井からの援護が止み、孤立した踊り場の機関銃が大芝班の集中射撃の前に、遂にバリケードの奥に押し込められた。

好機と見た谷本は決断した。

「行け！」

山岡は濃密な白煙のカーテンを前に、踏み込むのを一瞬躊躇ったが、意を決して玄関に躍り出た。

直後、彼の鼻先に硬い「何か」が投げつけられた。

目の前に星が舞い、思わず立ち止まる山岡。

誰かに殴られたかと思い、慌てて目の前を掃射した。

ブーツが何かを踏みつけた。

白煙の薄靄の中、足元に転がるソレを見た。

一見、発煙弾の様な形状だが、青みがかかった灰色の塗装で胴体に赤く「WP」書いてある。

大野が山岡の襟を掴んで、外へ引っ張り戻すのと、白燐手榴弾が炸裂するのは同時だった。

焼夷効果のある燐片を撒き散らし、新たな白煙を玄関ホールに拵えた。

酸素がある限り燃え続ける燐から、必死に飛び退く谷本以下火力支援チームの面子。

大芝班も降り注ぐ白燐から逃れるため、慌てて玄関から離れた。

「ぎゃああああ!!」

白煙の向こうから凄まじい絶叫が上がった。

思わず顔を見合わせる山岡と大野の前に、全身から白煙を纏り付けた影が飛び出してきた。

反射的に銃を構える自衛隊員達を、影の正体を見切った大柴が制する。

「撃つな! 遠山だ!」

実のところ、遠山は手榴弾の爆風で気絶しているだけだったのである。

破片で手足に若干傷を負ったが、高張アラミド繊維製の鉄帽と、1000デニールコーデュラの生地で7、62ミリ弾に耐えるレベル? クラスのセラミックプレートを挟み込んだ防弾ベストは、至近距離での手榴弾の爆発から彼の命を救った。

遠山は何がなんだかわからなかった。

糸山三曹の後を必死に追いかけていたところまでは覚えているが、熱さで気が付いたら全身が燃えている。一体何が起こった!?

悲鳴を上げて体に着いた燐を必死に叩き落とす遠山を、谷本が地面に押し倒した。

一秒前まで遠山の頭があった位置を、踊り場からの銃弾が擦過する。遠山の左耳には、燃え盛る燐片が突き刺さり、耳朵を内部から焼き焦がしている。

このままでは顔を燃やし尽くしてしまう。

谷本は暴れる遠山をヘッドロックの要領で押さえ付け、銃剣で左耳を削ぎだした。

遠山の悲鳴のオクターブがさらに上がる。

切り取られた耳朵は、暫く青白い煙を吐いていたが、やがて脂肪を燃料にして燃えだした。

「衛生！衛生！」

誰かが装甲車に向かって叫んでいた。

猪野衛生二曹が、谷本の元へ部下と共に駆けつけて来た。

直ぐに遠山を搬送しようとする衛生班を押し留め、暴れる遠山の頭を掴み、正面から目を睨み、小山班の居所を尋ねた。
少しして遠山の目に正気が戻った。

「東棟です！最初から皆一階にしかいません！！」

もっと詳しく情報を聞き出そうとしたが、猪野がもう限界だとばかりに小隊陸曹の手から患者を引ったくった。

火傷は初期治療が負傷者の生死と、その後の人生の明暗を分けるのだ。

猪野は遠山を担架に載せるなり、谷本が何か言う前に有無を言わず運び出した。

とにかく搜索の目星はついたし、目前の敵に遠慮する必要は無くなつた。

「無反動砲射撃用意！」

しかし、待機場所にその姿がない。

何処に行った！？

谷本が大声で無反動砲を呼び続けると、装輪装甲車の陰に隠れていた射手と装填手が慌てて戻ってきた。

「馬鹿野郎！何処行ってやがる！？」

大柴が怒鳴り付けるなか、無反動砲が射撃位置に付いた。踊り場から再び機関銃が唸り出した。

装填手の梅原彰太一等陸士が肩を押さえて、仰向けに倒れこんだ。

「撃ち返せ、射撃を抑えろ！金突、山岡！」

金突が壁からSAWだけ玄関に突きだし、引き金を引いた。

その足元で、山岡が伏せ撃ちの姿勢で40ミリを撃ち込んだ。

白煙の向こうで閃光が閃き、機関銃の銃声が途絶えた。

その間に梅原一士が撃たれた肩を押さえながら起き上がり、無事な右腕で無反動砲の撃針を押し込んだ。

「準備よし！」

玄関付近にいた自衛隊員達が一斉に伏せた。

84ミリ対戦車榴弾が階段の踊り場付近を火の玉に変えた。

爆発の衝撃で、立ち込めていた白煙が一気に建物から吐き出された。谷本が、念のため手榴弾を投げ込み、爆発と同時に火力支援チームを引き連れ、エントランスに踏み込んだ。

4人は注意して、階段踊り場の銃座まで進んだ。

対戦車榴弾は、バリケードを綺麗に吹き飛ばし、ジェット噴流で反対側の壁に5センチほどの大穴を開けていた。

案の定、死体はない。

寸前に逃げたようだ。勘の良い奴だ。

大柴が支援班を引き連れてエントランスに入ってきた。二手に別れて北棟と東棟の入口に取り付いた。

志水が東棟への通路を覗き込んだ。

通路突き当たりの防火扉の前に、鉄帽を置く小山二曹と目が合った。小山は慌てて、今にも駆け出しそうな志水をジェスチャーで押し留めた。

途端天井の銃眼が火を吹き、鉄帽を弾き飛ばした。

どうやら二階から狙われていて、身動きができないらしい。

谷本が無線で外周搜索班に小山班の居場所を知らせ、ハンマーとツルハシを持って急行するように伝えた。

突然志水がもの言わず走り出した。

小山班には彼の趣味であるTRPG仲間の斉藤士長がいる。

彼を死なせるわけにはいかない。

周りが止める間も無く、彼はエントランスから飛び出した。

背後で銃眼が火を吹き、跳弾が跳ね回った。

手榴弾が投げ落とされ、破片が身体に幾つか喰い込んだ。

彼は爆風の勢いで、防火扉に滑り込んだ。

突然の乱入者に驚いた小山と斎藤は、思わず銃を構えたが直ぐに味方だと気付いて銃口を下げた。

斉藤はそれが志水だったので更に驚いた。

こいつ、何て無茶しやがる。

扉の向こうで、銃声の勢いが増した。

小山が志水に叫んだ。

「ドアを守れ！」

午前10時05分？

東地区森林地帯七番遁道。

「何てこった…」

彼は資材置場を埋め尽くす各種爆破機材を前に、ただ狼狽えるしかなかった。

「これはどういう事だ、楊下士!？」

転進監督指揮官の少校（少佐）に詰め寄られるが、そんなコトは逆に自分が聞きたいぐらいだ。

転進指揮所で今後の作業命令を受けた後、新たに受領した発火具を持って戻ってみれば内部が何やら騒がしい。

右往左往してる部下達を捕まえ、問い詰めてみればこの事態である。部下達によると、異変に気付いたのは楊が出ていってから直ぐ。資材置場から複数の気配と聞き覚えの無い言語の話し声があるので覗いてみれば、天井一杯まで爆薬や導火線等が積み重なっていたとの事。

本来なら備品が戻ってきたと喜ぶべき所だが、それが各作業現場より消えた代物だと判るとそうもいかない。

報告するかなり迷ったが、とても隠し通せるモノでない。

結果、楊とその作業班一同には妨害工作の疑いがかけられた。

ただでさえ転進作業が遅れている上、名前だけの指揮官という立場に、不満が積み重なっていた少校は、怒りの矛先を楊にぶつけた。

「どうやって盗み出した!?!」

想像通り窃盗嫌疑を掛けられ、報告した事を心底後悔した。しらばっくれて埋めてしまえば良かった。

「いや、自分にもサッパリでありマス:」

遂に少校が爆発した。

「貴様等全員を逮捕する!」

後ろに控えていた衛兵が進み出た。

楊以下、作業班の面々は銃殺にされると浮き足立った。

「・・・待って頂けませんか?」

いつの間に紛れ込んだのか、白中尉が衛兵を押し止めた。

衛兵達は、白中尉の姿を認めると、弾かれたように直立った。

少校は、それが面白くないのか「邪魔をするな」と白中尉に噛みつくが、白は意に介さない。

「この状況でワザワザ自首する奴がいると思いますか?」

少校は自分ならとる行動と、白の至極真つ当な指摘を受け困惑した。楊はもっと言ってやれと心の中で喝采を送った。

しかし少校は「ここにあるモノはどう説明する!?!」となお喰い下がる。

「真相を究明するのは大事ですが、今はこれ等を各現場に手配するのが先です。それに、この5分前に私もここを訪れましたが、その

時は何もありませんでした」

それは本当だった。

爆破作業の進捗具合を見にやって来たが、入れ違いに楊が指揮所に向かったと聞き、白も後を追いついて指揮所に向かったが、そこでもまた入れ違いになったのだ。

「中尉。余計な底い立ては身の為になら無いぞ」

苦し紛れの少校の言葉に、トンネル内の空気が凍りついた。

白中尉が凄まじい殺気を放ち始めたからだ。

しかし、事務屋が本業の少校には、それを感知する本能が備わっていない様で、周囲の空気に構わず言葉を続けた。

「貴様が連れてきたこの男は以前日本に住んでいたそうじゃないか？この状況で日帝と繋がっていると考えるのが…」

白中尉が絶対零度の息を吐きながら遮った。

「・・・私がチョッパリの手先を、生かしておくと思いますか？」

流石に少校もただならぬ気迫を察知し口をつぐんだ。

楊も噂で聞き及んでいる程度だが、白中尉等北朝鮮からの編入連中は、前職の人民武力偵察局で美国アメリカを初め日本や韓国を含む西側各国で、非法な対外工作に従事していたらしく、その中でも白中尉はインターポールから国際指名手配されている大物ではないかと囁かれていた。

それ故に戦争に負け全軍降伏となった場合、彼等は死よりも捕虜になるコトを恐れていると。

トンネル内を支配する気まずい沈黙は、伝令が駆け込んできた事で破られた。

伝令の若い兵士は資材置場に飛び込む否や、敬礼もそこそこに白中尉に一枚の紙片を手渡した。

即座に殺気を引っ込めた白は紙片に目を通すなり、手帳を取りだし新たな指示を書き留めた。

頁を破って伝令に渡す直前「読めるか？」と問い、伝令が文章をたどどしく読み出したので「お前に伝令を任せた者か、字を読める者に渡すんだぞ」と念を押した。

自分ではなく白中尉に報告したのが気に入らない少校は、伝令に詰め寄ろうとするが直ぐに白中尉に諭された。

「少校殿。こちらに来られることを、本部の誰かに知らせましたか？」

返す言葉に言い淀んだ少校に白は畳み掛けた。

「敵は観測施設の占拠を諦めた模様です。閉じ込められた偵察兵を助け出すため右往左往していますが、そう長くは持たないでしょう」

次の言葉が止めとなった。

「それと、周辺に特殊部隊が浸透していて上空の爆撃機を誘導しているようです」

爆撃機と言う単語に色をなした少校は「ここは任せた、戻るぞ！」
と言い放つと、踵を返して出口に向かっていった。

すれ違い様、楊は白中尉が衛兵の1人に目配せしたのを見逃さなかった。衛兵はそれに頷くと少校の後に続いた。

なんのコトはない。

彼等は護衛ではなく、少校が勝手に脱出しない為の監視役なのだ。

少校が去ると、トンネル内の空気が一気に弛緩した。

た、助かった。

しかし、今度は白中尉が射るような鋭い視線を向けてきた。

「・・・何があった？」

一瞬息を飲む楊達だったが、白のそれは疑惑から来るものではなく、誤魔化さずに話せという感じのモノだった。

楊も腹をくくり、全てをありのまま報告した。

何よりも、誤魔化したら最後。一瞬で見抜かれ射殺されそうだった。

最初は七番遁道も、資材を盗まれたコト。

次に戻ってきたら資材が山積みになっていたコト。

横穴と足跡のコト。

鍋が未だに行方不明だというコト。

今度は部下達も必死だ。

訳が解らないのは自分達も同じだと口々に捲し立てる。黄に至っては泣きながら「嘘じゃあ、ないィでいすウ！」訴えた。

「その横穴って言うのはどれだ？」

白がその様子に思わず苦笑しながら尋ねた。

「コレです!!」

全員が一斉に指差した先にあるモノに、楊は目を剥いた。其処には見慣れた中華鍋が「立って」いた。

「・・・あるじゃないか？」

白中尉の指摘に慌てる楊。さっき迄確かに鍋はなかった。横穴の周囲に視線を走らせた。

しかし置いた筈の煙草が、無い！？

直後、鍋が「倒れた」。

否、誰かが取り落としたのだ。

そこには人の形をした誰かがいた。

身長は50センチ位で、子供とは違う完全な二頭身。白目の無い瞳に真っ白な肌に銀髪。革で出来ているらしい、ポケットが沢山付いた黒のベストを着ていた。

性別はハッキリしないが多分男らしい。

「ソイツ」は作業班にタイミング良く指差され、凍りついていた。白を除く全員が思考停止する中、ソイツは大勢が整列している部屋に迷い込んだ子供の様に、ペコリと一礼すると、脱兎のごとく横穴へ向け走り出した。

見かけに反した素早さに、楊達は呆然としていたが、白は違った。

電光石火で脇に吊るした拳銃を引き抜くと、照星を使わずソイツの足元に三発撃ち込んだ。

ソイツは驚いて横穴から飛び退き、壁沿いに走り出した。

白はそのまま拳銃を撃ち続け、ソイツを横穴から引き剥がし資材置場の隅に追い立てた。

弾倉を換えながら白が叫んだ。

「捕まえろ！」

大捕物が始まった。

午前10時05分？

「何てこった」

同時刻、第1前方支援地域糧食班調理天幕。

広報幹部、原沼晃一等陸尉は目前で繰り広げられる大騒ぎに呆然としていた。

糧食班員全員が包丁とまな板を振り回し、何かを追い回している。どうやらネズミが出たらしいが、それにしたって騒ぎすぎだ。

オタマを指揮棒代わりにしている大柄な糧食班長に恐る恐る尋ねた。

「あの〜ゲストの会食の件なんだけど…」

しかし本人は狩りに夢中で気が付かないらしい。

「渡辺、そっち逃げたで！川畑、飯缶持ってきや！角っこに追い込むんや！」

階級を傘にかけた行動が嫌いな原沼は、大人しく騒ぎが収まるのを待った。

原沼二尉は西部方面総監部より、国外の報道関係者案ね内兼通訳として派遣されてきた。

今朝未明、3ヶ国語を操る彼は航空自衛隊那覇基地より各国プレス40名をCH-47JBに載せ国端新島へ飛び立った。

しかし途中で北中国軍機飛来との警報が流れ、航空護衛艦ひゅうがに緊急着陸する羽目になり、一同は船酔いに悩まされつつ1時間遅

れで国端新島に着くことになった。

予定では阿佐嶋副師団長の記者会見と早めの昼食の後、国端富士包囲部隊へ案内する手筈となっている。

携帯糧食等ではなく、実際に調理したものを披露する事で、自衛隊が兵站を整え日本側の戦況有利を内外へアピールする事が狙いだ。だが、準備は問題なく進んではいないようだった。

「捕獲〜！」

川畑卓一等陸士が飯缶ばっかんと呼ばれる保温容器を掲げて叫んだ。中で獲物が暴れてるらしくガタゴト容器が揺れている。

「主計長、捕獲しました！」

主計長と呼ばれた男。陣乃風じんの・ふひと一一等陸曹は満足そうに頷いた。

「ようやった！全員拍手！」

天幕内に響く仲間達の拍手喝采に川畑一士は特徴のある笑顔で応えた。

彼には前歯が無かった。本人は喧嘩だと言い張っていたが、シンナー摂取による欠損なのは明らかだった。

「あの〜糧食班長。プレスの会食の件だけど・・・」

原沼二尉がこれ以上待てないと、意を決してもう一度声を掛けた。以外と直ぐ反応が帰ってきた。

「アカン、そーやった。拍手やめえ！作業再開！」

原沼は不安になった。

これはただのサービスではなく、情報戦の一端なのだ。

広報幹部の焦燥を感じた陣乃は「仕込みは終わって後は盛り付けだけ」と説明した。

「なんせ自分んトコの兵隊差し置いて、他所の文屋に振る舞うんやから大層な事でっしゃろ？腕によりかけてるさかいに、安心してや！」

階級を無視して関西弁で豪快に笑うベテラン上級陸曹に、原沼はただ愛想良く頷くしかなかった。
意図を酌んでくれているだけ良しとしよう。

そこへ、川畑が先ほどの飯缶を持ってやって来た。

「主計長、こいつ急に大人しくなりました」

陣乃は何かを思いつき、飯缶を受け取ると中に手を突っ込んだ。

「よっしゃ、コイツを文屋さん達にご披露や！」

「班長、ネズミじゃないだろうね？」

「違いますがな、イタチに似とりますが尻尾が三本ありまんねん」

陣乃がそのぐったりしたイタチもどきの首根っこを掴み、原沼の前に突き出した。

全長20センチ位。全身黄金色羽毛に、確かに尻尾が三本。これは珍しい。

原沼が首に架けていたEOS1デジタルカメラを構えた。「ちょっと待ってや」と記念写真とばかりに川畑と近くの班員を集めポーズをとる陣乃ら糧食班の面子を絶妙なトリミングで排し、イタチもどきをファインダーに入れた。

A Fモードで一枚、予備にネガフィルムの二眼レフカメラ、現場監督で一枚。

その時、イタチもどきが息を吹き返した。

カッと緑の眼光を放つ両目に加え「額」の赤い目玉がファインダー越しに原沼を睨んだ。

思わず飛び退く原沼。

その様子に怪訝な表情でイタチもどきに視線を向けた糧食班達は、その面妖に一斉に悲鳴をあげた。

陣乃も思わずイタチもどきを放り投げる。

イタチもどきは空中で一回転して調理台に着地し、恨めしそうに一同を一睨みすると、猛スピードで出口から外へ駆け抜けていった。

「・・・何だ、あれは？」

誰となく、そんな声が聞こえた。

原沼の第六感に近いうちに厄介ごとに巻き込まれると叫んでいた。彼は48時間と言わず、今すぐこの島から帰りたくなった。

「何だあれは？」

BBCワールドニュースの特派員、ケリーFマークスは空を見て呟いた。

自分達を案内してきた日本軍の将校がキッチンテントに消えてから暫く、レポートする物もなく、上空から轟く戦闘機の爆音に何気な

く見上げたときだ。

丁度島の上空、七千メートル位か？奇妙な形の「雲」を見つけた。雲は見事な円錐形で、大きさはこの距離からではハッキリしないが、かなりの大きさのようだ。

風が強いらしく、同高度に浮かぶ雲は流れ去るというのにその雲は先程からずっと静止し続けている。

こんな物は11年の特派員としてのキャリアはもとより、38年と1ヶ月の人生の中でも記憶に無かった。

「撮りましたよチーフ」

カメラマンのアンドレ・ビンセントがハンディカメラを廻しながら応えた。

「本当に？」

「ええ間違いない。今のイタチ、尻尾が三本あった」

ビンセントはキッチンテントの方を向いていた。

ビンセントはテントから聞こえてくる騒ぎから何かを察知し、ずっとカメラを廻していたのだ。

彼は勘が鋭く並外れた動体視力をもって、数々のスクープを捕らえ続けた頼りになる相棒だ。

彼は取材チームの中では一番若い26歳。独身主義の自分とは違い、三男二女の子沢山な家庭の持ち主だ。

そこへ衛星電話で本社に定時連絡を入れていた警護担当兼通訳のドナルドバーグマンが戻ってきた。

「やれやれプロデューサーから何か「絵」がないか矢の催促だよ」

背中に大きくプレスロゴの入った防弾ベストに衛星電話をしまいながら、やれやれとため息をつく。

バーグマンはチーム最年長の43歳。

元英国海軍特殊舟艇部隊出身で、湾岸戦争の時に砂漠の嵐作戦に従軍した経験をもつ。

以前日本の英国大使館の警備を担当したことがあり、日本語に精通していた。

家族は別れた妻との間に娘が一人。

仕事上がりにパブでの一杯と、裁判所が決めた月二回の娘とのデートが人生の最大の楽しみだと言う。

バーグマンとは2003年のイラク戦争からの付き合いだ。

「仕方ないさ。日本軍も情報漏洩や内通を気にしてピリピリしてる。連中、従軍取材なんて受け入れた事がないから勝手が解らないんだ」

「言い変えれば、目を付けられたら何をされるか解らない・・・か」

それは事実だった。

現にナハ・ベースでどうせ解りはしないとタカをくくり、堂々と母国語で生放送の算段を立てていた台湾とフランスの取材陣が従軍名簿から外されていた。

マークスとバーグマンが日本を紛爭取材で訪れるのは実はこれが二回目だった。

2015年の北朝鮮動乱で、ハカタで繰り広げられた武装難民による大暴動事件の時だ。

あの時日本政府の腰は重く、警察の縄張り意識もあり鎮圧に軍を動

員することに消極的だったことが被害の拡大を招いた。

当時マークスは第8師団司令部に取材を申し込むが一蹴され、バグマンの軍人時代のコネクションでイチガヤの国防省を通じて封鎖地域内での取材許可を得た。

ただし従軍ではなく完全な単独取材。市街で出合う治安部隊に取材を申し込むと大抵取材拒否か本部に指示を得た後に指揮官が型通りのインタビューに応じる程度だった。

この時アンドレの兄で取材チームのベテランカメラマンだったポールビンセントが流れ弾に当たり死んだ。テントから案内役の中尉が出てきた。

「皆さんお待ちせしました。案内にしたがってダイナーテントまでお越しください。メニューはチキンカレーです」

それを聞いてマークスとビンセントはげんなりした。

匂いで予想はついていたがやはり堪える。

彼らはヒュウガとか言うヘリ空母に留め置かれた間、荒波に揉まれ船酔いからまだ立ち直っていなかった。

どうせ兵站と補給線が確保され日本の有利をアピールしたいのだから、まさかカレーとは！

喜んでるのはバグマンだけ、マークスは日本軍のセンスを疑った。

「皆さんしつこいようですが、この後国端富士の我が軍主力部隊へ向かいますが、道中と現地での生放送は作戦行動中のため原則禁止です。本国との衛星電話による通話も同じくです、宜しいですか？」

マークスはハラヌマ中尉の訴えを聞き流し天を仰いだ。

上空には相も変わらず、件の奇妙な雲が蒼天に鎮座していた。

この日の沖縄気象台の予報は晴れ。

降水確率0%。湿度40%で最高気温38℃の文句なしの真夏日。
夏に付き物の熱帯低気圧もなく、雲一つない晴天である筈だった。

午前10時05分？

東地区気象観測所北棟1階。

死の短距離走を走り抜いて斥候班と奇跡の合流を果たした志水は、ドアを守る斎藤より小山二曹の手当てを命じられた。

小山は弘田の応急処置を優先させたため、太股をバンダナで締め付けての圧迫止血以外は足の銃創はほぼ手付かずになっていた。志水は銃弾で歪に捻れた小山の足を真っ直ぐに伸ばしズボンを裂いて射入孔を探したが、大腿部に入った弾丸は貫通はせず脚内に留まっていたようだった。

初めて見る銃創傷に一瞬怯んだが、意を決して救急包帯を巻き付けた。モルヒネを頑なに拒む小山は、包帯が締め付けられる度に絞り出すような呻き声を上げるので、手当てする方は患者が出血多量で死ぬよりも、いきなり殴られるのではないかと気が気でなかった。

「窓は駄目です。やるなら壁を崩してください！」と小山。彼は志水が持ち込んだ新たな無線機で谷本一曹と連絡を取り合っていた。少しして谷本から応答が来た。

『敵は何処にいるか分かるか？』

「階上に最低2名。うち1名は強敵です！」

小山が銃で撃たれたのはこれが2回目で、最初は2015年のインドネシアPKFの時だ。

インドネシア・イスラム革命勃発時の日本は、朝鮮動乱で武装難民

が引き起こした暴動事件の復興と治安回復の真っ最中で、自衛隊も緊急展開戦力を使い潰し、再編と損耗戦力の建て直しを図っていた矢先だった。

国力に余裕がない状況でPKF参加が閣議決定され部隊の編成は困難を極めたが、紆余曲折と各省庁の努力の末、1ヶ月後には重火器無しの不完全なモノではあるが第1陣出発までに漕ぎ着けた。

しかしスカルノハッタ空港に到着した軽装備の自衛隊員達に現地PKF司令部から言い渡された任務は、イスラム武装勢力の活動が最も活発とされるアチェ州での治安維持任務であった。

運命の日、ダンハン空港の正面ゲートで警衛任務に就いていた若き小山三曹の前に「ジョン・レノン」がギターを抱えてぶらりとやって来た。

正確にはジョン・レノンの物真似をした白人の男だったが、男は戸惑う小山の前で唐突に「イマジン」を歌い出した。

訳が解らなかった。男の背後では相棒おぼしき男が笑いを堪えてハンディビデオを回している。

実は彼等はアメリカのバラエティー番組のスタッフで、偽物ジョン・レノンは低俗だが体を張ったイタズラやチャレンジを売りしたスタントマン上りの人気コメディアンだった。

ようやく警備陣が偽ジョン・レノンにからかわれてることに気付き始めた頃、同じく空港に配置されていた仏外人部隊がやって来た。アジア系の兵士が大股でカメラを回す男に近付き、小銃でカメラを叩き落とすなりブーツで踏み潰した。そして偽ジョン・レノンにキックを一発。

「失せろ！」

外人部隊兵士の民間人相手の荒っぽい対処に唾然としている小山に、その兵士が詰め寄った。彼は自分より若干若い日本人だった。

「あんな奴等追い返せ、『ここは隙だらけです』って全世界に宣伝させる気か!？」

日本人兵士の迫力に気圧された小山は言い返せず、ただ頷くしかなかった。

その時、空気を切り裂く鋭い破裂音と共に、日本人兵士が崩れ落ちた。慌てて体を受け止め、声を掛けたがゴボゴボとぐぐもった声しか返ってこない。彼の防弾ベストの背中には大きな孔が開いていた。誰かがスナイパーだと叫び、再び銃声が聞こえ、今度は偽ジョン・レノンが頭を撃ち抜かれ倒れた。周囲にパニックが広がり、狙い撃ちにされているのに気がついた。

この時小山は日本人兵士を抱え掩体壕まで引き摺って下がるうとして右足を撃ち抜かれたのだ。そして5年後、再び同じ場所を撃たれた。

5年前は骨も神経も外れて貫通銃創で済んだが、今回は足が膝より下が砕けているのが自分でも分かった。よくもまあ、殴り合いをやれたモノだ。

もたれていた壁に振動を感じた。何事かと耳を澄ます彼等に、外からハンマーで壁を叩く音が聞こえたのはその時だった。

東地区気象観測所北棟2階。

谷本は斥候班救出まで敵を牽制するべく、火力支援班と共に施設2階へ進んだ。階段は2階以降取り壊されていて登れなくされていた。谷本は階上の敵が手榴弾を投げ落としてこないよう見張りに1人残すと2階エントランスへ突き進んだ。

北棟に進む廊下の先には土嚢が積まれており、待ち伏せされているのが馬鹿でも分かる状況だった。

廊下からの銃撃をギリギリまで避けるため壁づたいに進むことにし、エントランスに面した一番手近な部屋に飛び込んだ。

部屋は狭く屋内戦闘の基本人数の4名は入れそうにない。2番手に部屋に入った山岡が「ショートルーム！（人員がこれ以上入れないの意）」と叫んだ。

後ろに続いていた大野と金突は部屋には入らず北と南にそれぞれ銃口を向け、エントランスの壁に張り付いた。窓際には志水が射殺した北中国兵の首無し死体が穴だらけの床に倒れていた。

部屋は壁の一部が取り壊され隣室と繋がっていたが、敵の侵入を予想してか、向こう側より土嚢を詰めた砲弾ケースのバリケードで塞がれていた。谷本はバリケードにこっちを狙う銃眼が無いことを確認すると、どうにか動かせないか試しに肩で押してみたが砲弾ケースはビクともしない。

さて困った、爆破しようにも手榴弾では威力不足だ。山岡に指向性爆薬を取りに行かせるか考えたがそんな余裕はない。

谷本は一計を案じ、山岡を部屋の外へ押し出した。砲弾ケースの壁の真ん中を銃剣で切り崩し、そこに89式用小銃擲弾を突き立てた。安全帯を外し信管を引き出して点火。谷本が部屋から飛び出した直後、バリケードは跡形もなく吹き飛んだ。

吹き荒れる粉塵の中、老練な小隊陸曹は目を白黒させている擲弾手に「真似するなよ」とニヤリと笑いかけた。2人は粉塵が収まると再び部屋に踏み込んだ。

バリケードの残骸を抜けると、その先は同じ間取りの部屋で部屋全体が真っ黒く煤けていた。

その時廊下から大野の怒鳴り声が聞こえ、唐突に銃撃戦が始まった。扉の無いドアの向こうで2種類の曳航弾が激しく飛び交っている。

バリケードを爆破したのが敵の逆鱗に触れたらしい。北中国兵は無茶苦茶な機関銃の乱射を大野達に浴びせていた。

応戦する金突がムキになってSAWの長い連射を銃座に浴びせていたが、敵の銃火は一向に衰えない。大野も89式を3点バーストで機関銃を狙うが、敵兵に命中弾を与えられずにいた。接近戦になると大野の武器では分が悪いようだ。

「手榴弾投げるぞ、3秒！」

谷本が叫び手榴弾のピンを引き抜いた。小隊陸曹の命令を了承した大野と金突が猛射を開始し、きっかり3秒で射撃を止めた。入れ違いに谷本がドアから半身を乗り出し、手榴弾をバンカーに投げ入れた。炸裂と同時に絶叫と銃撃が止んだ。好機と見た谷本は配下の隊員達に突撃を命じた。

「突入、前へ！」

谷本を先頭に山岡、金突、大野が一行で壁沿いに駆けだし、階下より大柴三曹率いる支援班も2階に上がってきた。

土囊の中には北中国兵が2人機関銃にもたれて死んでいた。射手は

右足が無く、給弾手は山岡よりも若い少年兵のようだ。谷本は念のため2人に数発撃ち込み、更に奥へ進もうとした。

廊下の奥から赤い何かが投げ込まれ、派手な音を立てて床を転がった。

谷本はそれが消火器だと分かったが、何故か煙を噴いている。胴体には針金でくくり付けた、手榴弾!?

谷本は咄嗟に消火器爆弾を土嚢のなかに蹴り飛ばして山岡を押し倒した。

大音響と共に開放された圧縮酸素がもたらす衝撃波が、躍り出た自衛隊員達をカウンターパンチとなって薙ぎ倒した。

泡状に続いて今度は粉末消火剤まみれになった谷本は何とか立ち上がり、足元で目を回している擲弾手を手探りで引き起こしてさっきの部屋へ押し戻した。後に続いていた連中は無事か確かめようとした時、ドアの前を誰かが猛スピードで駆け抜けた。

支援班のリーダー、大柴三曹は消火器爆弾の爆発で、部下と共に壁に叩きつけられた。息が詰まり、2、3秒俯せに倒れていたが直ぐに立ち上がった。

辺りを見回すと、粉末の消火剤が辺りに立ち込めるなか、見覚えのある影が2人、大野と金突だ。火力支援班の3人は『頑丈』と言う共通点を持っていて、今回も爆心地に自分達より近くにいたにも関わらず、既に2人共に銃を構えていた。しかし何故か大野の銃口はこちらに向いている。

金突が何かに気付いて振り返った。長身の機関銃手はSAWを片手で支えると、あらぬ方へ武器を構えている相棒の肩を掴んだ。

「こっちだぞ」

大野は驚くと慌てて小銃を反対方向に構え直した。おい、ちょっと待て。

「敵が行ったぞ！」と廊下の奥から谷本の警告を発する叫び声し、同時に消火剤のカーテンを切り裂き跳躍する影が現れた。

咄嗟に武器の狙いをつけるより早く、マシンピストルとナイフを振りかざした大柄な北中国兵が、猛然と彼等に襲いかかった。

気象観測所北棟1階。

外周搜索班の田所進陸士長は、壁に向かって必死にハンマーを振っていた。

屋上の敵が手榴弾を落としてくるのではないかと気が気でなかったが、中から斎藤の「早くここから出してくれ！」との叫び声が聞こえた瞬間、不安は全て忘れることにした。

壁を爆薬で吹き飛ばす案が出たが、中の斥候班が危険と判断され、時間が掛かるがこの方法が選択された。

最初はこんなモノでコンクリートが壊せるのかと思っていたが、長いこと風雨に晒され劣化していたのか、壁はハンマーの2〜3振りで呆気なく崩れ始めた。それを見た搜索班の面々は嬉々としてハンマーを振るい初め、5分後には狭いが人1人抜けられる穴を拵えることができた。

志水は先ず重症の弘田士長を穴に押し出した。

弘田は体重が50キロを切る中学生並みの細身な体型のお陰で、そんなに外へ出すことができた。続いて足を撃たれた小山二曹を思ったが、本人は頑として自分は最後だと言って聞かなかった。

争っていても仕方がないので、先に斎藤が行くことにした。斎藤は

弘田と違って肩幅があるので、各種戦闘装具を全て外さなければならなかった。案の定引っ掛かり、それでも擦り傷だらけになりながら無理矢理穴を通り抜けた。

いよいよ小山と志水だけになると、またしても小山が先に行けと志水に命じた。しかし小山が自力で動けないのは明らかなので、構わず小山の防弾ベストをクイックリリースハンドルを引きバラバラにして脱がすと、迷彩服の肩章通しを掴んで強引に床に寝かせた。

小山が何事か喚いて志水を殴り付けたが、その拳には最早力が入ってなかった。

いざ穴に通そうとした時、問題が発覚した。斎藤以上に大柄な小山は、防弾ベストを脱いでも出られそうにない。

志水が外の連中に穴をもう少し広げるように言おうとした時、足元で異様な音がした。小山が自ら肩の関節を外したのだ。志水は中級陸曹の荒業に戦慄した。

これがレンジャーか！

何とか小山を外に押し出す事ができ、今度は自分と2人分の武器と装備を穴に押し込み、最後に忘れ物はないか室内を見渡した。血溜まりしか残っていないコトを見定め、自分も穴に滑り込んだ。

穴は予想以上に狭い上に所々鉄骨が突き出て抜けるのに難儀したが、最後は外から腕が差し込まれ、出口まで引っ張り出してくれた。

外に出ると既に弘田と斎藤は救急高機動車へ運び出されていて、小山を運び出すために田所とその援護役が1人残っているだけだった。志水は手早く武器と戦闘装具を身に付けると、小山の肩に手を回した。すかさず反対側に田所士長が付いて一緒に小山を引き起こして

くれた。

3人3脚>小山は歩けなくで装甲車へ向けて急ぐ最中、89式を屋上に構え2人を援護していた隊員が無線に叫んだ。

「救出完了！」

H23年1月21日加筆修正し再掲載いたしました。

なんだか、気がつけば舞台の辺りがリアルにきな臭くなってまいりました。

午前10時35分? (前書き)

お待たせしました。

携帯での文章の作成は手間が掛かります。

午前10時35分？

国端新島上空2000フィート。

航空自衛隊那覇基地より飛び立った2機のF-2C支援戦闘機が、作戦空域に到着した。

那覇基地は2013年の沖縄沖地震で一時は壊滅するも、震災後の国境緊張から拡張再建され、放棄された在日米軍嘉手納基地に代わり、東アジアの前哨基地となっていた。

F-2Cのフライトリーダー、赤松修三等空佐は34歳のシニアパイロットだ。

彼は初め国際旅客線のパイロットを夢見ていたが、如何せん母と妹2人の母子家庭。1人なら幾らでも遣り繰りしていく自信はあったが、家族のために民間の養成学校は諦め、高校卒業と同時に航空学生を受験した。

もともと、生涯自衛隊に勤める気は更々無く、何年か勤務したら民間航空会社に転職するつもりでいた。

だがその目論見は、教官から基本操縦課程の終わりに、戦闘機導入課程への進級を言い渡されてご破算になる。

赤松は将来旅客機操縦に役立つ大型機操縦課程を希望していたが、教官達より「極めて冷静沈着」との評価で、超低空で敵防空網を掻い潜る支援戦闘機乗りに適正有りと判断されたのだ。

意図せず音速の世界に飛び込む羽目になった赤松は、戦闘機転換課程を無事修了し、築城基地第6飛行隊に退役が迫るF-1支援戦闘

機最後の新人パイロットとして配属された。

配備以来、殆ど改良がなされなかったF-1の旧式な電子装備に苦勞する毎日であったが、飛行1000時間を超えルーキーの肩書きが取れた頃、最後までF-1を使用していた第6飛行隊も遂にF-2への機種転換が始まった。

赤松はF-1と比べ物にならないF-2の大推力と空戦能力の高さに一発で惚れ込み、慣熟訓練を終えた時には国際線パイロットの夢は頭から消え去っていた。

北朝鮮動乱の翌年、防衛省は尖閣諸島を巡る情勢から、西方戦力増強の一環としてF-15Jの延命改修とF-2飛行隊の増設を決定した。

沖縄沖地震の後、中国だけが国防費を震災前と同じ水準に保ち続けたのが周辺国の不審を買い、加えて2015年には空母を2隻を相次いで就航させた事が決定的となった。

特に日本は、震災で沖縄の主要基地機能を失った米軍が再建を諦め、グアムに移転した事が中国脅威論を過熱させた。

赤松は新設される第10飛行隊へ転属となり、飛行隊には能力向上型のF-2Cが配備されることになった。

F-2Cは2004年にロッキード・マーチン社が提唱した独自改造案を踏襲し、コンフォーマルタンクの装備と対地攻撃能力を徹底的に強化した機体だ。

ただし、ロッキード・マーチン社案が複座式だったのに対し、C型は生産コストと電子機器の能力向上から単座式となっている。

国端新島事変勃発初日、FS飛行隊は北中国軍守備隊の防空体制を

破壊する事に成功する。

しかし、翌日から慶安空軍基地から飛び立つ北中国空軍機の飽和攻撃に、赤松らFS飛行隊も全国から集結した増強部隊と共に制空戦闘に出撃した。

護衛艦との共同で熾烈な要撃戦を繰り広げ、多大な犠牲を払いつつも善戦し、北中国空軍の航空作戦は日を追う毎に減少していった。

8月3日。遂に日本が国端新島の制空権を完全に掌握。懸念されていた2隻の航空母艦は、最後まで前線に姿を現すことはなかった。そして赤松達は、国端新島事変勃発後初めて、空からの驚異を気にせずに味方地上部隊への航空支援任務に勤しむ事ができたのである。

『雷電01、こちらナハGCI。間もなく流星17とランデブー。スイッチブラックでコンタクトせよ』

そら、おいでなさった。赤松は周波数を合わせるとFAC（前線航空統制官）を呼び出した。

「流星17、こちら雷電01感明度は？」

『雷電01、こちら流星17だ。感明度良好。フライト陣容を知らされたし』

「雷電01了解、ミッションNo. 8, 069、当編隊はF-2Cの2機編隊。各機Mk82（500ポンド爆弾）が6発、GBU（クラスター爆弾）が4発、ナパームが2発。20ミリ弾500発を搭載」

『Mk82が6、GBUが4、ナパームが2、20ミリが500、

了解。君たちの目標はアルカディアへ空自が付けた国端新島の隠語
＼東地区の森林地帯に逃げ込んだ敵残存兵だ。国端富士への抜け道
があるらしい。地上部隊が急行中だが激しい抵抗に遭い、到着が遅
れている』

目標上空はパイロット達にとって魔の空域だった。

理由は解らないが、森の上空に差し掛かった途端、何故か全ての航
法装置がエラーを示し役に立たなくなる。日中両軍とも森林地帯周
辺での墜落事故が相次ぎ、遂には飛行制限空域にされ、森の上空を
飛べるのはVFRへ有視界飛行が可能な昼間だけだ。

『地上より偵察チームが目標を指示する。雷電01、貴機から見
てベクター0-9-0に当機を視認できるか？』

方位0-9-0。自機から左手やや下方に、迷彩色の中型機0-4
が見えてきた。

0-4は川崎重工製T-4中等練習機を改造した前線航空統制機で、
前機種であるレシプロ機の傑作MU-2改造機の後継だ。

亜音速飛行が可能で安定した飛行性と良好な視界を持つ。

固定武装は無く、搭載するロケット弾は目標指示用の発煙弾で、E
CMポッドとIRジャマーを装備しているが、戦闘機など空からの
驚異には無力だ。

「流星17、貴機を目視した」

『雷電01、こちらでも見えた。これよりデータリンクを開始。ユ
ーコピー？（受信してるか？）』

0-4のキャノピー越しに、後部座席の乗員が手を振っていた。

彼ら前線航空統制官は、複数の無線機を操り、地上と攻撃機との間を取り仕切る。この瞬間赤松達はFACの指揮下になり、自らの階級に関係無く、この練習機がボスだ。FACの許可無が無ければ、如何なる物も地上に投下できない。

「アイコピー（受信した）、仕事に掛かろう」

『了解雷電フライト、当機は目標マークの為に8番ホールグリーン（東地区森林地帯の隠語）に向かう』

「了解、雷電01より02、マスターアームオン（主兵装装置）」

『ああ、そうだった。地上の脅威は携帯SAM（対空ミサイル）が報告されている。注意してくれ』

赤松は短く了解と応え、コンソールパネルを操作してデータリンクシステムにアクセスコマンドを入力した。FACからAEWC（空中管制機）経由で高度と位置データを受信し、HUDに投^{ヘッドアップディスプレイ}影する。

自機のナビゲーションシステムが当てにならない以上、FACからのデータ送信が頼りだ。

レーダーを探索モードから対地攻撃モードに切り替え、兵装選択ボタンでMk82爆弾を選択した。

O-4が機体を反転させ急降下に転じた。

翼下の70mmロケット弾ポッドから2発の白磷ロケットを発射し、O-4は命中を見届ける事無く、フレアーを中空にバラ撒きながら上昇に移った。

同時刻地上―東地区森林地帯。〈第1観測地点〉

「命中、修正の要無し」

双眼鏡を構えた穂苅二曹が数キロ先、立木の間より立ち上る白煙を捉え、相棒の磯部にその旨を伝えた。

特殊作戦群第1哨戒挺身隊伊賀班は、上空の航空部隊への目標指示を再開した。

「流星17、そこだ。敵は煙を中心に300メートルの範囲に分散している。伊賀は煙より南へ1キロにいる」

彼らは狙撃ポイントから移動し、北中国軍の支配地域に潜り込み、調べ揚げたトンネル所在地点へ攻撃機の誘導に当たっていた。

『了解だ伊賀。狼煙の周り300メートル全部だな。これより攻撃隊に連絡する、待機していてくれ。流星17終わり』

磯部が無線で指示した目標は、北中国軍が第3遁道と呼ぶ、現在最大規模の脱出トンネルだ。

どういう訳か北中国軍はこの期に及んでトンネルを2つ閉鎖し、兵力を集結させる愚を犯していた。

これでは、地上からの反撃に追い付かれるのは目に見えている。

敵も、いよいよ行き詰まったか…。

潜伏する男達の頭上を、2機の戦闘機が轟音を響かせ航過^{パス}していった。

2機編隊のF-2Cが、縦一列で白煙に向け突入していき、煙を飛

び越えた瞬間、爆弾を投下すること無く機首を引き起こし、フレアーを射出しながら飛び去っていく。

『流星17より伊賀、どうだ?』

誤爆を防ぐドライラン（爆撃予行演習）で戦闘機が、目標を見定めたと判断した磯部が無線に叫ぶ。

「ドンピシャだ流星17。焼き払え!」

同時刻―上空。

『雷電フライト、攻撃を許可する。Mk82に続いてナパーム、CBUの順で投下せよ』

「雷電01了解、突入する」

FACとの最後のブリーフィングを終え、赤松はスロットルをミリタリー推力に叩き込んだ。

『雷電02了解、ハイヨー!』

レシーバーから響く、ウィングマンの坂井康春一等空尉の奇声に苦笑しつつ、機体を捻り込ませ爆撃航過に入る。

僚機の坂井一尉は赤松と同じ他機種からの転換組で、退役したF-4EJ改のフロント上がり。坂井は支援戦闘機よりも要撃戦闘機氣質の男で、直ぐドッグファイトをやりたがる。地上射爆の成績は並

みだったが、ACM（空中戦闘訓練）では常に敵無しで、国端新島
事変ではFS飛行隊唯一の5機撃墜のエース称号保持者だった。
やんちゃな性格が災いし、同期入隊の赤松より昇進が遅れているが、
本人は全く気にしていない。

一昨年結婚し、子供ができた事もあって若干落ち着いてはきたが、
空に上がれば相変わらず。

赤松とは正反対な性格にも関わらず、何故か公私共に息が合い、長
年タッグを組んでいる。

今日も後ろを気にせずに済みそうだった。

赤松は対空砲火に備え、先程とは反対方向より突入した。樹海がキ
ャノピー全面に迫り、HUDの片隅で自機の高度計とGPSナビゲ
ーションシステムが測定不能の表示が出る。O-4からのデータ転
送で心配は無いが、それでも油断はできない。

「高度5000で投下する。ここまできて墜とされるなよ！」

『合点！』

高度10000フィート。投下まで20秒。

レーダー警報装置がかなり立てた。センサーが敵携帯SAMのIF
F（敵味方識別装置）アンテナから識別信号を受信したらしい。赤
松は構わず機を降下させ続けた。

高度8300フィート。投下まで15秒。

レーダー警報装置が新たな悲鳴をあげる。IEWS（統合電子戦シ
ステム）が地上より最低3ヶ所より電波照射を受けてる事を察知し、
機体下部のECMポッドが自動起動、高度8700フィートで警報
装置は沈黙。

対地速度450ノット。降下角度60°。投下まで10秒。

『セブンオフロック、SAM!』

僚機の警告と同時に、コクピットにミサイル警報が鳴り響く。レーダーディスプレイに2発の携帯SAMが表示され、左後方より追尾してくる。

「フレアーアウト! バラ撒け!」

IRジャマーポッドから無数の光弾が打ち出され、偽りの排気熱のカートンで2機の戦闘機を覆い隠す。

1発はフレアーに喰らいつき爆発。残りは目標を見失い、燃料を使い切って樹海に消えていった。

高度6200フィート。投下まで7秒。

地上から最後の抵抗が始まった。マーカーを中心に、大小様々な曳光弾が撃ち上げられてきた。しかし弾幕は薄く、機体を夾叉する弾道は皆無。

赤松はサイドスティックの兵装発射ボタンに指を乗せた。

高度5100フィート。対地速度445ノット。降下角度0。赤松はHUD全体に白煙を捉え、最後の横風補正を終えた。完璧な爆撃を確信し「ピックルス(投下)」をコールする、筈だった。投下まで2秒、突然FACがUHF無線帯で叫ぶ。

『雷電フライト、アボート! アボート!』

今さらかよ!?

赤松は怒り心頭でマーカーを飛び越すと、一気に機首を上げ、森か

ら離脱した。

『雷電02ダイブアウト!』

同じく怒りが納まらない坂井が、アフターバーナーの衝撃波を地上に叩き込みながら上昇してきた。

高度20000フィート。

FACと合流する前に怒りを封じ込めた赤松は、未だブツブツ言っている坂井をなだめ、お互いの機体をロールさせて見せ合い、2機とも損傷が無い事を確認した。

程なく上方から迷彩塗装のO-4が、ゆっくりと降りてきて編隊に加わった。

『流星17、リード』

赤松は疑問をぶつけようと回線を開きかけたが、止めた。

隣を飛ぶ坂井が、コクピット内でノーマックスのグローブを外し、腕の関節を鳴らしながら息巻いている。

やれやれ…。

「待て、俺が話す」

肩を竦めて天を仰げば、何処までも続く蒼久に、巨大な円錐形の積み雲が鎮座していた。

数分後、彼は今までの戦いが前哨戦に過ぎなかったことを思い知る。

2020年8月3日午前10時35分。第2時国端新島事変はこの時既に始まっていた。

午前10時35分? (後書き)

参考文献

マークベレント著「ファントムリーダー」「ローリンググサンダー」

Jトロツティ著「ベトナム空戦史」

午前10時35分？（前書き）

我輩、もしかして何かの【二番煎じ】だと思われてる？

午前10時35分？

東地区森林地帯。第3遁道付近。

「た、助かったのかナ？」

防空砲兵李上等兵は宙吊りのまま呟いた。

空襲警報が発令されると同時に、李は携帯SAMを持たされ戦闘部署に付かされた。

しかし配置に付いた途端、背後の立ち木にロケット弾が撃ち込まれた。

李は仰天のあまり危うく木から落ちそうになったが、ただの発煙弾だったのでホッと胸を撫で下ろしていた矢先、今度は強撃機（攻撃機）が自分目掛けて猛然と突っ込んで来た。

自分が目標の傍にいるのだと分かり、慌てふためくが木の上では逃げ場がない。李は真正面から敵機と対決する羽目になった。

ところが前衛3（QW-3）を構え、電源を起動させるがどうにもこうにも調子が悪い。レーザー誘導装置が霧の中を狙っているかのように乱反射して目標を捉えられないのだ。

眼前に迫る日本軍の攻撃機を前に、今度こそ死ぬと思ったが、強撃機は爆弾を投下すること無く飛び去っていった。

李は強撃機が地上に叩きつけていった衝撃波で木から振り落とされ、今は命綱で逆さまにぶら下がっている。

木から放り出される瞬間、枝がクッションになってくれた気がするが偶然だろう。命綱を繋いだ枝が勝手に下がり、ゆっくり地面に近づいてきてるが気にしない。

一応、お礼だけは言っておこうかな…。

自分の足元、天地が逆転した視界で、高空の奇妙な積雲が四方に広がり出したのが見えた。それも急激に、色も白からどす黒く変わりながら。

李は既に諦めてはいいた事だが、今度こそ留学の夢が完全に潰えた気がしてならなかった。

中央地区平野部。国端富士より3キロ地点。

BBC NEWSカメラマン、アンドレ・ビンセントの意識を呼び覚ましたのは、鳴り続けるクラクションの悲鳴だった。

目を開けると立ち上る黒煙越しに、眩しい陽光と澄み渡る青空が広がる。

どうやら自分は仰向けに倒れているらしい。それにしても暑い。まるで直火に炙られているようだ。

「おい、しっかりしろ！」

視界の上、前後逆さまにバグマンの顔が現れた。

酷く煤けて傷だらけだ。

視界が反転し、バグマンに上半身を引き起こされた。直ぐ傍で、乗っていた日本版ランドローバーが、クラクションをがなり立てながら焔を噴き上げていた。

やけに熱いと感じたのはそのせいかな。

バグマンに数メートル引き摺られたところでマークスが加勢に加わった。彼も負けずと酷いなりだった。

アンドレは窪地まで運ばれ、そこでやっと解放された。窪地は以前爆撃か砲撃で開けられたクレーターのようだった。

「車列目掛けて爆撃しやがった！」

「俺も見た、だが飛行機じゃない。小さすぎる、あればミサイルだ」

アンドレは腕時計を見ると、頭の中で時系列を組み立て始めた。

現在は日本時間で午前10時35分。

サポートエリアで気の進まない昼食を摂ったのが1時間前。

胸焼けで結局もどしたのが50分前。

ハラヌマ中尉の前線での最後の注意事項を聞いたのが40分前。

ランドローバーに乗り込んだのがその後5分後。

護衛の装甲車を引き連れ、サポートエリアを出発したのが30分前。

そして車列が攻撃されたのが3分前。

あちこち火傷だらけだったが、とにかく仲間も自分が無事なのは分かった。

首から下げたハンディカメラの電源を入れ、レンズを覗き込む。

レンズにはヒビも無く、自分の顔にオートフォーカスが反応しテレプラスが自動で回のを見て安心した。

レンズに赤い飛沫が滴り落ちた。反射的に首に巻いたバンダナで拭

こうとするが、飛沫は次から次へと量を増して落ちてくる。

遂にバンダナが血を限界まで吸収してしまったので、面倒だがレンズクリーナーをしようとした。

しかしメンテナンス・グッズを納めたカメラバックが見当たらない。やむなく、その辺に生えている葉っぱで拭こうかと適当な草をムシッていると、マークスが額に手を伸ばしてきた。

「目の上が切れている」

「目は無事？」

「ああ」

彼の傷が意外と深いと見たバーグマンが、負傷者の手当てに駆けずり回る衛生兵の1人を捕まえた。

バーグマンがロイヤルイングリッシュ訛りの日本語でアンドレの手当を頼むと、以外にも流暢な英語で返事が返ってきた。

衛生兵はアンドレの傷を診察するなり手早く処置を始めた。傷口に止血剤を振りかけガーゼを押し当ててる。

「これで傷を押さえて。それ以外は大丈夫です。サー」

アンドレは衛生兵からガーゼを少し分けてもらい、それでレンズを拭いた。

今はこれ位しかできない。

アンドレはハンディカメラを構えると撮影を始めた。

消火器を持った日本兵が走り回って絶望的な消火活動が続いているが、火勢が衰える気配はない。

数えただけで4台の車輛が焰を噴き上げ、3台が横転していた。

アンドレは違和感を感じた。

惨状からしてナパーム弾と通常爆弾のコンビネーションらしいが、爆弾は空中で炸裂したのか、地面には爆弾痕がなく、周りを焼き尽くすゲル状の炎からは、ナパーム特有のガソリン臭がしない。

時折、炎上する車輛から銃声のような鋭い破裂音がしてくる。音がする方へ足を向けかけ、バグマンに腕を捕まれた。

「燃えてる車に近付くな。弾薬に引火してる！」

警護担当の注意を意に介さず録り続けていると、更に説得にマークスが加わった。

「おい、兄貴の二の舞は御免だぞ！」

アンドレの兄、ポールはハカタ大暴動鎮圧作戦を取材中、流れ弾に頭を撃たれて死んだ。

彼の人生最期の映像は、アスファルトに投げ出されたカメラが偶然捉えた、半狂乱のマークスに引き摺られていく自分の姿だった。

渋々引き下がり、別な被写体を求めて周囲を見回した。

あちこちで日本語の叫び声が交差し、負傷者の悲鳴が上がっていた。地面に散らばる手足や遺体の一部を避け、横転した重装甲機動車に近付く。

確かこれには共同通信社のカメラマン、カシザキが乗っていた筈だ。彼とはイラク戦争で知り合い、以来友人付き合いだった。

上部ハッチから中を伺うが中は無人だ。

まさか車の下じゃないかと車体の下を覗き込んだが誰もいなかった。

少し離れた窪地に救護所兼遺体集積場所が設けられていたのでカシザキの姿を探してみた。

カシザキはいなかった。

と言うより見つけれない。

遺体は皆損傷が酷く、人種はおろか性別すら分らない。

「おい、攻撃を止めるようにちゃんと伝えたのか!？」

幸運にも軽傷で難を逃れたCNNの記者が、凄まじい剣幕で右往左往する日本兵に怒鳴り散らしていた。

彼の足元ではドイツ人記者とアルジャジーラのテレビクルーが放心したように座り込み、片足を失ったマレーシアTVの記者がこの世と思えぬ叫び声を上げていた。

そして生存者達は一様に2度目の攻撃を恐れていた。

無事だったハラヌマ中尉が必死に落ち着くよう制止しているが、上空からジェット機の爆音が聞こえる度に悲鳴が上がり、動ける者は逃げ惑っている。

正に混乱の極みだった。

1台の装甲車の屋根に日本兵が日章旗を広げ、その回りで兵士達が空に向かって必死に手を振っていた。

護衛部隊の通信士が、無線機に何事か叫び続けている。日本語は分からないが大体内容は想像はつく。

それを見たハラヌマ中尉が、突然物も言わず通信士の元へ駆け出した。

その切羽詰まった様子に何か予感めいた物を感じたアンドレだったが、プロデューサーのサム・ドノバンが衛星電話を片手に駆けつけてきたので追うのを止めた。

ドノバンは肝心なときに姿を見せないと現場スタッフとマークスカ

らの評判だったが、流石に今回は例外であるようだ。

「事態をロンドンに知らせたぞ、リポートするのか？」

「当然だ、今この事実を世界に配信できるのは俺達だけだ」

マークスは衛星電話を受けとると、受話器の向こうのスタジオと電話リポートの打合せを始めた。

『だから該当機はないと言っているだろう』

「ふざけるな！さっきから飛んでるのは味方だけだ！俺達を撃ったのは何処の馬鹿だ！？」

護衛隊の前線統制官、島崎卓三等陸曹は緊急周波帯でFAC（航空前線統制官）機を呼び出して怒鳴り付けていた。

彼は完全に頭に血が昇っていた。

事前に制空権確保と、友軍機が上空で游弋待機中との情報を受けていただけに、的を得ない空からの説明に冷静さを保てなかった。対照的に落ち着いたFACの声に比例し島崎のボルテージは上がっていく。

『全飛行隊に照会中でAEWACSからの返答待ちだ。済まないが、今はこれ以上の情報はない』

「貴様…！？」

島崎が続きを言いかけて、誰かに送話機を取り上げられた。

「落ち着け！これは空襲だ、誤爆じゃないぞ！」

広報幹部原沼晃二尉は荒ぶる通信陸曹を叱り飛ばした。

「通信代わった、広報本部二尉、原沼晃。敵機は小型機編隊。北西から超低空で車列中央を攻撃した後、南南西へ離脱した。送レ」

本来、交信には身元照会が必要なのだがFACは応じてくれた。

『アズチ01（護衛隊の呼び出し符号）、続けろ。間違いないか？』

「機種は不明、見たこともない機体だった。グライダー並みの大きさで高度約30～40メートルで音も無く迫ってきた。送レ」

『アズチ01、待機しろ』

島崎三曹の非難じみた視線に耐えながら待つこと20秒。

『アズチ01、AEWACSがロックダウン・レーダーでそこより南東へ15キロ付近を移動する〈車輛3台〉を確認した』

「数は3、弓矢型編隊で速度は時速90～100キロ。違うか？」

『アズチ01、その通りだ。最寄のCAP（空中戦闘哨戒機）を向かわせる。流星17終わり』

「何で車なんですか？」

すっかり冷静さを取り戻した島崎三曹に原沼は送話機を返しなが

答えた。

「スピードと高度が低過ぎて警戒管制機のコンピューターは自動車だと判断したんだ」

原沼は呆気にとられる島崎を残し、必死に空へ手を振り続ける隊員達に配置に戻るよう怒鳴った。

間もなく、遅まきながら対空戦闘準備が発令され、装甲車が炎上する車輛を中心に円陣を組みはじめた。

各車輛の50口径機関銃が空へ向けられ、部隊は恐慌状態の牧羊から軍隊としての姿を取り戻した。

原沼は救護所へ戻ると無事だった取材チームの人数の少なさに愕然とした。

判っているだけで60人いた取材班のうち、約半数以上が死亡、負傷者も手遅れの状態だった。

とにかく無事なメディアを纏め、前方支援地域に戻らなくてはならない。

視線の先で、燃える高機動車の傍を衛星電話を片手に歩く男が目にと留まった。

イギリスのメディアクルーだと直ぐに分かった。食堂天幕で日本軍のセンスは最悪だと文句を言っていた奴だ。どうやら電話リポートをやっているらしい。

原沼は駆け寄って制止しようとしたが、通話内容を聞いて戦慄した。

こいつ、何を言っている!??

国端新島海岸区。15DP C (第15師団司令部)

「一体こいつは何を言っている!？」

第15師団長、田中竜也陸将以下本部幕僚達は大天幕で戦慄した。メディア・クルーの車列が空襲されたとの一報で大騒ぎの真っ最中に、市ヶ谷から直通回線で陸上幕僚長から「とにかくテレビを見ろ」と叫ばれた。

この忙しいのにと、渋々テレビのスイッチを入れて（情報収集用の一環として、NHK、民放等を受信している）みれば全てのチャンネルが異口同音のテロップと、英語の電話リポートを流し続けた。

『・・・取材チームは私を含め数人が軽傷を負いましたが、皆無事です。しかし他のメディアの取材陣は多数が犠牲になりました。周りには燃えた遺体と車の残骸が散らばり、悲惨な状況です。この【誤爆】により日本軍にも多くの死傷者がでたと思われます』

後々の戦いにおける、悲劇の布石が撒かれた瞬間だった。

なかなか【本編】に踏み切れないデス…（泣）

午前10時35分? (前書き)

兵器年鑑は、新規編集の為に暫くお休みします。

午前10時35分？

国端新島南西沖30キロ。東シナ海上空。

誤爆該当機の確認の為、CAP（戦闘空中哨戒機）を除く作戦機は同空域に集合中。

『富嶽27より雷電フライト、スクランブルオーダー。ベクター01―2、2000エンジェル』

AEWACSからの急報。

情報共有システムで全武装未使用が確認され【白】と判定された矢先、赤松三佐は事情が飲み込めなかった。

「富嶽27、CAPはどうした？」

『CAPはグループ1が燃料切れでRTB（帰投）。グループ2は別目標のインターセプトに向かった。交代機も管制トラブルで発進が遅れている』

「FS（支援戦闘機）は？」

『FS飛行隊は飛行停止命令で全機地上にある。今アンノウンに対処できるのは君達だけだ』

「雷電01ウィルコ！01より02、ライトターン！」

赤松は、列機の坂井と共に2機同時の急旋回、スプリットバンクで編隊をから離脱した。

途中海上で主翼両端のAAM-3（赤外線誘導対空ミサイル）以外の爆装を棄て、3分後には接触予想空域に差し掛かった。

AEWACSの誘導に従い、レーダーを探索モードで地表付近を走査するが、レーダーレンジには何も映らない。

AEWACSによれば目標は超低空でNOE（匍匐飛行）しているとの事だが、元々電波反射率が極端に低い機体な上、地上からの反射もあり追跡に難儀しているらしい。

敵機を捕捉できず、空域を旋回すること2回。3航過目に入ろうとした時、突然坂井が機体をロールさせ背面飛行を始めた。

『タリホー！ボギーズ11オフロック・ロー！』

赤松は相棒の並外れた視力に驚きつつも、探査用電子ビームを左斜め前下方へ向け絞り込む。

レーダースコープに四角型：不明機のシンボルマークが浮かんだ。こちらに尻を向けるかたちで3機、高度1000～1500フィートをアルカディア中央地区から海上へ抜けるコースで飛行中。IFF（敵味方識別装置）に応答無し。捕まえた！

『富嶽27より雷電フライト。攻撃を許可する』

「雷電フライト了解。02、エンゲージ！」

マスターアーム・オン。レーダーレンジを空対空モードにシフト、2機のF2Cは猛然と不明機に襲いかかった。

高度1000フィート、大気速度480。経路120。使用兵装にフォックス2、AAM-3を選択するがIRシーカーが目標の排気熱を捉えられない。使用武器変更、HUDをガン・モードに切り替える。

高度800フィート、大気速度変わらず。目標を目視で確認。全長5メートルあるかなしで全体的に黒。一部迷彩のように白と灰色のストライプが入っている。形状は限り無く鳥に近い。こんな機体は見たことがなかった。

機関砲の射程内に突入、安全装置解除。ガンカメラ作動。

高度600フィート、大気速度400。射撃まで5秒。

目標が増速し回避機動を開始。見掛けに反して速い、3機が一斉にバーチカルズーム（垂直上昇）かけ、赤松達の鼻先をすり抜けていく。お陰で敵機を間近で見ることができた。

赤松はその機動性より敵機の正体に驚愕した。

明らかに航空機ではない。全長5〜6メートルの翼を生やした爬虫類。しかも馬にでも乗るかのように手綱を引いて人が跨がっている。それは彼が少年の頃、映画やテレビゲームで見たモノにそっくりだったが、常識が邪魔して存在を認める事ができない。

「02リードしろ、俺は疲れているらしい」

しかし坂井は現実として受け止めていた。

『02より01、あんたは狂っちゃいない！【ドラゴン】に逃げられるぜ！』

坂井の叫びで頭のスイッチが切り替わった。

あれが何であれ、地上部隊を焼き払った敵には違いない。やはり頼れる相棒だ。

「追うぞ。ライトターン！」

『合点承知!』

敵機は…もといドラゴンは時速800キロまで加速し、一気に高度3000フィートまで上昇していった。

性能的に第2次大戦中の傑作戦闘機・P51ムスタング並みといったところか？

しかし、パイロット…いやクラダーは大丈夫なのか？

一瞬ではあったが鞍など騎乗用の補助具は見えたが、耐Gスーツや酸素マスクの類いを装備しているようには見えなかった。

高度7000フィート。

火器管制装置がドラゴンの排気熱を捕捉した。鳥は飛翔運動で発生する体内の熱を、翼の羽毛より放出していると言うが、ドラゴンも例外ではないらしい。

急激な回避運動で体内熱が発生したのか、IRセンサーが両翼よりロックオン可能レベルの【排気熱】を探知した。

それでもレシプロ機程度で、旧式のL-9ミサイルだったら追尾できそうもなかった。

赤松はコンピューターに排気熱パターンをデータ登録、AEWACSヘデータ転送した。

進路上に奇妙な雲が見えてきた。

真っ白い円錐状の積雲で中空に静止している。

その雲を中心に急激に天候が悪化し始めている。

雲の中に逃げ込まれると厄介だ。

速度差によるオーバーシュートを防ぐ為スロットルを抑えて追跡していた赤松は、一気に勝負に出た。

アフターバーナーに点火し一気に距離を詰める。

赤松はAAM-3を先頭の【1番機】に、坂井は右翼【2番機】にロックオン。

赤外線シーカーから力強いオーラルトーンが響く。

フォックス2をコール寸前。編隊がぱつと4方に散った。

3騎のドラゴンはそのまま天空に向け背面宙返り、アクロバット技で上向き空中開花を演じ、今度は編隊を縦列から横列に変化させ、見事な逆三角形でF-2Cに反航戦を挑んでくる。

旋回半径の小ささに驚く一方、チームワークの良さに感心した。

しかしAAM-3・90式空対空ミサイルは前方射撃が可能だ、逃げられはしない！

『ザ・インメルマン？』

坂井の疑問符がレシーバーから聞こえた。

ザ・インメルマンは追跡機を振り切るか、攻撃高度を稼ぐ場合に急上昇し、上昇頂点から反転降下または水平飛行に移る空戦技術だ。

…攻撃高度！？

次の瞬間、コクピット内でレーダー警戒装置ががり立て始めた。
ヘッドアップディスプレイ
HUDに脅威情報呼び出す。

統合電子戦システムは12時方向から未知の周波数によるパルス電波の照射を受けていると表示していた。

赤松は目前に迫るドラゴンが、生物ではなく戦闘機に見え出した。パイロットの本能でロックオンを解除し操縦桿を引き起こした。

「ブレーク！」

坂井も同じ事を考えていたらしい。

しかし反応が一瞬遅れた。

ドラゴンが3騎同時に顎を開き、逆三角形の中心にいる支援戦闘機目掛け、焰を放射した。

焰は火球となり、雷電フライトの40メートル前方で炸裂した。

赤松の機体は衝撃波で切り揉みに陥ったが、冷静にスロットを絞り、フラップを開放して姿勢を回復した。

息つく間も無く僚機を探す、しかしキャノピーには自機を弾き飛ばした黒煙しか見えない。

「雷電01より02、どこだ!？」

応答がない、あいつキル（撃墜）されたか!？

赤松の脳裏に例えようの無い焦燥感が走った。

『…生き…るぜ』

雑音混じりに聞き覚えのある声と同時に左側同高度に僚機が現れた。機首のリーダードームから機体上部のエアブレーキパネルにかけて酷く焼け焦げている。

キャノピーも前面に亀裂が入り白濁している様に赤松は慌てたが、コクピットで手を振る坂井の姿に胸を撫で下ろした。

「02無事か!？」

被害を整理する為、少し間を置いてから応答がきた。

『インテイクから焰を吸い込んだらしい。テイルパイプの温度が上昇している。さっきからマスターアラームが鳴り止まない』

そこへ今まで沈黙していたAEWACSが通信に割り込んできた。

『富嶽27より雷電02、緊急事態を宣言するか?』

『富嶽27、ネガティブ。飛ぶ分には問題はない。しかしレーダーを含む航法システムがアウト。誘導を頼む』

『富嶽27ウィルコ。雷電02は直ちにRTB。那覇ベースに緊急車輛を待機させる』

再びレーダー警報。

今度は後方直下。

『警告! 雷電フライト、チェックシックス・ロー!』

AEWACSからの急報に機体を180度ロール。上下逆転の世界で、ドラゴン…いや【敵騎】のトライアングル・スプリットが高度3000フィートから迫っていた。

OK、上等だ…。

赤松は背面からそのまま急降下に移った。

「雷電01はインターセプトに向かう!」

坂井とAEWACSが何事か喚いていたが、構わずマスターアームを立ち上げ、ACM（空中戦機動）に入った。

【敵騎】はトライアングルの中に再びF-2Cを捕らえようと機動

修正を試みるが、赤松はCCV特有の水平旋回で包囲をかわした。急降下を速度に変換し、今度は垂直上昇に移る。

上空ではトライアングル編隊が、再度インメルマンターンで切り返してきたが、赤松はアフターバーナーを焚き、編隊が旋回しきる前に距離を詰めた。

一気に音速を突破して追いつく敵に動揺したのか、【敵騎】の旋回半径が大きくなる。

赤松は再び逆三角形の頂点、【1番騎】にロックオン。

「雷電01フォックス2!」

翼端に装備した赤外線誘導ミサイル・AAM-3が勢い良くレールを飛び出し、【1番騎】に迫っていった。

【1番騎】はAAM-3に気付くと、航空機には不可能な旋回半径で螺旋状の旋回、バレルロールでミサイルをやり過ぎた。

予想通り近接信管が作動しなかったことに落胆したが、AAM-3は優れた運動性をもって、今度は上方から再び目標を追尾しはじめた。ミサイルを振り切れないと見た【1番騎】は、翼を一気に広げ、エブレイキの要領で空中に静止、そして正面に向け火球を扇状に立て続けに3発。自らは背面で垂直降下に移る。

AAM-3は火球の余りの高熱に、欺瞞対策を施した検知センサーがエラーを起こし、火球の一つを追尾していき自爆した。

どう見ても、最新アビオニクスと縁がなさそうな輩が、対ミサイル防御をやったのけた事に戦慄したが、まだ勝負はついていない。

【1番騎】より更に1000フィートほど高度を稼ぎ、速度が0になるとラダーを鋭く切って垂直降下に入った。

バーチカル・リバース：失速旋回の現代版である。

運動エネルギーを使い果たし、加速が間に合わない【1番騎】へ2

0ミリ機関砲を叩き込んだ。

右翼、胴体、クラダーと赤い肉片を撒き散らしながら、最後は体内に火球の燃料を蓄えていたのか、被弾孔から紅蓮の炎を吹き出し爆散した。

【1番騎】を失い【2騎】となった編隊は即座に反転、脇目も振らず遁走し始めた。

【2騎】とも例の積雲に向かって行く。

『雷電01、深追いするな。貴機の前方の雲は積乱雲の可能性あり。気象レーダーでの探査ができない。注意せよ』

AEWACSからの助言。

しかし、ここで大人しく還す程赤松は甘くない。

地上部隊と誤爆疑惑の汚名の落とし前はキッチリつけてもらう。

赤松はレーダーとIRST（赤外線探査装置）の出力を全開にし、雲の中へ愛機を突入させた。

午前10時35分？（後書き）

現政権での有事勃発は、即我国の破滅を意味する気がしてならぬのは、我輩だけか？

午前10時35分? (前書き)

作者が銃撃戦に夢中で展開が絶賛遅延中デス。

根気よくお付き合いくださいませ。

午前10時35分？

中央地区上空。F-2Cコクピット内（コールサイン雷電01）。

赤松三佐は珍しく狼狽した。

雲に突入した瞬間、想定外の事が起きた。

HUDが滅茶苦茶な情報を表示し始めたのだ。

自機の傾斜角度を示す水平バーがぐるぐる回転し、高度と速度を表示するパラメーターが測定不能のエラーメッセージを灯している。

リーダーはホワイトアウト。追尾していた【2騎】は完全にロストした。

さて困った。この情報が事実であれば、目下機は錐揉みで状態で墜落中と言う事になる。

しかしエンジンは正常、Gも一定、少なくとも今は普通に飛んでいる。

人の感覚などGの前では容易く狂わされる。

勘より計器を信じる――

航空学生時代、散々教官から叩き込まれた事だが、これでは勝負にならない。

視界は0。自機の状況を確認する術はない。

一か八か感覚を信じて上昇してみるか？

突然雲海が開けた。

同時に全システムが回復し、赤松は小さく息をついた。

降下率15度、やや右翼に傾斜。高度5000フィートで大気速度

750ノット：衝突警報！

弾かれたように視線を上げ、思わず絶叫した。

彼の目前には、高空の蒼穹ではなく青々と繁る【大地】が迫っていたのである。

同時刻。東地区・気象観測所。

エントランスを包む白壁を切り裂き、大柄な北中国兵が金突士長に襲いかかった。

北中国兵が繰り出すナイフを咄嗟にミニミで受け止めた金突だった
が、北中国兵はナイロン製の弾薬箱にナイフを突き立たまま、彼を
を当て身で弾き飛ばした。

金突はほぼ水平に床を跳び、背後の大野を巻き込んで壁に叩きつけ
られた。

支援班のリーダー、大柴三曹は宙を舞う長身の機関銃手と堅太りの
狙撃手に驚き、慌てて小銃を構えるが一瞬早く北中国兵のマシンピ
ストルが火を噴いた。

右膝と左肩を小口径高速弾に撃ち抜かれ、その場に崩れ落ちた。

次に隣で片膝をついていた通信手の青木忠雄士長が鉄帽を撃ち抜かれ
れ昏倒する。

階段から上半身だけだして89式を構えていた島田大地1士が、小
銃の被筒部：ハンドガードを左手ごと撃ち抜かれ、悲鳴を上げなが
ら階下に転げ落ちていった。

一気に5人を無力化した北中国兵は、弾が尽きたマシンピストルを
投げ捨てると、次に目を回す金突に下敷きにされ、必死に退かそう
とする大野に狙いを定めた。

大野は自分の小銃の負紐、タクティカルスリングと金突のミニミが絡まり、身動きが取れずにいた。

気を失った相棒の体に装具が引っ掛かり、拳銃も抜けない。

北中国兵がナイフを逆手に持ち変えた。

それを見た大野は落ちていた角材を投げ付けたが、軽く手刀で真つ二つにされた。

空気を切り裂き、北中国兵の背後から銃剣が突き出された。

間一髪、後頭部を狙う刃先を避けたが、今度は顎に弾倉が叩きつけられた。

流石にのけ反る巨漢。

小隊陸曹、谷本1曹は小銃をタクトバトンかの如く切り廻し、斬撃と刺突の連続技を繰り返した。

体勢不利と見た北中国兵は、長突き：右足踏み込みで胸部を狙う、をナイフで叩き弾くと、膝のバネで常人には不可能な勢いで一気に間合いを開けた。

銃剣道七段の谷本をもってしても流石に追従できず、間合いに入り込まれるのを防ぐため、剣先を相手の喉元に突き付ける構え銃の体勢に戻った。

北中国兵は敵が、ベテラン（老兵）だったのに軽く驚いているようだった。

谷本も驚いていた。コイツ片目だ。

汚れた包帯から覗く右目が薄く見開かれる。

殺気を読み取った谷本が姿勢を数センチ落とした。

北中国兵の右足が鞭のようになり、89式の銃身を蹴り飛ばそう

とする。

谷本は筒先をヒョイと上げそれを避ける。

しかし北中国兵は繰り出した豪脚を折り畳み、小銃の負紐を踵で引っ掛け床に叩き落とした。

引っ張られ思わず前のめりにたたらを踏む谷本。

しまった！

北中国兵はナイフを本手に構え、一挙動で谷本に迫る。

ターン！

軽い銃声、北中国兵の側頭部に何かが弾けた。

床に転がる弾丸が、40ミリ擲弾だと直ぐに気づいた。近すぎて信管が作動しなかったのだ。

北中国兵は致命傷ではないがかなりの衝撃だったらしい、ナイフを持ったまま後ずさると憤怒の形相で銃声元を睨む。

視線の先、壁際にグレネードランチャーを構える山岡がいた。

「伏せて！！」

グレネードランチャーの照準器を折り畳むなり、89式の握把を持ち換え、谷本が射線から転がり逃げると同時に引き金を引いた。

北中国兵は弾かれたように姿勢を4分の3下げ、頭を狙った弾丸を避けると、弾かれたように巨体に似合わぬスピードでエントランスを駆け抜けた。

必死に撃ち追いつける山岡。

北中国兵は山岡が味方への誤射を恐れて撃つのを躊躇うのを期待してか、ワザと大野や大柴を射線に入るよう逃げていたが、入隊1年

そこそこのキャリアしかない山岡に、そんな余裕は全く無かった。

エントランスじゅうに跳弾が飛び交い、北中国兵と山岡以外、皆頭を抱えて床に突っ伏していた。

「止めろ山岡！俺達を殺す気か！？」

大野が相棒を防弾ブランケット代わりににして叫ぶ。北中国兵は弾切れを狙っていたが、山岡が見事なスピードリロードを決めたのを見て、撤退を決意した。

弾倉交換の僅かな間隙を突いて、元来た北棟連絡通路に走る。

遂に大野が金突の下から脱出した。仰向けのまま白幕に消えるデジタル迷彩の背中へ拳銃を連射する。

小銃を回収した谷本が伏撃ちで加わった。

3人とも弾倉が空になるまで撃ち続け、最後に谷本が擲弾手に拳骨を見舞って止んだ。

「谷本一曹、本管（本部管理小隊）より撤収命令です」

大柴三曹が無事な左手で青木の背中から無線機を外しながら伝えた。

「斥候班は？」

「別班が救出したそうです」

谷本が大柴の腕の中で横たわる青木士長の容態を確かめようとしたが、それを大柴が静かに押し留めた。

「死んでいます」

青木は無類の車好きで、愛車のGTRでアマチュアレースに何度も出場した経験を持っていた。

中隊のマイカー相談役である彼は「実は新車の納期が今日なんです」と昨日嬉しそうに皆に話していた。

下で島田一士が「撃たれた！死ぬ！」と大騒ぎしていた。

実のところ島田は撃たれた3人の中で一番軽傷だった。

マシンピストルの種類が拳銃弾を使う物ではなく、専用の小口径高速弾だったのが幸いで、手の平に五ミリ弱の孔が開いただけだった。最後は手当てしていた猪野衛生二曹に「黙れ！」と一喝され静かになった。

腕と足を撃たれた大柴は、後続の支援班に青木の遺体と共に担がれいった。

やっと金突が復活した。

しかし頭がまだハッキリしないらしく、うわ言がてらに大野に絡んでいた。

「お前、俺を盾にしたろ？」

「そんな事する訳無いだろ相棒。山岡ナイスリロード、ちゃんと教えた通りやったな」

しれっと誤魔化す大野。

金突はブツブツ文句を言いながらも機関銃の点検を始めた。

谷本はその様子に苦笑しながらも安心した。相変わらずな奴等だ。

通路奥から連続した銃声。谷本が突っ立っている山岡を押し倒した直後、エントランスを爆風の嵐が襲った。

1階正面玄関前。

猪野衛生二曹は救急高機動車と正面玄関の間を往復して、負傷者の治療優先順位をつけて回っていた。

屋上からの銃撃も大分収まり、後は撤収を待つだけだ。

階上から凄まじい爆音。

思わず回りの隊員と一緒に首を竦めた。

何事かと階段を見上げると、谷本一曹を筆頭に火力支援チームの面々が粉塵まみれで転がり降りてきた。

「出ろ！出ろ！ここから今すぐ退去だ！」

珍しく慌てふためく小隊陸曹の姿に、ただ事でない事態を察知する。

「あの化け物、オートマチックグレネードランチャーを持って歩いてやがる！」

目を回している小柄な擲弾手を小脇に抱え、太目の狙撃手が悪態混じりに駆け抜けていった。

切迫した空気を感じ、猪野は直ちに決断した。

「資機材残地、総員直ちに乗車！」

玄関エントランスホールに残っていた隊員が一斉に走り出した。

全ての車輛は満車になり次第走り出していく。

猪野と谷本が他に隊員が残っていないか確認すると、最後の装輪装甲車に飛び乗った。

頭上で爆発音。

2階部分の窓を塞ぐバリケードを吹き飛ばし、さっきの大柄な北中国兵が現れた。

手には極太の鉄パイプを繋げたような銃……八七式35ミリ榴弾発射器を構えている。あれは本来三脚で地面に据えて撃つ武器の筈だ。

「ヤバイ、早く出せ！急げ！」

キューポラの車長が操縦士に叫ぶ。装輪装甲車は後部ランプが閉まり切らないまま急発進した。

北中国兵が何事か叫び、乱れ撃ちを始めた。

間一髪、車長がハッチを閉めるのと同時に車体上部に衝撃が走った。車内灯が弾け飛び、操縦席の防弾ガラスが四散した。右前輪に激しい衝撃、急に上下の振動が激しくなり谷本達は車内でホップコーンのように弾け飛んだ。

「第1前輪が飛ばされた！」

車長の絶叫と同時に重力が反転した。

全員一斉に車内左側に弾き飛ばされ、右側、天井、床の順番で叩き付けられていく。装甲車が横転しているのだ。

4回転位しただろうか？

やっと動きが止まった。

誰も彼も動こうとしない車内で、小柄な体躯が起き上がった。山岡だ。

横転の衝撃で意識を取り戻した山岡は、柔道で鍛えた受身でこの窮地を凌ぎ切ったのである。

後部ハッチが歪んで開かないので、上部ハッチに手を伸ばした。

ハッチを開けた瞬間、山岡は凍りついた。

装甲車は上部を観測所に向ける形で停まっていた。

2階には、止めを刺さんとロケットランチャーを構える北中国兵がいた。

「冗談でしょ…」

山岡の中でこれまでの19年間の人生が走馬灯のように駆け巡った。栄光と思い出と挫折。柔道、体育学校、出逢い、挫折、自衛隊…

空気を切り裂き、1発の砲弾が観測所に着弾した。

爆風は北中国兵を木っ端微塵に吹き飛ばし、正面玄関を崩落させた。

何が起こったか解らず呆然とする擲弾手の前を、3台の90式戦車改が漠進していった。

『飛車04、無事か!?!』

装甲車の車載無線機から中隊長の原田一尉の声が聞こえた。

た、助かった…。

戦車は1台が横転した装甲車を護る形で停車し、残る2台が先行してハルダウン…前屈姿勢で停車。

『霧島21よりカク、カク、戦闘照準、対掩体射撃。弾種多目的対戦車榴弾!』

無線から戦車の交信が聞こえてきた。

『霧島22は観測所北棟、23は東棟を射撃せよ』

3門の120ミリ滑腔砲が火を噴いた。

戦車の背後で砲声の衝撃をまともに受けた山岡は、全身の血液が沸騰したかのような錯覚に陥り、フラ付きながら装甲車の中に戻った。耳鳴りがやまない山岡に、戦車から通信。

『後ろのちっこいの、外いると危ねえぞ！』

撃ってから言うなよ！？

屋上から爆炎と共に人影が巻き上げられ、回転しながら落ちていく。途中で腕が1本、体から離れていった。

3発、4発、北棟が成型炸薬弾の威力で、綺麗に壁が吹き飛ばされ骨組みだけになっていく。

5発、6発、東棟は3階2階が崩落、1階部分から激しい火の手が上がっている。

7発、8発、管理棟が孔だらけになり、原型を崩し始めた。

9発、10発、管理棟が大爆発を起こした。弾薬集積所に命中したらしい。

凄まじい爆風が、装甲車の開け放ったハッチから入り込み、車内で吹き荒れた。

『撃ち方止め！』

砲撃が止んだ。

山岡は注意深く装甲車の外に出た。未だ耳鳴りがするが、幾分マシにまで回復した。

何も聞こえない。

騒々しい筈の戦車のディーゼル音でさえ、静かに感じる。今までの喧騒が嘘のようだ。

立ち込める硝煙と降り注ぐ土砂のカーテンが収まったとき、観測所は基礎部分を残し、跡形もなく消え去っていた。

沖縄県気象台国端新島出張所は、1度もその使命を果たすことなく、灰塵と帰したのである。

「終わった…」

脱力して座り込む山岡が、上官達の安否を確かめようと装甲車を振り返ると、急行してくる高機動車の懐かしい姿が目に見えた。

午前10時35分？（後書き）

現政権、早期に退く意思は無し。

讃美歌13番でも歌うか…。

― 閑話? ―

国端新島中央地区・県道66号線。国道3号線との交差路（第2交差路）より300メートル付近。

先行する護衛の普通科分隊から敵影無しとの連絡を受け、中央即応集団・増強施設中隊所属、小清水隼人三等陸曹は部下に作業開始を命じた。

この先300メートル先には国道3号線との交差路「暫定呼称・第2交差路」がある。

国端新島の道路網は3本の国道とそれから枝分かれする複数の県道からなる。

国道は総全長280キロの2車線舗装道路で、島外周を囲みそれぞれ南端、北端を頂点に東シナ海側が1号線、太平洋側が2号線、そして島中央を南北に伸びる国道3号線である。

そして未舗装の砂利道・県道が各国道から枝分かれし、各地を繋いでいる。

国道3号線は第15師団司令部がある海岸地区の国端西海岸道路と国道2号から分岐（海岸三叉路）し、国端富士を回り込み北側海岸線まで17キロの地点まで作られていた。

本来は1号線と合流させ、南北横断道路とする計画だったが、2013年の中国政府（当時）の干渉で工事がストップし、それ以来放置されたままだ。

小清水三曹の任務はこの先にある暫定呼称・第2交差路の地雷閉鎖である。

国端富士に立て籠る北中国軍部隊が、破れかぶれの司令部強襲を仕掛けてきた場合に備えた処置であった。

「班長の指す方向、北の方角。敵の方向この方向〈富士の台〉距離300」

2013年に「国端新島第1期整備計画」が中止されて以来、測量地図意外までもな地図が作られず、今日まで多くの地名が未決定のまま放置されていた。

その為「ほむら作戦」計画時に、国土交通省の無意味乾燥な数字表記と、「第〇〇高地」「△△の台」など、自衛隊中央地理隊が暫定的に標した戦略呼称が使われていた。

分かりやすい反面、まるで演習場である。

「埋設数、対戦車及び対人地雷各20個。その内各10個を活性化処置」

活性化とは、同じ箇所地雷を複数埋めたり地雷同士を信管で繋ぐなどして、敵の地雷処理を難しくすることだ。

「1番手、エンピ（スコップ）運搬。2番手、爆薬運搬。3番手、雷管と信管運搬」

命令一下、4人の部下が各々の持ち場に取りかかる。本来は敵方警戒に1名要るが、護衛がいるので今回は必要ない。

小清水は27歳の元サラリーマン。

東京で中国関連の大手ゼネコンに勤務していたが、中華内戦の煽りで倒産。

経済打撃で再就職に難儀していたが、妻子と家庭を守るため24歳

にして自衛隊に入隊した。

当時防衛省は中国との有事に備え、隊員の大幅増員を打ち出していたが、インドネシアPKFの影響で入隊希望者が激減、募集担当者は頭を抱えていた。

そこへ、小清水が履歴書片手に現れたのである。

大卒で測量資格を持ち、ある程度社会経験も積んでいる。担当者は狂喜乱舞し、陸曹候補士として採用された。

中国のせいで失業したが、同時に再就職もできた。皮肉な話だと彼は笑う。

「1番手、この位置に穴を掘れ。2番手、3番手は爆薬に信管を取り付け。4番手は1番手の支援」

1番手・中田肇陸士長がエンピで穴を円型に掘る。

彼は今月初めに20歳になったばかりの青年で、趣味はパソコン。

彼は中隊のパソコン指南役で、自作したパソコンを中隊事務室で電源を繋いだところ、全隊舎のブレーカーを叩き落とした伝説の持ち主である。

2番手・山田光照陸士長と3番手・三国寛二陸士長が信管をセットした地雷を穴に入れていく。

山田は19歳のバイクマニア。中隊の随一のバイク相談役で、同じバイク仲間の陸曹達からの信頼も厚い。

ある日、バイクで外出しようとして営門から出た直後、一時不停止で免停を喰らった伝説の持ち主である。

相棒の三国は山田と同期で、同じく19歳。

高度な歌唱力の持ち主で、宴会で二次会にカラオケでもいこうモノなら彼の独壇場だ。

去年の中隊の忘年会で、中田がYouTubeから拾ってきた替え歌、「愛のメモリー」改め「ハゲのメモリー」を振り付けつきコーラスで歌ったところ、皆拍手喝采の大受けだったが、歌詞と身体的特徴が合致する中隊長の目に、青い炎が宿っていることに彼は気がつかなかった。

かくして彼は、年末年始祭日全て警衛（持ち回りの門番警備）という伝説の持ち主となった。

地雷を埋める4番手・汐見克己二等陸士は去年9月に入隊したての右も左も分からない18歳。

とにかく何でもやってみようとする克己心の強い少年で、3人の先輩からも目を掛けられている。

しかしそれが空回りするコトがたまにキズで、中隊配置後初めての演習の打ち上げで、いきなりテキーラと焼酎のカクテル一気飲みに挑戦し、翌日帰りの高速道路でトラックの荷台から首を出して嘔吐するという伝説を既に打ち立てていた。

以上この4名が「小清水班」、別名「レジェンド・オブ・リーグ」の面子である。

彼等はただ黙々と掘る、入れる、埋めるのスリーアクションを繰り返す。

何事も滞りなく全行程の半分が終わった頃、普通科分隊の指揮官、鴨大介二等陸曹が通信手を引き連れてやって来た。

「やあ、お疲れ。何か無線で大騒ぎしてるよ」

鴨二曹は42歳のベテランだが、入隊が26歳と遅く、昇任も遅れていた。

「ほむら作戦」発動直前に昇級し「縁起悪いなあ」（自衛官の殉職

による特別昇任は、警察官や消防士が2階級なものに対し通常1階級と苦笑していた。

小清水が先任士長の中田を呼び、無線機の外部スピーカーに耳を済ます。

『…り返す。本日1230時をもって日米・北中政府間協議で停戦が発効される。指定された警備部隊を除く各作戦行動中の部隊は、積極的な接敵を避け、現状維持に努められたし…』

まず、最初に意味を理解したのは中田だった。

彼は跳び跳ねながら班員をジェスチャーで集合を掛ける。

何事かといぶかしむ彼らがサイレント映画のコントよろしく、喜色満面で躍り狂うのは簡単だった。状況中なので流石に馬鹿騒ぎする真似はしないが、その様子に通信手が苦笑していた。小清水も沸き上がる嬉しさと葛藤しながらも口元が弛むのを押さえ切れなかった。

戦争が終わった？

こんなクソみたいな島から家に帰れるのか？

「おい坊主達、まだ状況終了じゃないぞ。あと1時間55分ある」

鴨二曹の冷ややかな一言が小清水を現実に戻した。

「全員作業に戻れ」

皆一斉に顔に？が浮かび上がる。

中田が中隊本部に「作業を続けるか問い合わせてみては？」と具申してきたが一蹴する。

そもそも地雷原構築や橋梁爆破の許可命令権者は師団長クラスだ。
現場判断で止めれる話じゃない。

「活性化も予定通り行う。サッサと動け」

それでも持ち場に戻りたがらない彼等に、小清水が蹴りでも入れようかと腰を上げる前に、鴨二曹が血も凍る言葉を投げ掛けた。

「16年のインドネシアで俺も君達みたいにドンチャン騒ぎをしたよ。代償に、こーなった」

おもむろに鉄帽を外し、額から左側頭部にかけてケロイド状に爛れた傷跡を見せる。

2016年の9月。インドネシアイスラム革命軍から停戦を持ち掛けられたUNMI（国連インドネシア派遣部隊）司令部は、実効性に疑念を呈す情報部の警告を無視しし、9月の断食の月にかけて「ラマダン停戦」と呼ばれる停戦決議を受託した。

しかし、布告後12時間で革命勢力の大攻勢が勃発。

長引く活動で疲弊していた各国派遣部隊は、停戦合意のお祭り騒ぎから一転、大惨劇に見舞われた。

ダンハン空港で仏軍部隊と共に包囲された日本隊は、朝鮮半島から緊急転出した米海兵隊に救出されるまでの4日間、多数の犠牲者を出す事態となった。

鴨二曹は空港警備隊の生還者だったらしい。

「美味しい話は疑ってかからないと、人生思いがけずに【状況終了】になっちゃうよ？」

小清水は会社員時代の取引先の非道を思い出した。約束を守らない。契約を平気で反故にする。納期を無視する。勝てば官軍・海外の目など気にしない中国人なら、停戦決議を反故にするくらいやるかもしれない。

頭上で爆音が轟いた。

全員が思わず首を竦め空を見上げると、いつの間にか巨大な積雲が頭上を覆っていた。

爆音に混じり、ジェットエンジンの金切り音も聞こえる。上空では空中戦でもしてるのか？

「何か落ちくてる！」

空を指差して汐見が叫んだ。

小清水は最初、撃墜された戦闘機かと思った。

それは雲の中から、片翼を失い「破片」を撒き散らしながら、火達磨になって墜ちてきた…自分達の頭上目掛けて。

「回避ー！」

鴨が今までののらりくらりとした口調から一転、啞然と立ち尽くす施設科達を鋭く一喝。

我に返った小清水班達は、分隊長を残し一斉に走り出した。慌てて後を追う小清水の背後に、燃えながらゆっくりと墜ちてくる「翼」が迫っていた。

「エンピ2本・地雷搬送箱が破損。その他人員、装備共に異常無し」

周囲に立ち込める肉の焼ける臭いに、顔をしかめながら報告する中田士長に、焦げ跡だらけの小清水は気もなく「了解」と応える。

「班長、何ですかね、コレ？」

「見た感じそのまんまじゃねえの？」

彼の眼前、地面に打ち据えられた直径2メートル前後のクレーターの底には焼け焦げた〈死骸〉が横たわっていた。

明らかに飛行機の類いではない、ワニ擬きの爬虫類に蝙蝠の翼を着けた様な体躯。多分撃墜される前は全長15メートル位はあったと思う。今は体積を半分以上削り取られ、自ら孔けた墓穴に収まっている。

微かに漂うコルダイト火薬の匂いから、この死骸が敵か友軍機か判らないが、戦闘機と交戦して撃ち落とされたのは間違いないようだ。

「小清水くん、これ人が乗ってたみたいだよ」

背後から鴨が消し炭を手にとって来た。

何で解るのか聞こうとして凍りついた。手にした消し炭は人間の腕だったからだ。

「なに手に持ってんです!？」

「気にしない、気にしない。死体は噛み付かないし、銃を撃たない。フム：サイズの割に軽いな？この籠手みたいな甲冑かな？」

鴨二曹とは出会って2日の短い付き合いではあるが、未だ人物像が謎だ。

下らない洒落を連発している昼行灯かと思えば、時折鋭い前線指揮

官の片鱗を見せる。

これは彼の部下も同じらしく、鴨二曹の二面性に皆辟易していた。PKFから帰ってきてからこんな調子らしいと、誰かが言っていたが真相は分からない。

「軽いけど頑丈みたいだね。外は焦げてるが中身は無事だ」

鴨が片手で消し炭から籠手を器用に外し始めた。表面が真っ黒に炭化した籠手の下から細い綺麗な腕が現れた。とても華奢で所々鱗のような模様が入っており、病的なまでに真っ白だった。

「細すぎる、この人女だったみたいだよ？それもすごく若い…」

それを聞いた小清水以下施設科の面々は気分が悪くなった。鴨の部下達も渋面を浮かべてる。

「そんなモン、早く捨ててください！」

「コレが何者か興味は無い？」

再び上空で爆音。

空中戦はまだ続いているらしい。

「我々は作業に戻ります！」

鴨はやれやれと肩を竦め、腕をクレーターに投げ入れると、死体から外した籠手を自分の腕に填めながら配置に戻っていった。後に続く通信手がドン引きしていたが、彼は一向に気にする様子ではなかった。

「作業再開！」

今度は洩る隊員はいなかった。素直に各々の持ち場に戻っていく。その様子に満足した小清水の鼻孔が肉が焼ける臭いを再認識した。今までの緊張と衝撃の連続で気にならなかったが、嗅覚が耐え難いと悲鳴を上げる。

「…の前に、穴を埋めろ！」

今度は皆、露骨に嫌そうな顔を返した。

お知らせ。

兵器年鑑は登場兵器が増えてきたため編集作業で暫くお休みします。

中華内戦の勃発時期を2019年から2018年に変更。

午前11時00分？

空域不明。10SQ（第10飛行隊）・雷電01。

エアブレーキオン、フルフラップ、急速上昇。

HUDのG数値が跳ね上がり、全身の血流が下半身に下がっていく。耐Gスーツが膨張し下半身を締め上げるが、それでも意識が遠退いていく。墜落死より先に脳溢血で死にそうだ。

衝突まで1300フィート。駄目だ間に合わない！？——ベイルアウトを覚悟した赤松は、射出ハンドルを掴んだ。

激突まで1092フィート、HUDの水平バーが上向きに変わった。荷重負担が減り、渾身の力で操縦桿を引く。

地表との距離が急速に離れていった。

地表から十分高度を取ったと思いHUDの高度計を確認するが、まだ故障したままだった。目測で約1000フィート前後だが、高度計は8000フィートを示している。レーダーディスプレイも地表ではなく、飛行中の巨大な障害物だと言い張っていた。

赤松は当てにならないナビゲーションシステムに見切りを付け、VR（有視界飛行）に移った。

周囲は視程10キロ程度の霧に囲まれ、地表以外見える物がない。丁度アルカディアの中央地区上空だった筈、国端富士を基点におおよその位置は判特定できる。

しかし国端富士は無かった。

草原一色……いや、一部岩肌が見えるが地形は平坦そのもので、所々農園とそれらの作業小屋らしき物があるくらいだ。

本能が「ここは何処だ？」と叫んでいた。フライトアシスト系の航法システムは回復しつつあるが、ジャイロとGPSは未だ不調のままだ。

赤松はチャートを出して、最後に確認した速度と飛行時間から飛距離を概算し、飛行圏内で全周10キロ前後の島を探すが、該当するサイズの島は見当たらない。

もしかして東シナ海を越えたのか？

最悪の事態が現実味を帯び始め、赤松の背筋を悪寒が駆け巡った。

「雷電01より富嶽27、応答せよ」

不安を押し殺し、ダメ元でAWACSに呼び掛けたがやはりレシーバーからは空電しか返ってこない。

レーダーを探索モードにシフトし7・3で注意を地上に向ける。

小屋の近くに人影が見えた。小火器の射程に注意しつつ、人影を中心にややロール気味に旋回した。

敵か味方分かれれば多少は判断材料になる。サバイバルベストから単眼鏡を取り出し覗き込んだ。

人影はどう見ても民間人だった。

随分古風かつアイリッシュな出で立ちで、彼女の背後には同じ服装の10歳前後の少女が4人、怯えと興味が半々と言ったところか？女性の後ろに隠れながらF-2Cを指差し何事か騒いでる。

北中国が国端新島に民間人入植者を連れてきたという情報はないし、島の上空を戦前から飛び続けているが、こんな所は見たことがなかった。

単眼鏡越しに女に睨まれた。

30前後の女性、白いカーチフ（被り物）に紺色のくるぶしまで丈が伸びた、袖付きの服。美しい柄の刺繍が施されたエプロン。収穫の最中なのか、手にした籠にはジャガイモのような作物が収まっ

ている。

肌が白人を通り越して白い、それに異様に黒目が大きい。

高度差1000フィート以上、まさかと思いつつ、試しに小さく手を振って見たら子供の1人に元気に手を振り返された。

レーダー警戒装置からメッセージ、全周より未確認機複数捕捉。

慌ててディスプレイに目をやると、四角形のシンボルマークが12個、中心の自機シンボルに向け群がってくる。

統合電子戦システムがデータベースより不明機の電波輻射パターンから機種の洗い出しを始めた。

その間にも続々と機数は増え続けている。

検索完了、HUDの自機シンボルを取り囲む四角形が一斉に三角形、すなわち〈敵機〉に変化。機種は不明、数分前に当機と交戦した記録あり。

……冗談だろ？

右フットバーを蹴り付け、右横転で撃ち下ろされる火球の斉射を避けた。

機体の上面と土手っ腹ギリギリを挟み込むように火の玉が掠めている。

S字スプリットで射線から逃れ、上昇に移る間も無くまたもやレーダー警報が鳴り響く。

今度は低空から12発の火球が撃ち上げられてきた。

運良く全弾機体を掠め、前方300メートルの宙空で一斉に自爆する。

敵もコツを掴んできたのか、段々と火球の炸裂地点が近づいてきている。爆発の衝撃波に翻弄されながらもバランスを回復させたF-2Cに、周囲を編隊を組んで旋回する【敵騎】の壁が迫る。

【敵騎】の首が旋回半径内の支援戦闘機に一斉に向けられた。たちまち鳴り響くレーダー警報に舌打ちし、ハイスピードバンクで右旋回。Gに耐えつつ機首を上げれば、今度は3騎編隊×4の12騎のドラゴンが顎を開いて待ち構えていた。

レーダーコンタクトの直後、赤松は高度を取る間も無くドラゴンの大部隊に取り囲まれ、地表と高度1万メートル前後の間で狩り立てられていた。

更に悪いことに自分は単機で敵の本拠地に乗り込んだらしい、真下にはイングランドのウェンザー城を平たくしたような砦があり、5つあるやたら広いミナレット（塔）から空母の飛行甲板宜しく、後続のドラゴンが続々と離陸し包囲網を濃密にしていく。

パイロット生活11年。自分がスクランブルを受けるのは初めてだった。

高度がぐんぐん落ちていく——このままでは撃墜される。

獲物を取り囲んで退路を断ち、上下で挟み撃ちにする。これがへ敵への戦術らしい。

超音速のアドバンテージを封じられたF-2Cは、数の暴力の前にまさにカモだった。

J/APG-2レーダーの処理能力限界を超えた数の敵シンボルマークが入り乱れるHUDを睨み、脱出の可能性を必死に探す。

敵の有機性レーダー波はイルカや蝙蝠などが放つ、反響測定用高周波の特大版のはずだ。

赤松の口許に獰猛な笑みが浮かんだ。

一気に機首を起こしアフターバーナーに点火した。

下方の編隊が一斉に首を回しF-2Cを狙いすました。

脅威予測対抗システムが、パイロットに視覚と音声で回避行動を求

めがなり散らす。しかし位置測定の断続波が照準固定の連続波に変わるまで待たねばならない。

胃を締め付ける恐怖に耐えること数秒、警報ブザーがレーダー照射を報せる短音から、ロック・オンされた事を示す長音に変わった。

赤松は機体をロールさせながらIRジャマーとチャフ・カートリッジを同時に射出。

胴体のデイスペンサーから打ち出されたアルミコーティングのグラスファイバー片が、金属の雲を形成し低空ドラゴン編隊のヘロック・オンを一手に引き付けた。

一方、2200カンデラの光を放ち降り注ぐフレアを、反撃と誤認した【敵騎編隊】は、チャフの雲へ火球を闇雲に撃ち放つと散開して回避行動を始めた。

6時方向からのロック・オンが全て消え、後ろを気にする必要がなくなった。

上空では12騎のドラゴンが進路を遮るかたちで集合し始めた。

赤松は逆探装置が敵性電波を関知するなり、統合電子戦システムのEW（電子攻撃）モードを立ち上げた。

周波数をドラゴンの照準波に合わせフルパワーで発信。

妨害電波でF-2Cの正確な位置が分からなくなったドラゴン編隊は、トライアングルフォーメーションの頂点【隊長騎】の号令の元、蒼白い光を放つ長槍を抜き放ち、一斉にダイブして反航戦を挑んできた。

敵ながら素早い決断に感心しつつ、赤松は最後の一手に出た。

空対空モード、中距離射程ミサイルスタンバイ。

HUDにAIM-7未装備のため動作不可と表示されるが、コンソールに【訓練】と打ち込み、強引にミサイルソルダート（ミサイル誘導優先）モードで照準レーダー波を浴びせかけた。

HUD内の12騎全てにこけ脅しのロックオン・サインを刻み、火器管制装置は律儀に誘導電波を放ち続ける。

先頭の【隊長騎】が両手を上下に振るなり、編隊がパッと四方に散開した。

ある種類の蛾には、天敵の蝙蝠が発する超音波を感知する機能を持つ。

鯨やイルカもお互いの超音波でコミュニケーションを取る。

ならばドラゴンにも逆探装置に相当する器官がある筈だ。

案の定、というより想像以上の効果だった。

同時に全部ロックされたのにかなり驚いたらしい、傍目にも必死に回避機動をしているのが分かる。

このまま包囲網を抜けられるかに思えた。

接近警報、ボギーズ・ヘッドオン！

【1騎】だけ回避行動を取ることなく突っ込んできた。【列騎】と思われるドラゴンが追いつき制止しているようだが、相棒は構わず長槍を振りかざした。

似たような奴は何処にでもいるんだな…。

【敵騎】との接触まで4秒、遂に【列騎】が説得を諦め離脱した。

HUD内のロックオンサインが明滅して消えた、自動的にガン・モードに移行した。中射程ミサイルの最小射程^{ミナムレンジ}を過ぎたのだ。

ただ包囲を突破できれば良いと考えている赤松は、危険を犯してまで【敵騎】に機関砲の軸線を合わせようと思わなかった。

ボアサイトモード（目視照準）で【敵騎】を掠める程度にトリガーを引く。

5発に1発の割合で含まれる曳光弾が、毎分1000発の発射速度

で一筋の赤い火線となって撃ち出され、目標の傍を掠めた。

【敵騎】はロールを打って射線から逃れていく。

直後、敵があり得ない行動に出た。クラダーが長槍片手に【乗騎】から飛び降りたのだ！

驚愕に固まるパイロットを他所に、主人を失ったドラゴンは翼をすばめ、F-2Cの脇を猛スピードですり抜けて行く。

それに気を取られた赤松の反応が遅れた。

一際光を放つ長槍を振りかざし、コクピットに迫るクラダー。

咄嗟にインテイクへの吸い込みを避けるため、スロットを絞り込み、トリムスイッチで機体を横滑りさせた。

間一髪、キャノピーへの一撃を避けた1000分の1秒の一瞬、キャノピー越しにお互いの目が合った。

男：だったと思う、漆黒の必要最低限の軽量そうな甲冑を着込み、長い銀髪を後ろで纏め左頬からこめかみにかけて三日月を連ねた様な赤い入れ墨。何故か肩当てが深紅にあしらわれていた。

おおよそ高度1万フィートを飛び回る出で立ちではないが、逆に相手はスモークバイザーを下ろしたジェットヘルメットに酸素マスク姿の赤松に驚いていた。

機体に衝撃、HUDに油圧トラブルを示す警告ランプが明滅しはじめた。

最初はクラダーが垂直尾翼にでもぶち当たったかと思った。赤松がシート越しに首をねじ曲げると、胴体中央の各種点検パネル部分から棒が生えているのが見えた。

クラダーは置き土産に槍を機体に突き立て、油圧系統の1つを潰したのだ。

ギョッとしながらも油圧を緊急系統に切り替えると警報は収まり、各システムは正常通り機能を取り戻した。

とにかく命を懸けたクラダーの一撃は徒労に終わったのだ。

気が進まないが、バックミラーでクラダーの姿を探した赤松は、驚愕した。

クラダーは背中からドラゴンと同じ翼を広げ、優雅に空中を旋回していたのだ。

パラシュートのような緊急脱出装置の一種かと思ったが、時折翼が羽ばたくのを見て自前のモノであるのは間違いないようだ。

クラダーはそのままゆっくりと浮揚すると、下で待ち受けていた【乗騎】に華麗にタッチダウンを決めた。

赤松の理性が限界を超えた。

何事か喚き散らしスロットル全開で眼前の雲海へと突入した。

再び往路と同じく航法ナビゲーションシステムがエラーメッセージを表示したが、構わず愛機を最大速度で飛ばし続けた。

とにかく、こんな訳の分からない所から一秒でも早く出たかった。

唐突に雲が切れ、蒼窮の空に、眩しい太陽光バイザーに射し込んだ。いつの間にか航法システムが回復していたが、何も信用でず上昇を続けた。

上昇限界高度に迫り、失速警報で我に返った。

エンジン出力を絞り、【追跡騎】を警戒し、ややバンク気味に水平飛行に移った。【敵騎】は追ってこなかった。

現在地、アルカディア中央地区上空・高度45000フィート。

しかし、システムに疑心暗鬼となっている赤松は、本当にここが日本上空なのか、いまいち信用できなかった。

思い出したように無線機のチャンネルをオープン、途端AWACSの泣かんばかりの呼び掛けが飛び込んできた。墜落したと思っているらしい。

『…こちら富嶽27、雷電01応答せよ。貴機の輝点レーダーに映

らぬ。受信しているならば方位0—0—9へ旋回せよ。雷電01、
こちら富嶽27、緊急周波数^{ガイドチャンネル}で貴機に呼び掛けている。聞こえているならチャンネルシルバーで応答せよ。繰り返す…』

…還ってきた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5724o/>

桃源郷の暑い夏

2011年7月1日16時55分発行